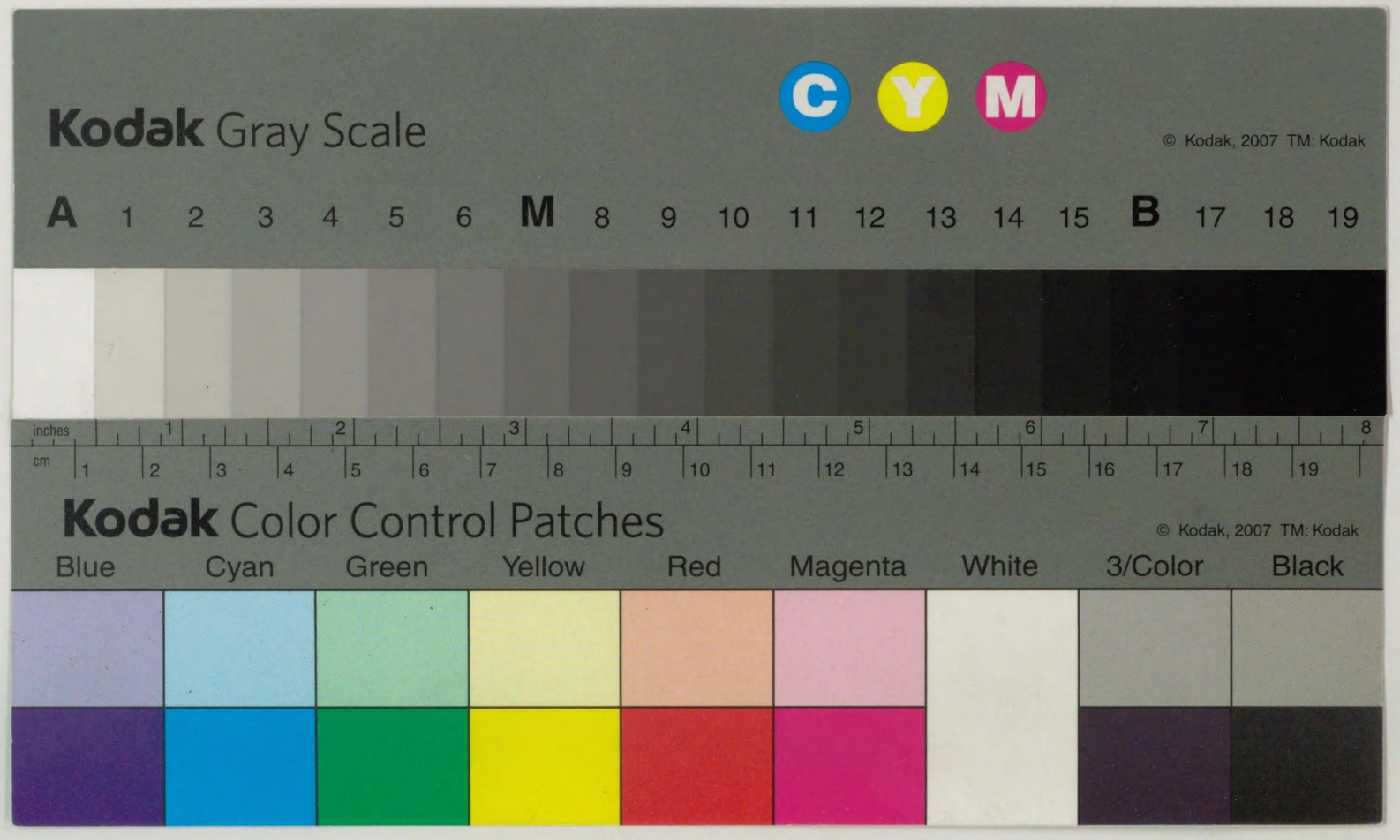


732-76
12005015897765

斗4W-74

枕詞の民物語

吉田義則著

昭和五十六年 文部省 寄贈

732
76

凡例

一本書は本文篇六冊、附卷一冊から成る。

一本書は湖月抄本を底本とし、尾張徳川家所藏の河内本を以て嚴密に對校して本文を立てた。

一繙讀の便宜上、原本の假名書の部分に適宜漢字を充て、宛字を正して、假名遣を統一し、詞と地とを區別し、濁點・句讀點を施し、かつ適當に分節してある。

一底本及び河内本に於て誤刻誤寫の明白なものでも、私意を以て之を改める事なく、又假名遣によつて、意味の兩樣に解せられるもの及び兩本の特色とする點は特に其儘存し、原本の俤をどこまでも忠實に傳へる事に力めた。

一對校の記號としては黒點と括弧とを用ひた。本文右傍の六ポイント活字中、括弧を以て圍んだ部分は河内本で、黒點はそれに相當する詞を缺いてゐる事を意味するのである。

例へば、

いろ〳〵の紙(かな)なるふみどもを・・(中將)引きいでて

とあるのは、湖月抄本には

いろ〳〵の紙なるふみどもを引きいでて

とあるのが、河内本では

いろ〳〵のかなぶみを中將引きいでて

となつてゐるといふ意味である。而して一般に假名の清濁は、「お・(も)ぼし煩ふ」の如く、前後の續きによつて變更するのであるから、この點に特に留意し、從來一句讀を切る事は、半ば意味を解釋するのであるが、印刷の都合上、今それらの句讀を改めた箇所が尠くない。

一湖月抄本には本文の右傍に若干校異を施してあるが、印刷の都合上、今それらの校異は左傍に移した。例へば本書に

あなくるし(ら)　むつまじう(かイ)

とあるが如きは、もと底本に「あなくるし(らイ)」「むつまじう(かイ)」などとあつたのを、河内本と對校し異同を記入する必要上斯く改めたのである。

一註釋は讀者の便を思つて、同註の反復も厭はなかつたのであるが、又多少簡にしたもの、省略したものがないではない。それは附卷の語句索引によつて明瞭ならしめるやうになつてゐる。

一附卷は源氏物語の解題・語句の索引・系圖及び年表から成り、本文篇と相俟つべきは勿論であるが、單獨に分離しても、啻に源氏物語の辭書たるにとどまらず、廣く王朝語・王朝文學の基礎的研究資料たり得る事を信ずるのである。

著者識

卷五所收目次

東屋　一
浮舟　七
蜻蛉　一六三
手習　二三一
夢の浮橋　三三

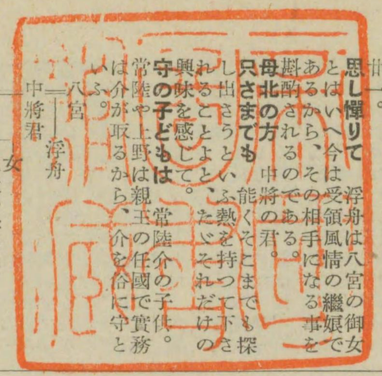
筑波山を　薫は浮舟を手に入れたいお氣持はありながらも、無闇に熱中するのも、人も甚だ輕々しい態度と思ふだらうし、また餘り身分が違ふので人前氣恥かしくもあるので。新古今戀の相手で程度のはれる一重之一。繁山繁けれど思ひ入る波山端山にはさはらざりけり一浮舟が常陸介の繼娘であるからこの歌を引いたのである。薫廿六、浮舟廿一。

思し憚りて　浮舟は八宮の御女とはいへ、今は受領風情の繼娘であるから、その相手になる事を嘲酌されるのである。中將の君。

母北の方　能くそとはでも探し出さうといふ熱を持つて下さつたことよとよと、それだけの興味を感じて。

只さまでも　それだけの**守の子どもは**　常陸介の子供。常陸や上野は親玉の任國で實務は介が取るから、介を合に守といふ。

この扱ひを　介が先妻腹中將腹の實子の世話ばかりをしてゐて



筑波山を分け見はほしき御心はありながら、端山の繁りまであながちに思ひ入らむも、いと人聞きかろ〳〵しう傍痛かるべき程なれば、思し憚りて、薫が浮舟へ御消息をだにえ傳へさせ給はず。清尼かの尼君のもとよりぞ、浮舟の母の所へ薫の仰しやつた趣などを度々匂はしてよこしたのだが母北の方に、宣ひしさまなど、度々ほのめかしおこせけれど、母北方は薫が眞面目に御心に懸けてゐられる事とも思はないからまめやかに御心とまるべき事とも思はねば、薫の只さまでも尋ね知り給ふらむ事とばかり、をかしう思ひて、人柄が此の世に又とありさうもないやうに思はれるにつけても自分の方が相當の身分ならば薫を婿になど敷ならましかばなどこの扱ひを母なくなりにけるなどあまた、中將君の腹即ち浮舟の異父兄弟とこの腹にも、妬次々にすぎ〳〵に五六稱して君とつけてかしづくあり。まだをさなきなど、守の子どもは、先妻腹人ありければ、さま〴〵にこの扱ひをしつつ、他人と思ひ隔てたる心のありければ、常にいとつらきものに守をも怨みつつ、中將君が浮舟を他の娘達よりよい緣につけて見せたいものだといかで、引きすぐれておもだたしき程にしなしても見えにしがなと、あけくれこの母君は思ひあつかひける。浮舟の容姿が十人並で介の實子達さまかたちの、

繼嬢の浮舟を他人として疎外してゐる氣持があつたので。同じごと人には介の實子同様に思はせてもよい譯なのだが。河内本では「ごと」の「こ」の傍に「子」と附記してある。物にもまじらず浮舟は介の實子とは引離れて本當に勿體ないやうに、美しく成人されるのである。

むすめ多かりと 常陸介には嬢が大勢あると評判に聞いて。

言なひいふ 懸想文を送る人々が。

わが姫君を 母北の方は、今度こそ自分の姫君浮舟を、思ひ通りの處へ緣付けたいものだと始終目を離さず世話して、大變に愛撫してゐる。

中らひも 一族の人々も小ぎたない人達ではなく、財産も莫大であつたりなどするので、身分相應に高く構へて。德は富、財産の意。

寸好みしたる 風流がつてゐるわりには、妙に氣性が荒くて。

さるあづまの あんな開けない東國の違い田舎に長年埋もれて居た爲か、發音など殆ど間違ひさうな、あぶなかしい口のきゝ方をする。言葉もすこし訛つてゐるやうで。抬遺物名「あづまにて養はれたる人の子は舌だみてこそ物はいひけれ」

豪家のあたり 權門を怖ろしく面倒なものとして憚り怖ぢ、萬事に行屆いて拔目のない用心深さもある。

をかしきさまに 風流ごと一管絃の道にはうとくて。

いきほひに 受領は財力に富んでゐるから、それに引きつけられて相當の身分の若女房達も集まつて來るのである。

庚申 花鳥餘情「庚申經曰、人腹中有三尸一爲二人大害一、常庚申之夜、上告二天帝一、記二人品過一、絕二人生籍一、庚申夜不レ寢、則不レ得二天上一云々、許渾詩年長每勞レ摧二甲子一、夜寒初共守二庚申一」庚申の一夜を遊び明かすのであらう。

年廿二三ばかり 河内本は本の儘。

きらゝしう きらびやかな派手な生活も出來ないが爲か、今迄通つて行つた女と緣が切れて、今では浮舟に熱心にいひ寄つて來た。**この君は** 左近少將は人柄も相當なものだ、志操も堅固で分別もありさうだもの、人物も上品だ。**これよりまさりて** と言つて少將以上の立派な身分の人はいくら何でも自分達風情の所には寄りつくまい。

と一緒にしておいてよい位ならはなのめに取りまぜてもありぬべくば、母北の方郎ち中將君がいとかうしも何かは苦しきまでもて惱ませ、同じごと思はせてもありぬべき世を、物にもまじらず、あはれに忝く生ひ出で給へば、母が浮舟を田舍で朽ちさせるのが惜しく苦しきものに思へり。むすめ多かりと聞きて、なま君だちめく人々も、音なひいふ・とあまたありけり。先妻腹の娘は初めの腹の二三人は、皆さま〴〵にくばりて、大人びさせたり。今はわが姫君を、思ふやうにて見奉らばやと、あけくれまもりて、撫でかしづくこと限りなし。常陸介守も賤しき人にはあらざりけり。上達部の筋にて、中らひも、物きたなき程々につけては思ひあがりて、家の内もきら〳〵しく、物清げに住みなし、事好みしたる程よりは、あやしう荒らかに、田舍びたる心ぞつきたりける。若うより、さるあづまの方の、遙かなる世界にうづもれて年經ければにや、聲などほと〳〵うちゆがみぬべく、物うちいふ、すこしだみたるやうにて、豪家のあたり、怖ろしく煩はしきものに憚りおぢ、すべていとまたく隙間なき心もあり、をかしきさまに、こと笛の道は遠う、弓をむいとよく引きける。なほ〳〵しきあたりともいはず、いきほひに引かされて、よき若人どもつどひ、裝束有樣はえならずとのへつつ、腰折れたる歌合物語・・・、庚申をし、まばゆく見苦しく、遊びがちに好めるを、この懸想・の君だち、「ららうじくこそあるべけれ。かたちなむいみじかンなる」など、を大人と取沙汰して氣を揉みあつてゐる中にかしき方にいひなして、心を盡しあへるなかに、左近の少將とて、年廿二三・ばかりの程にて、心ばせしめやかに、ざえありといふ方は人に許されたれど、きら〳〵しう今めいてなどはえあらぬにや、通ひ所なども絕えて、いと懸にいひわたりけり。この君は斯かることといふ人々のなかに、人がらもめやすかなり、心さだまりて、物思ひ知りぬべかめるを、人もあてなりや・、これよりまさりて事々しきはの人はた、

（受領）風情の家庭を斯かるあたりを、さはいへど・・（いと）尋ね寄らじ、と思ひて、（浮舟に少将の文を）御方に取次ぎて、さるべき折々は、をかしきさまに返りごとなどせさせ（浮舟をして）奉る。（母一人の料簡で）心一つに思ひまうけて（く）、守こそ（以下母の心）おろかに思ひなすとも、我は命をも譲りて（浮舟に）・・（思ひ）かしづきてむ、（浮舟の器量の美しさが目についた）さまかたちのめでたきを見つきなば、さりとも、おろかになどはよも思ふ人あらじ、と思ひ立ちて、（浮舟と少将との結婚を）八月ばかりと契りて、（調度の）調度をまうけ、はかなき遊び物をせさせても、さま殊にやうをかしう、蒔絵螺鈿のこまやかなる心ばへまさりて見ゆるものをば、この御方にと取隠して、劣りの（まさり）品をば（介に）見すれば、守は（深）よくしも見知らず、そこはかとなき物どもの、人の調度といふ限りは、ただ取り集めて並べすゑつつ、目をはつかにさしいづる（ならば）ばかりにて、こと琵琶（絃楽器）の師とて、内教坊のわたりより迎へ取りつつ（娘達に）習はす。手一つ弾き取れば、（介が）師を立ち居をがみて喜び、祿を取らすること、うづむばかりにもて騒ぐ。はやりかなる曲（どく）のも

守こそ　介こそ浮舟を疎略にしようとも。

さりとも　いくら何でもよもや浮舟を粗末にする人はあるまい。

思ひ立ちて　浮舟を少将にめあはす事を決心して。

はかなき遊び物を　一寸した玩具を造らせるにしても、平凡なのとは違つて恰好も面白く。

こまやかなる　蒔絵や螺鈿のやうな、他の物よりも一層精巧な趣向を凝らしてある調度品をば浮舟の爲にと隠しておいて。

そこはかとなき　とりとめもないがらくたで調度と名のつくものは、善悪選ばず何でも集めて陳列して、やつと目で外が覗かれる位に山と積んでおいて。

内教坊　宮中にあつて舞姫をお女樂踏歌等を調習する所。

手一つ　一曲習ひあげると。

はやりかなる　調子の輕く早い曲などを教へて。

さすがに　無風流ものながら。

殊にあへしらはぬ　格別相手にしないので。

あこをば　私の娘達を浮舟よりも輕く見てあられる。

わが心一つに　自分の一料簡でこんなに急ぐのも甚だ氣の引けることだし第一少將の氣持が知りたいと言ふ事を斟酌して。

よろづ多く　浮舟の事については、私も萬事氣がねが多いのですが。常陸介が世話してくれないので、母北方一人で氣を揉んでゐるので、今迄こんなにいひ寄つて來られて大分時日もたつて居りますので。この一句は「かたじけなう心苦しうて」に續く。

親など　浮舟は父親のない子ですので。

傍痛う　句を隔てて「かねてなむ傍痛う思ふ」といふ句法。

若き人々　常陸介の實の娘達。

思ふ人具したるは　世話をしてくれる人（父や夫）のある娘達は自然安心だと、世話してくれる人にまかせる氣になつて。

のなど教へて、（娘達が樂師と）をかしき夕暮などに、彈きあはせて遊ぶ時は、涙も（とどめ）つつまず、をこがましきまで、さすがに物めでしたり。斯かる事どもを、（浮舟の母は多少わけが分つて）母君はすこし物の故知りて、いと見苦しと、常に怨みけり。斯くてか（左近少將）の少將、（八月）契りし程を待ちつけで、「同じくは疾く」と責めければ、（浮舟の母を）わが心一つにかう思ひ急ぐも、いとつつましう、人の心の知りがたさを思ひて、初めより傳へ（少將の文を）そめける人の來たるに、（媒の人が常陸方へ）近う呼び寄せて語らふ。北方「よろづ多く思ひ憚ることの・あるを、月頃から宣ひて程の經ぬるを、（少將は）なみ〳〵の人にも・物し給はねば、かたじけなう心苦しうて、（婚期を八月にときめたのですが）から思ひ立ちにたるを、親など・物し給はぬ人なら・（め）れば、（私一人で世話するやうなもので）心一つなるやうにて、傍痛う、萬事不行屆に少將に思はれはせぬかとうちあはぬさまに見え奉る事もやと、（今から）かねてなむ思ふ。若き人人あまた侍れど、思ふ人具したるは、おのづからと思ひ讓られ

この君の御事をのみなむ　心配してゐるといふやうな言葉が略されてゐる。

はかなき世の中　世の無常を觀ずるにつけても。明日知らぬ私の身の上だからの意。

もし思はずなる　結婚後、介の實娘でない事が分つて、少將が案外な仕打でもされたら。

氣色あしく　浮舟を介の繼娘と知つて。

守の御むすめ同じ事なれど　常陸介の實娘。浮舟も母北方の娘故要するに同じ事だが、介の實子ではないから、その婿とあつては、人が聞いても一段低く思はうと考へられて、通つてゆくのも具合がわるいから。

ようも案内せで　十分に穿鑿もせずにいゝ加減な事を話したのはけしからぬ。

女どもの　妹が常陸方に奉公してゐる縁故であなたのお手紙の取次を始めたのですが。八頁參照。

他人の子　介に繼娘があるとも聞かなかつたのです。

おもだたしう　立派な人に緣付けて面目を施すやうな事をしようと。

いかでかの邊の　ぜひ常陸方の事を取次ぎ得る人がほしいと仰せでしたので、よい便宜を知つて居りますと申上げた譯なのです。「給へり」の如く。四段の「給ふ」を自卑に用ひた例は十頁四十七頁にもある。

浮びたる罪　少將の「浮びたる事傳へける」といつた詞を受けていふ。

腹あしく　媒は意地わるのおしやべりで。

今樣のことにて　それも今時の風で別段私の越度になる筈もなく。

もてあがめて　娘の親が大事にしてくれるので、それに免じて通つてゆく例も世間にはあるやうだが。

よその覺えなむ　他人の思はくから見れば、私が常陸に詔つての事のやうに取沙汰するだらう。

うけばりたる　自分達こそ實娘の婿だぞと得意な態度で通つて來るその二人の間に伍して、自分が介からも祿に婿扱ひもされぬざまであるといふ事は。

この人追從ありこの媒人はおつか使ひのいやなたちの男で。

こなたかなたに　常陸方に對し又少將方に對し。

誠に守のむすめと　あなたが本氣で介の實子をとのお望みなら。

中にあたる　三人娘の第二女。（一頁系圖參照）

て、浮舟この君の御事をのみなむ。はかなき世の中を見るにも、うしろめたくいみじきを、少將は物の分りさうな方だと聞いて物おぼし知りぬべき御心ざまと聞きて、一切の遠慮も忘れて綴組する氣になつた譯ですがかうよろづのつましさを忘れぬべかめるに、もし思はずなる御心ばへも見えば、人笑へに悲しうなむあるべき」・と申しけるに、媒が「初めより更に守の御むすめにあらずといふ事を聞かざりつる。同じ事なれど、人聞きもけ劣りたるを、少將の君にまうでて、「しか〳〵なむ」・と申しけるに、少將は氣色あしくなりぬ。少將「初めより更に守の御むすめにあらずといふ事を聞かざりつる。同じ事なれど、人聞きもけ劣りたるを、少將の君にまうでて、「しか〳〵なむ」・と申しけるに、少將は氣色あしくなりぬ。

案内せで、浮びたる事・傳へける」と宣ふに、媒がすまなく思つていとほしくなり、私は事情を「媒」くはしく知り給へず、女どもの知るたよりにて仰言を傳へ始め侍りしに、中にかしづくむすめとのみ聞き侍れば、介の守寳子と思ひ込んで居りましたのにこそはとこそ思ひ給へつれ。他人の子持給へらむとも問ひ聞き侍らざりつるなり。浮舟の容姿性質方が浮舟をかたち心もすぐれて物し給ふこと、母北母あが上のかなしうし給ひて、おもだたしうけ高き事をせむと、浮舟を

めかしづかるると聞き侍りしかば、『いかでかの邊のこと傳へつべからむ人もがな』と宣はせしかば、『さるたより知り給へり』と取り申ししなり。更に浮びたる罪侍るまじきことなり」と、腹あしく言葉多かるものにて申すに、君いとあてやかならぬさまにて、少將「かやうのあたりにいき通はむ、人のをさ〳〵許さぬこととなれど、今樣のことにて、咎あるまじう、もてあがめて後見だつに、罪隱してなむあるたぐひもあめるを、同じこととうちうちには思ふとも、よその覺えなむ、へつらひて人いひなすべきに、守にもをさ〳〵受けられぬさまにてまじらはむなむ、いと人げなかるべき」と宣ふ。この人追從あり、うたてある、人の心にて、これをいと口惜しう、こなたかなたにいとほしう思ひければ、媒誠に守のむすめと思さば、まだ若うなどおはすとも、しか傳へ侍らむかし。中にあたる・なむ、姫君とて、守は

中將君
┣女
┗女（左近少將妻）
常陸介
┣藏人式部丞
┗源少納言妻
讃岐守妻（先妻）

かのかんのぬし あの介殿は、人柄も貫目があつて分別のある御仁故。

もはら顔かたちの 自分には器量望みなど一つもない。身分の高い美しい女をとの希望ならばわけなく手に入れられるだらう。

物清くもなく 綺麗な生活も出來ず。

守に斯くなむと 介が男に。一寸いひだしにくさうな顔付をしてつつらを讀んで。介のふてくされたところを。

月頃うちの御方に 此頃中御門の儀様に少將殿から浮舟を望んで來られたところ、御承諾があつて、今月中に婚禮とのお約束がありましたので、日取を見計らつて早々にとの御計畫中。

逢ひたりひがたげなる 介が同心ならば、私には何の異存があらう。實娘を與へてもよいとのお考へならば。

さもと許す 「何かはさもせざらむ」の意。

何かはさも 介の氣持を告げて、介のお考へ一「何かはさもせざらむ」の意。

このわたりに その男は當方に時々出入りするとは噂に聞いてゐるが、まだ會はうとした事もないのに、何をいひに來たのだらう。

君だちの 公達が通つて來るといふ事は、常陸に取入らうとするものやうに世間で取沙汰する事だらう。

ただ私の君の如く 娘の親が婿を内々の主君のやうに大事にかけて、手に載せるやうにし、押をする、その點をなさる公達がおありなやうだもの。

さすがにその顔ひは 「詔ひたるやうなるやうなら」とはいふものの、さすがに是非大事にしてもらひたいと望んでゐるらしてもらひたいと望んでゐるらしかも祿に婿扱ひもされず、相婿よりも輕んぜられるといふ事は具合のわるい事だといふ趣を。

びんなかりぬべきよし 前の「あの申しけるやう」の結びとしては調はぬ文脈である。

いとかなしうし給ふなる」と聞ゆ。少將「いざや、見初から浮舟を望んでおきながら初めよりしかひ寄れる事をおきて、又いはむこそうたてあれ。されどわが本意は、かのかんのぬしの、人がらもものまめやかにしく・大人しき人なれば、後見にもせまほしう、見どころがあつて見るところありて思ひ始めし事なり。もはら顔かたちのすぐれたらむ女の願ひもなし。品あて に艶ならむ女を願はば、やすく得つべし。されど淋しう事うちむ人の身の果はあはぬ、みやび好める人のはてくは、物清くもなく、人にも人とも覺え・たらぬを見れば、すこし人に謗らるるとも、金持の婿なだらかにでもなつて無事に世の中を過ぐさむことを願ふなり。守に斯くなむと語らひて、さもと許す氣色あらば、何かはさもこの媒人は浮舟の事この西の御方にあるたよりに、少將の斯かる御文なども取り傳へ始めけれど、守には委しくも見え知られぬものなりけり。ただいきに守の居たりける前にいきて、申上げねばならぬ子細があつて不如意で而も風雅を好こゝろざしましたことありてなむ」と言はす。守、「このわたりに時々出で入りは

すと聞けど、前には呼び出でぬ人の、何事いひにか・あらむ」と、なま荒々しき氣色なれど、「月頃うちの御方に、消息聞えさせ給出ましたむさぶらふ」といはして、近う居寄りてふを、御ゆるしありて、月をはからひ・、いつしかと思ほす程に、ある人の申しけるやう、『誠に北の方の御腹に物し給へど、かんの殿の御むすめにはおはせず。君達のおはし通はむに、世の聞えなむへつらひたるやうならむ。ずり・やうの御婿になり給ふ斯様の君だちは、ただ私の君の如く思ひかしづき奉りて、手に捧げたるごと思ひ扱ひ後見奉るにかかりてなむ、さる振舞し給ふ人々物し給ふめるを、さすがにその御願ひはあながちなるやうにて、をさをさ受けられ給はで、け劣りておはし通はむこと、びんなかり・ぬべき』よしをなむ、せちに謗り申す人々あまた侍るなれば、

初めより　自分はもと〳〵、常陸は裕福で人の後援者たるべき十分の資格があるといふ聲望、その點を見こんで婿にならうと申込んだ譯なのだ。繼娘があらうとは更々知らなかつたので。この下に「十分詮索もせずに申込んだのだ」の意の省文がある。

もとの御志の　前後の續きから河内本には「まだ幼い實娘も大勢おありになるのだから、私の素志通り私の希望を容れてくれるならば大變嬉しい。

誠に同じことに　浮舟は實子同樣に世話すべき筈の人ですが。

これを他人と　浮舟を他人扱ひして別け隔てをする、とすねたやうな口をきゝまして、浮舟の事には一切私に口出しをさせないのですから。

ほのかに　「聞き侍り」を修飾する。

なにがしを　拙者に見込があつての御所存とは知りませんでした。

いと嬉しく　自分を見込んでとは大變嬉しく存じます。

いとらうたしと思ふ　七頁に媒君として云々」と語つた娘で「二〇頁に「年も「一」中にあたるなむ姫君が十五六の程にて云々」とある。

少將は只今思し煩ひてなむ、『初めより（以下少將の詞）、ただ（かんの殿の）きら〳〵しう、人の後見と頼み聞えむに、たへ（ふ）給へ（ふべる）き御覺えをえらび申し（し事）て、聞え始め申し（し事）しなり。更に他人物し給はむ（ら）といふこと知らざりければ。もとの御志のままに、まだをさなきもあまたおはすなるを、ゆるい給はばいと嬉しくなむ（う）。御氣色見てまうで來（こ）』と仰せられつれば」といふに、守、「更に、斯かる御消息侍るよし、くはしく承らず。誠に同じことに思ひ給ふべき人なれど、よからぬ童べあまた侍りて、はか〴〵しからぬ身に、さま〴〵思ひ給へあつかふ程に、母なるものも、『これを他人と思ひ分けたること』と、くねりいふ事侍りて、ともかくも口入れさせぬ人のことに侍ればほのかに、しかなむ仰せらるる事侍るとは聞き侍りしかど、なにがしを取りどころに思しける御心は知り侍らざりけり。さるはいと嬉しく思ひ給へらるる御事にこそ侍るなれ。いとらうたしと思ふ女童侍り。あまたのなかに、これをなむ命にも換へむと思ひ侍る。宣ふ人々あれど、今の世の人の御心、定めなく聞え侍るに、なか〳〵胸痛き目をや見むの憚りに、想ひ定むることもなくてなむ。いかでうしろやすくも見給へおかむと、明暮かなしく思ひ給ふるを、少將殿におき奉りては、故大將殿にも、若くより參り仕うまつりき、家の子にて見奉りしに、いとやうざくに、仕うまつらまほしと、心つきて、思ひ聞えしかど、遙なる所に、うち續きて過ぐし侍る年頃の程に、うひ〳〵しく覺え侍りてなむ參りも仕うまつらぬを、斯かる御志の侍りけるを、返す〴〵かしこまりながら、仰せごと奉らむは易きことなれど、月頃の御心たがへたるやうにこの人・思ひ給へ・むことをなむ、思ひ給へ憚り侍る」と、いとよろしげなめりと嬉しく思ふ。「何かと思しいはけなく年足らぬ程におはすとも、眞實の

なか〳〵胸痛き　なまなかの緣組をして却つて苦勞する事があつてはの斟酌から。

いかでうしろやすくも　ぜひとも今のうちに立派な緣につけて安心したいものだと始終苦にやんでゐる矢先。この句はずつと後んでの「仰せのごと奉らむは易きことなれど」に續く文脈で、中間は、斯樣に苦にやんでゐる矢先少將殿から有難い申出があつてといふ意味の挿入句である。

いとやうざくに　少將殿は大層すぐれた人物ゆゑ氣に入つてお仕へ申したいとは思つたが。

月頃の御心　今迄のお考へを私が翻意させたやうに妻が思はうかと、それを斟酌して居ります。

何かと思し憚る　何かの斟酌は御無用です。

ただ一所の　北方は問ふ所でないが、

いはけなく　たとひ娘はまだ幼少で未熟であつても、實父の介添で、鄭重にして下さる事を自分は滿足に思ふ。

親の、やんごとなく思ひおきて給へらむをこそ、本意かなふにはせめ。もはら、さやうのほとりばみたらむ振舞すべきにもあらず』となむ宣ひつ。人がらはいとやんごとなく、覺え心にくくおはする君なりけり。若き君だちとて、すき〳〵しくあてびてもおはしまさず、世の有様もいとよく知り給へり。領じ給ふ所々もいと多く侍り。まだ頃の御徳なきやうなれど、おのづから、人の御けはひのありけるやう、直人の限りなき富といふめる勢にはまさり給へり。來年四位になり給ひなむ。こたびの頭は疑ひなく、御門の御口づからごて給へるなり。勅言『よろづの事足らひてめやすき朝臣の、妻をなむ定めざなる、早く適當な妻を選んで碇としたまへ父を設けなさいはやさるべき人えりて後見を設けよ。上達部には、我しあれば、今日明日といふばかりに、なしあげてむ』とこそ仰せらるなれ。何事も、ただこの君ぞ、御門にも親しく仕うまつり給ふなる。御心はた、いみじう警策に、おも〳〵しくなむおはしますめる。

もはらさやうの　父親の知らない纔娘と結婚するといふやうなそんな守に近寄らうが爲にするやうな行爲はすべきものでない。

若き君だちとて　若い貴公子はよくありがちな事だが、少將はそれと違つて。

すき〳〵しくあてびても　實めなる人と也（花）あてびはあてやかなりといふ心也（呀）あてびてもおはしまさず實なる人とほめたり（孟同）と湖月抄にある、「あてび」は上品ぶると釋くが、べきものとおもふ。上品ぶつてなをおもちやうにするやうなことろはおありなさいませぬ。

まだ頃の　まだ現在の財産といふものはないやうですが、少將の日比の生活振りは、平民の底なし財産と世話にいつて居りますが、それ以上の威勢です。「頃の」は「此頃の」の意次頁參照。

頭ごて　「こたせ」である。獨りごたせ給ふの義。

朝臣はやさるべき　對稱人代名詞。湖月抄本はこの「はやさるべき」を「はや」と「定めさなるはや」とに切つて讀んでゐるがそれは誤。

あたら人の御婿を　少將はあつたら立派な婿君ですもの、折角かう申込まれた機會に、御決心なさるがよからう。

ここにしぶ〳〵なる　あなたが澁つてゐるやうな樣子をなさると、少將は他へ氣がお變りにもなりませう。これは全く安心の出來る御話を申上げるのです。

此頃の御徳などの　現在の財産が不十分だといふやうな事は仰しやつて下さるな。

心もとなく何を　何を氣づかはしく不滿足の事と思召さうぞ。

たとひあへずして　たとひ私が中途で死んで奉公をしさしても。

又取り爭ふべき　この娘の外に所有を爭ふ者は外に誰もありませぬ。

大臣の位を　少將が大臣の位を得ようと望んでその贈勞料として世に無類の寶物を調達しようとなさる場合には、私の所に無いものはありますまい。

御後見は　後援の段は私が氣遣なく引受けませう。

あたら、人の御婿を、かう聞え給ふ程に、思ほし立ちなむことはなからめ。かの殿には、我も〳〵婿にどり奉らむと所々はべるなむ。これただしろやすき事を取り申すなり」と、いとあさましく鄙びたる守にて、うちゑみつつ、聞き居たり。「此頃の御徳などの、心もとなからむことはな宣ひそ。なにがし、命侍らむ程は、いただきにも捧げ奉りてむ。心もとなく何を飽かぬとか思すべき。たとひあへずして、一つにても又取り爭ふべき人なし。子ども多く侍れど、これはさま殊に思ひそめたるものに侍り。ただ眞心に思し顧みさせ給はば、大臣の位を求めむと思し願ひて、世になき寶ものをも盡さむとし給はむに、無き物侍るまじ。當時の御門しか恵み申し給ふなれば、御後見は心もとなかるまじ。これかの御爲に

さいはひとあるべき　これが結局両人の仕合となる事かと思ひますがそこは詰合はれませぬが。

寄りつかで　この下に「少将方に参りぬ」などの文が省略されてゐる。

すこしひなびてぞ「いとあさましく鄙びたる守にて」と前頁にあつた。

大臣にならむ贖勞　介が「大臣の位を求めむと思し願ひて云々」といつた事をいふ。

贖勞を取らむ　贖勞料を引受けよう。贖勞とは財物を官に納めて官位を贖ふ事で、茲では贖勞料の意味に用ひてゐる。

志殊に　あの北方がこの縁談に、初めての事であるし、特別、遖切つてゐるだらうに、約束したならば、筋道にはづれた非行のやうに解釋する人もあらうどうしたものだらう。

ただ中のこのかみにて　浮舟は大勢の姫達の中の年長者で「ただ」は句を隔てて「中」にかゝる。

そなたにと　あなたのお申込を浮舟の方に振向けて返事されまでに過ぎないのです。

月頃は　媒の今までの口ぶりでは。

も、なにがしが女のわらはの爲にも、さいはひとあるべき事にやとも知らず」と、よろしげにいふ時に、いと嬉しくなりて、ば、君、すこしひなびてぞあるとは聞き給へど、憎からず、うちゑみて聞き居給へり。まりおどろ〳〵しき事と、耳とどまりける。さてかの北の方には斯くと物しつや。ひが〳〵しくねぢけたるやうに取りなす人もたがへたらむ、ひがあらむ。いざや」と思したゆたひたるを、何か。北の方も、かの姫君をば、いとやんごとなきものに思ひかしづき奉り給ふなりけり。ただ中のこのかみにて、年も大人び給ふを、心苦しきことに思ひて、そなたにとおもむけて、申されけるなり。」と聞ゆ。月頃は、又なく世の常ならずかしづくといひつるものの、今突然掌を反すやうにうちつけに斯くいふもいかならむ、と思へども、なほ一わたりはつらしと思はれ、人にはすこし譲らるとも、ながらへて頼もしき事をこそと、いとまたく賢き君にて、思ひ取りてければ、北の方は人知れず急ぎ立ちて、契りし暮にぞおはし始めける。よし〳〵しうし給ふ。御方をも、頭洗はせ、取りつくろひて見るに、少将などいふ程の人に見せむも、惜しくあたらしきさまを、あはれや、親に知られ奉りて生ひ立ち給はましかば、おはせずなりにたりとも、大将殿の宣ふらむさまに、おほけなくとも、などかは思ひ立たざらまし、されど、うち〳〵にこそ斯く思へ、ほかの音聞きは、守の子とも思ひ分かず、又實を尋ね知らむ人も、なか〳〵おとしめ思ひぬべきこそ悲しけれ、など思ひ續く。いかがはせむ、さかり過ぎ給はむもあいなし、賤しからずめやすき程の人の、斯く懇に宣ふめるを、など心一つ

ながらへて　次の「いとまたく賢き君にて」の句をこの上に移して解く。「少将は實に如才ないかしこい方故、百年保全の道を講ずるのが得策だと悟つたので。

北の方は　浮舟の母はこの事を知らないから、少将を迎へる準備をするのである。

少将などいふ　少将などいふ低い自分の人に緣づけるのも惜しくあつたらものと思はれる程の美しさであるので。

大将殿の　薫殿のお申込みの通りに、よしそれが分不相應な緣組であるにしても、何で應じない事があらう。

ほかの音聞きは　世間では常陸の實子やらどうやらも知らないどうせ實子と思つてゐる筈はないの意。

又實を尋ね知らむ　浮舟は八宮の姫君で高貴の血筋だといふ實情を知つてゐる人も、父宮から認められなかつたといふ理由で卻つて輕蔑されさうなのが悲しい。

いかがはせむ　少将ではちと不十分だが。

女はまして　男の常陸でさへまるめこまれたのだもの、淺はかな女はまして。

明日明後日　結婚の日が。

そそめき　そそくさ騒いでゐると。

あこの御懸想人を　わが娘の懸想人（少將）を横取りして浮舟の婿にしようとされたのは、身の程を顧みない幼稚な仕業です。

めでたからむ　宮様の落胤といふやうな結構な姫君をほしがる公達はありますまい、あまり結構すぎて。

賤しく異樣ならむ　さうした結構な姫君よりは、拙者どもの娘の方が生憎望まれるやうな賤しい變りものです。

もはら本意なし　少將の方では浮舟は少しも望む所でないといつて他に乘換へてしまひさうでしたので、同じ婿にするならと思つて、では御望み通りに、と常識では考へられないやうなあぶなく怪しくいやうな（人の心の動きも願みないやうなおしやべりをしてゐた。

に思ひ定むるも、媒の斯く言よくいみじきに、女はましてすかされたるにやあらむ。明日明後日と思へば、心あわただしくそがしきに、こなたにも心のどかに・ねられたらず、そそめきありくに、守外より入り來て、ながながと、滯るところもなくいひつづけて、「我を思ひ隔てて、あこの御懸想人をばはむとし給ひけるが、おほけなく心をさなき事。めでたからむ・御むすめをば、要ぜさせ給ふ君だちあらじ。賤しく異樣ならむなにがしらが女子をこそ、いやしうも尋ね宣ふめれ。かしこき計劃を立てられたがく思ひくはだてられけれど、もはら本意なしとて、ほかざまへ思ひなり給ひぬべかなれば、同じくはと思ひてなむ、さらば御心、と許し申しつる」など、怪しくあぶなく、介は人の氣持などと頓着しない人だ人の思はむとこ ろも知らぬ人にて、いひ散らし居たり。北の方、あまりの事にいはれで、とばかり思ふに、世の中の心憂さをかきつらね、涙も落ちぬばかり思ひつづけられて、やをら立ちぬ。

さりとも人には　いくら何でも浮舟は介の實娘には引けを取らまいと、その點で不緣になつた悲しい氣持が慰められる。

おのれは同じごと　私はもとも實子繼子の區別なしに世話はしてゐるものの、浮舟の配偶と思ふ人の爲には、命も讓りたいとまで思つてゐるのです。

親なしと　それなのにあの少將といふ人は、浮舟をてなしと輕蔑しいふ、あの次女はまだ幼くて一人前にもならぬ人ですもの、姉への浮舟を差越えて、こんな變換へしていいものだらうか。守が少將の申出でをこんなに名譽として承諾もし大喜びしてゐるやうだから。河内本は本の儘。

あさましく云々　少將も守も何れも似たりよつたりなあきれた人達だもの、一切かうした事には口を出すまいと思ふ。

あたら御さまをも　勿體ないやうな浮舟のお人柄が分らないのでせう。

母北方が浮舟方へ

こなたにわたりて見るに、浮舟はいとらうたげにをかしげにて居給へるに、さりとも人には劣り給はじとは思ひ慰む。浮舟の乳母と二人、北方「心憂きものは人の心なりけり。おのれは同じごと思ひあつかふとも、この君のゆかりと思はむ人のためには、命をも讓りつべくこそ思へ。親なしと聞きあなづりて、常陸の第二女まだをさなくなりあはぬ人を、さし越えて、斯くはいひなるべしや。かく心憂く近きあたりに見じ聞かじと思ひぬれど、守の斯くおもだたしき事に思ひて、受取りさわぐめれば、あさましくあひ〳〵にたる世の人の有樣を・・・、すべて斯かることに口入れじと思ふ。いかでここならぬ所に、暫しありにしがな」とうちなげきつついふ。乳母もいと腹立たしく、わが君を斯くおとしむる事と思ふに、「何か。これも御さいはひにて、違ふ事とも知らず。斯く心口惜しくいましける君なれば、あたら御さまをも見知らざらまし。わが君をば、心ばせあり物思ひ知りたらむ人にこそ見

日常を見たり聞いたりしたくないものだとは決心したが

あはれにはた　それに、浮舟を熱心に所望されるのです。御宿縁にまかせて薫に縁づけるやうに御思案遊ばせ。

おぼろげならむ　並大抵の女はめとらぬ。

左のおほ殿　夕霧。河内本は右大臣の「右」の右傍に「左」と記してある。

いかばかりの　どんな女を眞面目に愛されようぞ。薫が眞面目に妻として愛してくれる女はまづなからうの意。

それはたげに　成程女三宮の御殿も結構な所にはゐますが、んでは、さうした蔭の女ではたまらない事です。

物思はしげに　六君の事などで苦労してゐらるらしい様子を見ますと、身分などはどうでもよいから、側目も振らずに一人を守つてくれる男が、世間體もよし、力強い事でせう。

このいといふかひなく　今の夫常陸はお話にもならぬ、情味のない、ざまのわるい人ですが、一本氣な二心のない人である事を知つて居るので、安心で今迄連れ添つて來たのです。

折節の心ばへの　何の折の心構へが。

かたみに云々　腹の蟲の收まらない場合には、お互に口喧嘩をしてでも氣を晴らしたものです。

上達部親王たち　公卿や親王達といつた風な優雅な奥ゆかしいお方に連れ添ふにしても、自分がつまらぬ身分では連れ添ひがひもあるまい。

よろづの事わが身から　萬事が自分の身分次第によるものだと思ふと、浮舟を薫にとは思ひながらも、こちらの身分が身分故浮舟を萬事につけて可愛さうに思つて居ます。

女房などやがて帳なども　以下北方にいふ詞。この部屋は御婚禮臺などもの、新調のやうだもの、急な事になつたやうだから、此處は此儘で、調度類をあちらに移したり、いろ〳〵模樣がへはすまい。

めやすきさまに　母北方が、體裁よく瀟洒に、どこもかしこも十分にしてある室内であるのに餘計な事に屏風を持つて來て、鬱陶しい程澤山立て並べ。

せ奉らまほしけれ。薫大將殿の御さまかたちの、ほのかに見奉りしに、さも命延ぶる心地・し侍りしかな。あはれにはた聞え給ふなり。御宿世にまかせて、さもおぼし寄りねかし」といへば、北方「あな怖ろしや。人のいふを聞けば、年頃、『おぼろげならむ人をば見じ』と宣ひて、左のおほ殿、後に紅梅右大臣按察の大納言、式部卿の宮の御かしづきむすめを得給へる君は、いかばかりの人をか、まめやかには思さむ。かの母宮などの御方にあらせて、時々も見むとは思しもしなむ。それはたげにめでたき御あたりなれども、いと胸痛かるべきことなり。宮のうへの、かくさいはひ人と世に申すなれど、物思はしげに思したるを見れば、いかにもいかにも、二心なからむ人のみこそ、めやすく頼もしきことにはあらめ。わが身にても知りにき、故宮の御ありさまは、いとなさけなさけしく、めでたくをかしくおはせしかど、人かずにも思

さざりしかば、いかばかりかは心憂くつらかりし。このいとふかひなく、なさけなくさまあしき人なれど、ひたおもむきに二心なきを見れば、心やすくて年頃をも過ぐしつるなり。折節の心ばへの、かやうに愛敬なく用意なきことこそ憎けれ。しくはぬ事をばあきらめつつ。上達部親王たちにて、みやびかに心恥かしき人の御あたりといふとも、わが數ならではかひあらじ。よろづの事わが身からなりけりと思へば、よろづに悲しくこそ見奉れど、いかにぜひとも浮舟を物笑ひにならぬやうに立派な緣につけてやりたいと・・・守は急ぎ立ちて、「女房など、こなたにめやすきあまたあなるを、この程はあらせ給へ。やがて、帳などを新しくしたてられためる方を、事俄かになりにためれば、取りわたし、とかく改むまじ」とて、この西の方に來て、立ち居とかくしつらひさわぐ。めやすきさまにさはらかに、あたり〳〵あるべき限りした

厨子二階　扉のある棚。扉のない二段の棚。

人の御心は　北方にいふ詞。あなたの腹はすつかり分つた。

ただ同じ子なれば　私の實娘だつてやはりあなたの子なのだから、いくら何でもかうまでほつたらかされる事がなからうと思つて居つた。

されば　さういふ水臭い仕打をされるから、もう宜しい。實母のない娘は世間にいくらもある。けつこう私が立派にやつて見せる。

何か人の異ざまに　なに、北方が浮舟の婿にと魂膽された人を何も横取りするでもあるまいとは思ふが、何分人柄が優れてゐて、又と得がたいあつたらお方だから。

この程のいかめしく　婚約中の常陸の婿に對する態度が堂々たるもので、豫て望んでゐたに違はないことと、總て難點もないやうに滿足して、浮舟に約束した夜をも變へずに、その晩から通ひ始めた。

ひが〳〵しきやうなれば　守は母が浮舟ばかりをかはいがるやうに考へてゐるから、浮舟の世話をするのはまちがつた事のやうに見えるのでの意。

その事と　格別の用事もないのに手紙をあげては不躾かと遠慮致しまして、平素は差控へて御無沙汰してゐるのですが。

いと忍びて　お邸の内に人目を忍んで居られさうな隱れ場がございましたら誠に嬉しく存じます。

數ならぬ　つまらぬ私一人の庇護にはゐられないで、苦勞ばかりの多い世の中でございますので、お縋り申す先としてはまづあなたを。浮舟を引取つて保護して下さいの意。

又見苦しきさまにて　浮舟が零落して見苦しい有樣でゐるのを知らぬ顏してよそに聞いてゐるのも心苦しからう。

殊なる事なくて　格別の事もなしに姉妹二人が別れ〳〵になつてゐるのも。

る所を、さかしらに屏風ども持て來て、いぶせきまで立て集めて、厨子二階など、北の方見苦しく見れど、口入れじといひてしかば、ただに見聞く。御方は北おもてに居たまへり。守、「人の御心は見知り果てぬ。ただ同じ子なれば、さりともいと斯くは思ひ放ち給はじとこそ思ひつれ。されば、世に母なき子はなくやはある」とて、次女むすめを、聿より乳母と二人、撫でつくろひ立てたれば、にくげにもあらず。年十五六の程にて、いと小さやかにふくらかなる人の、髮うつくしげにて小袿の程なる、裾いとふさやかなり。常陸はこれをいとめでたしと思ひて、撫でつくろふ。守「何か、人の異ざまに思ひ構へられける人をしも、と思へど、人がらのあたらしく警策に物し給ふ君なれば、我も〳〵と婿に取らまほしくする人の多かなるに、取られなむも口惜しくてなむ」と、かの仲人に謀られていふもいとをこなり。男君も、この程のいかめし

く、思ふやうなることと、よろづの罪あるまじう思ひて、その夜もかへず來そめぬ。

母君、御方の乳母、いとあさましく思ふ・・。ひが〳〵しきやうなれば、とかく見あつかふも心づきなければ、宮の北の方の御もとに御文奉る。北方文「その事と侍らでは、狎れ〳〵しくやとかしこまりて、え思ひ給ふるままにも聞えさせぬを、つつしむべき事侍りて、暫し所かへさせむと思ひ給ふるに、いと忍びてさぶらひ給・ひぬべき隱れの方さぶらはば、いとも〳〵嬉しくなむ。數ならぬ身一つの蔭に隱れもあへず、あはれなる事のみ多く侍る世なれば、賴もしき方にはまづなむ」・・と、うち泣きつつ書きたる文を、あはれとは見給ひけれど、故宮の、さばかり許し給はでやみにし人を、つましく、又見苦しきさまにて世にあふれむも、知らずがほにて聞かむこそ心苦しかるべけれ、殊なる事なくて、かたみに散

大輔　中君の侍女。

さるやうこそ　中君にいふ詞。浮舟を八宮の子といふのも、それだけの事情があるのでございませう。無愛相なすげやうない御返事をなさるな。浮舟のやうな母の卑しい者が立派な御兄弟の中に一人二人あるといふ事は世間にありがちの事です。

かの西の方に　二條院の西對に隠れ場を用意しませう。むさくるしい所ですが、それでも御辛抱が出來さうでしたら當分おいで下さい。

なか〳〵　少將の遣約からこんな結果になつた事を却つて嬉しがつてゐる。

守少將の　常陸は少將をもてなすのに、どれ程鄭重にしようかと思案するのに。

東絹　東國産の粗末な絹。祝儀として差出したのである。

下衆　少將の供人。

りぼはむも、なき人の御ために見苦しかるべきわざを、おぼし煩ふ。大輔がもとにも、「さるやうこそは侍らめ。人憎くはしたなくもな宣はせそ。斯かる劣りの者の、人の御なかにまじり給ふも、世の常の事なり。あまりいとなさけなく宣ふまじき事なり」など聞えて、「さらばかの西の方に、隠ろへたる所しいでて。いとむつかしげなめれど、さても過ぐい給ひつべくば、暫しの程」といひつかはしつ。いと嬉しと思ほして、人知れず出で立つ。御方も、かの御あたりをば、睦び聞えまほしと思ふ心なれば、なか〳〵、斯かる事どもの出で來たるを、嬉しと思ふ。守、少將のあつかひを、いかばかりめでたき事をせむと思ふに、そのきら〳〵しかるべき事も知らぬ心には、ただ荒らかなる東絹どもを、おしまろがして、御供の人には投げ出でつ。食物も所せきまでなむ運びいでてののしりけるを、下衆などは、それをいとかしこきなさけに思ひければ、君も、いとあらまほしく、心かしこく取り寄りにけり、と思ひけり。北の方、この程を見捨てて知らざらむも、ひがみたらむ、と思ひ念じて、只するままにまかせて見居たり。

客人の御・でゐ、さぶらひとしつらひ騒げば、家は廣けれど、源少納言東の對には住む、男子などの多かるに、所もなし。こ

の御方に客人住みつきぬれば、廊など・ほとりばみたらむに、住ませ奉らむも飽かずいとほしく覺えて、とかく思ひめぐらす程、宮にとは思ふなりけり。この御方ざまに數まへ給ふ人のなきを、あながちに參らす。乳母若き人々二三人ばかりして、西の廂の、北に寄りて人げ遠き方に局したり。年頃斯く遙かなりつれど、うとく思すまじき人なれば、參る時は恥ぢ給はず。いとあらまほしく、けはひ殊にて、若君の御あつかひをしておはするを、あながちに參らす。

君も　少將も大層滿足して、この縁組は賢い思ひつきであつたと喜んで居つた。

この程を　この婚禮の騒ぎをよそに知らぬ顔してゐるのもすねたやうに見えようと怀へて。

客人の御でゐ　これは少將のお部屋だと、これはお供部屋だと大騒ぎして設備するので。「でゐ」は出居、さぶらひは侍所。

この御方に　浮舟の部屋には少將が住んで居るので、廊などといふ端近な所に浮舟を住ませるのも不滿足で氣の毒に思はれて。

この御方ざまに　浮舟の身内に然るべき後援者のないのを見くびつて常陸がこんな事をするのだらうと北方は思ふので。

殊にゆるい　格別認めては下さらなかつた中君の所ではあるが强ひて浮舟を差上げる。

西の廂の　二條院の西廂の間の北寄りの、人のあまり出入りしない所に浮舟の部屋を設けてある。

年頃斯く　年來かうして離れて遠々しかつたが、もと〳〵八宮に仕へてゐた女房だから疎々しくなさるべき筈の人でないので、御殿に參る折には恥かしがらずにお會ひになる。

われも故北の方には　浮舟の母中將の君は故北方の姪。

ここには 二條院では御物忌の爲に浮舟が來たのだといひなしてあるので誰も尋ねては來ない。

こたみは 今迄はあわたゞしく歸つて行つたのだが。

宮わたり給ふ 匂宮が二條院に來られた。

櫻を折りたる 「花櫻折る」などと同樣容姿の美しい形容。

あたり〳〵の それ〴〵擔任の事務を。

わが繼子の 常陸の先妻腹の。

こよなき 宮のすばらしい御樣子を拜して。

あはれこは何人ぞ 嗚呼何たる御立派な方だらう。こんな方のおそばにおいでになる中君の運のよさよ。

めでたき人々と いくら結構なお身分の方でも、妻につらい思ひをおさせになつてはと、今迄は當て推量からさうした方々には氣が進まないでゐたのはとんでもない思ひちがひであつた。

かやうに見奉り こんな風に通つて來て下さつて御目にかゝるのは、誠に有りがたいわけのものだ。

御かたちども 御兩人の御容姿は誠に綺麗で似合の御夫婦である。

宮たちと聞ゆれど 同じ宮樣でも實に格段の相違のものだ。

御臺こなたに運んで來る。 お膳を中君の部屋に運んで來る。

わがいみじき寶を 自分が家では善美を盡してゐる積りでは居るが、平凡な家庭は殘念なものだと感じたので。

かやうにて こんな風に宮樣に連れ添はせて見ても見苦しくはあるまい。

ゆだけき塾を 父の常陸介が富裕を頼んで后にもと心ざして居る娘達は、同じくわが腹ではあるが、浮舟とは樣子が段違であると思ふにつけても、やはり今後も、理想は高く持つべきものだと、一晩中將來の企望を描き續けて居つた。

離れ奉るべき人かは、仕うまつるといひしばかりに、數まへられ奉らず、口惜しくて斯く人にはあなづらるる、と思ふには、斯くし・ひてむつび聞ゆるもあぢきなし。こゝには御物忌といひてければ、人も通はず、二三日ばかり母君も居たり。こたみは・心のどかに、この御有樣を見・る。宮わたり給ふ。ゆかしくて物のはざまより見れば、いと清らに、櫻を折りたるさまし給ひて、わが賴もし人に思ひて、つら・う怨めしけれど心にはたがはじと思ふ常陸守より、あひ膝まづきさぶらひて、この事かの事と、あたり〳〵の事ども、家司どもなど申す。又若やかなる五位ども、顏も知らぬどもも多かり。わが繼子の式部の丞にて藏人なる、うちの御使にてまゐれり。御あたりにもえ近く參らず、こよなき人ぞ、斯かる御あたりにおはするをでたさよ、よそに思ふ時は、

めでたき人々と聞ゆとも、つらき目見せ給はばと、物憂くおし量り聞えさせつらむあさましさよ、この御有樣かたちを見れば、棚機ばかりにても、かやうに見奉りかよはむは、いといみじかるべきわざかな、と思ふに、若君いだきてうつくしみおはす。女君短き几帳を隔ておはするを、おしやりて、物など聞え給ふ。御かたちどもいと清らに似合ひたり。故宮の淋しくおはせし御有樣を思ひくらぶるに、宮たちと聞ゆれど、いとこよなきわざにこそありけれ、と覺ゆ。几帳のうちに入り給ひぬれば、若君は、・・・乳母などもてあそび聞ゆ。人々參りあつまれど、惱ましとて大殿籠り暮しつ。御臺こなたに參る。よろづの事、け高く心殊に見ゆれば、ほ〳〵しき、人のあたりは口惜しかりけり、と思ひなりぬれば、わがむすめも、かやうにてさし並べたらむに・、かたはならじかし、ゆだけき勢をたのみて、父ぬしの、后にもなしてむと思

ひたる人々は、同じわが子ながら、けはひこよなきを思ふも、なほ今より後も、心は高く使ふべかりけり、と夜一夜あらまし ごとに思ひつづけけり。

匂宮、翌日たけて起き給ひて、御装束などし給へば、宮が北方が宮をゆかしう覚えて參るべし」とて、御宮が正装なさった姿のぞけば、うるはしく引きつくろひ給へる、はた似るものなく け高く愛敬づき清らにて、若君をえ見捨て給はで、もてあそび おはす。御粥強飯などまゐりてぞ、こなたより出で給ふ。今朝 二條院に より參りてさぶらひの方にやすらひける人々、今ぞまゐりて物 小綺麗にしてこれといふ取柄もない殺風景な顔をしてゐる人で など聞ゆるなかに、清げだちてなでふ事なき人のすさまじき顔 これが例の左近少將である したる、直衣着て太刀佩きたるあり。お前にて何とも見えぬを、 (若き人々)、女房「かれぞこの常陸守(殿)の婿の少將な。初めはこの御方 浮舟にと定めけるを、『守のむすめを得てこそいたはられめ』などい 守から ひて、かじけたる女のわらはを得たるなるなり」。女房「いざ、この御

はた 打解けた姿もいいが、といつて正裝の御姿は。

え見捨て給はで 手放しては出かけかねて。

強飯 今の普通の御飯。

今朝より參りて 今朝御機嫌伺ひに來てお供部屋の方で休息して居つた連中が。

今ぞ參りて 宮のお出かけと知つて。今迄は遠慮して待つて居つたのだが。

お前にて 宮の御前では一向目につかないのを。

守のむすめを 常陸の實娘を貰つて大事がつて貰ひたい。

かじけたる女のわらは 常陸の次女を罵つていふ詞。

この御あたりの 二條院の人々は私は常陸殿の方から、

少將をめやすき 今迄少將を相當な人物と考へて居つた自分の心も殘念で。

げに殊なる事云々 成程少將は格別な所もない人であつたやうだ。「げに」は「一七頁に乳母が、「斯く心口惜しくいましける君なればこ」といつた詞を受ける。

立ちかへり寄りおはしたり 若君愛撫の樣を寫して、中君の境遇を想はしめ、それを見る北方の心中を描かうとしたものである。

あたりの人はかけてくたよりのあるなり」・と、よく聞 (御もと)より、 (ぞ)(な)で、人の斯くいふにつけても、げに殊なる事なかンべかりけりと 少將を一層輕蔑する氣になつた 程と思ひける心も口惜しく、いとどしくあなづらはしく思ひなりぬ。若君の這ひい らで、御簾のつまよりのぞき給へるを、うち見給ひて、立ちか 匂宮方を 宮が へり寄りおはしたり。若君の方へ 匂御心地よろしく見え給はば、明石中宮の 直に歸つて來ませやがてま かでなむ。なほ苦しくし給はば、今宵は宿直にぞ。今は一夜を 隔つるも覺束なきこそ苦しけれ」とて、暫し慰め遊ばして、出 若君を で給ひぬる・さまの、かへすく見るとも見るとも飽くまじく して、笑ひ給ふ・・。北方の心に さうく しくぞ 匂宮の 出で給ひぬる名殘、北方「いみじくめでて奉れば、田舍びたると思 明石中宮の 北方「故うへの亡せ給ひし程は、いとかかな

女君の 北方が中君の御前に出て來て匂宮の事を頻にほめ立てると、中君は北方を田舍めいてゐると思召してお笑になる。

故うへの 故北方が亡くなられた時は、あなたは生れたばかりの赤ちやんで、どうなられる事かと、おそばの人も故宮もお歎きになつたのですが。

こよなき御宿世の　かうした結構な御宿命があつたからこそ、あんな山里にお育ちになつたのです。

口惜しく故姫君の　殘念にも大君の亡くなられたのが、ものたりなく思はれます。

世の中の怨めしく　匂宮に六君といふ人があつたりして。

古へ頼み聞えける　昔力にして居つた兩親達に死別れした事はそれも世間の常と却つて諦めがついて――母君はお顏も存ぜずじまひになつた事だから――居るのですが。「あるを」は「世の常に思ひなされてあるを」と續くのである。

くをさなき御程にて、いかにならせ給はむと、見奉る人も故宮もおぼし歎きしを、こよなき御宿世の程なりければ、さる山ぶところのなかにも、生ひ出でさせ給ひしにこそありけれ。口惜しく、故姫君のおはしまさずなりにたるこそ、飽かぬことなれ」など、うち泣きつつ聞ゆ。君もうち泣き給ひて、「世の中の怨めしく心細き折々も、又かくながらふれば、すこしも思ひ慰めつべき折もあるを、古へ頼み聞えける・蔭どもにおくれ奉りけるは、なか〳〵に世の常に思ひなされて、見奉り知らずなりにければ、あるを、なほこの事に心の移らぬよしを愁へつつ、淺からぬ御心のさまを見るにつけても、いとこそ口惜しけれ」と宣へば、大將殿の、よろづの事に心おごりし給ふらむかし。おはしまさましかば、なほこの事せかれしもし給はざらましや」など聞ゆ。「いざや、

おはしまさましかば　御存命で薫の北方になつてゐられたならば、二宮御降嫁の事もお取止めになつたでせうに。

やうのものと　姉君が生きてゐられたならば姉妹共に同樣の運命（姫君は二宮に、中君は六君におされて）だと人から笑はれるやうなつらい思ひをすることであつたらう、それも卸て見じめであらう。**故宮の御のちの**　父宮の後世の事までも十分に氣をつけて親切に世話して居つて下さるやうです。

かの過ぎにし　あの亡くなられた大君の御かはりに探し出して世話したいものだと。

さもやと　薫に差上げようかなどとは畏多くて思ひも寄るべき筋合の事ではございませんが。

一本ゆゑにこそは　それも大君の妹なればこそさうまで仰しやつて頂くのだと、畏多い事ながら、薫の御親切があり難くも身にしみます。古今雜上「紫の一本ゆゑに武藏野の草はみながらあはれとぞ見る」

命侍らむ限りは　私の存命中はなにかあに、朝夕の慰めぐさでさまされる事でせう。併し私の死後は、意外な姿におちぶれたりするのが悲しくて、思案に餘つてゐるのが、いつもその事尼にして、深い山の中にでも住まはせて、世事は斷念して居ります。人として婚姻などいふ世事は斷念して居ようかなどとも考へて

（か）・やうのもの（事）と、人笑はれ（へ）なる心地せましも、なか〳〵にやあらまし。中途で若死にされたからこそ大君の事が奥ゆかしく思はれるのだとは思ひますが見果てぬにつけて心にくくもある世にこそはと思へど、併し薫といふ人はかの君は、いかなるにかあらむ、怪しきまで物忘れせず、故宮の御のちの世をさへ、思ひやり深く後見ありき給ふめる」など、何のこだはりもなく心うつくしう語り給ふ。北方「『かの過ぎにし御かはりに尋ねて見む』と、この數ならぬ人をさへなむかの辨の尼君には宣ひける。薫がもやと思ひ給へ寄るべき事には侍らねど、一本ゆゑにこそはと、添けれど、あはれになむ思ひ給へらるる御心深さなる」などいふついでに、この君をもて煩ふこと、泣く〳〵語る。委しくは語らないこまかにがはあらねど、浮舟の處置に困つてゐる旨を少將との縁談は誰も承知の事と思ふ故人も聞きけりと思ふに、少將の浮舟を思ひあなづりけるさまなどほのめかして、北方「命侍らむ限りは、何か、朝夕の慰めぐさにて見過ぐしつべし。うち捨て侍りなむのちは、思はずなるさまに散りぼひ侍らむが悲しさに、尼になして、深き山にや・侍らましなどなむ思し据ゑて、さる方に世の中を思ひ絶えて・

何か　いやなに、浮舟が人から輕蔑されるのも、それは私共のやうに孤兒になつた者の常です。

さりとも　いくら固い決心を持つて居つても隱遁生活で通すといふ事は出來ないわけのものだから、父宮が隱遁生活をさせようとすつかりきめておかれた私でさへ、この通り思ひがけない生活をしてゐる事ですから。前半は一般について、後半は中君自身につき、隱遁生活遂行の困難なる事を述べて浮舟出家の事に反對したのである。

常陸殿とは　いかにも國司風情の妻らしく見えた。

故宮のつらう　故宮が浮舟を疎外して冷淡な扱を遊ばしたので。

いとど人げなく　妾腹な上に父宮から認められなかつたから。

見給ふれど　湖月抄本「見給れど」

浮島の　常陸が陸奥守であつた時の物語。新古今戀五山口女王「一隱籠の前に浮きたる浮島の浮きて思ひのある世なりけり」古今雜下「世の中は昔よりやは憂かりけむわが身一つの爲になれるか」拾遺戀五「一つの我身一つの憂きからにこの世をも恨みつるかな」

かしこ　常陸方卽ち北方の自邸の事。

さすがに　前の「斯くてさぶらはまほしく云々」を受ける。

斯かる程の　こんな受領風情の妻に身を落すのは殘念なものであつたといふ事が自分でも身にしみて居りますので、浮舟の身の上は一切あなたに任せきりにして私は構ひますまい。

げに見苦しからでも　自分の妹の事であるから、浮舟が見苦しくなくてほしいおもふ。「げに」は二一頁の「又いと苦しきさまにて世にあふれむも知らずがほにて聞かむこそ心苦しかるべけれ云々」を受ける。

かの人形　あの大君の身代りを探し求めてゐられる薫にこの浮舟をお目にかけたいものだ。

客人　浮舟。

ひ給へわびては、思ひより侍る」・といふ。中君「げに心苦しき浮舟の有様にこそはあなれど、何か、人にあなづらるる浮舟の御有様は、かやうになりぬる人のさがにこそ。さりと・もえ絶えこもらぬわざなりければ、むげにその方に思ひおきて給へりし身をだに、都に出て斯く心より外にながらふれば、まいていとあるまじき御事なり。かたちをやつして尼になられるのもお氣の毒に思はれるほどの美しさです浮舟のやつい給はむも、いとほしげなる御さまにこそ」など、分別顏におつしやるから人びて宣へば、母君いと嬉しと思ひたり。ねびにたる北方は年ふけた樣子さまなれど、風情がないでもない樣子よしなからぬさまして清げなり。いたく肥え過ぎにたるなりしに、いとど人げなく、人にもあなづられ給ふと見給ふれど、む常陸殿とは見えける。北方「故宮のつらうなさけなく思し放ちたかう聞えさせ御覽ぜらるるにつけてなむ、古への憂さも慰み侍る」など、年頃の物語、浮島のあはれなりし事も聞えいづ。北方「わが身一つのとのみいひ合する人もなき筑波山の有樣も、斯くあきらめ聞えさせて、いつも〳〵いと斯くてさぶらはまほしく思ひ給へなり・侍りぬれど、かしこには、よからぬあやしのものども、いかに立ちさわぎ求め侍らむ。さすがに心あわただしく思ひ給へらるる。斯かる程の有樣に身をやつすは、口惜しきものになむ侍りけると、身にも思ひ知らるるを、この君はただまかせ聞えさせて、知り侍らじ」など、かこち聞えかくれば、げのになむと見給ふ。かたちも心ざまも、え憚に見苦しからでもあらなり、物恥ぢもおどろ〳〵しからず、さまよむまじうらうたげなるものから、かどなからず、近くさぶらふ人々にも、うこめいたるものから、物などいひたるも、昔の人の御さまいとよく隱れて居給へり、怪しきまで覺え奉りてぞあるや、かの人形もとめ給ふ人に見せ奉らばや、と打ち思ひいで給ふ折しも、「大將殿まゐり給ふ」と人聞ゆれば、例の御几帳引きつくろひて心づかひす。この客人の母君、北方「いで見奉らむ。ほのかに見奉りける人の、いみじきものに聞ゆめれど、宮の御有樣にはえ並び給はじ」といへば、

お前にさぶらふ　中君のおそばにゐる女房達。

むかひておはせし　薫と匂宮と對座の御樣子。

取り放ちては　別々に見れば、何れも優劣がつけられませぬ。

かたちよき人は　器量のよい人は他人を見ばえなくしてしまふのが憎い。前の「宮はいとなさけなげに見にくくこそ見え給ひしか」に應ずる詞。

されどお前には　けれども宮は薫に壓倒される事はございますまい。どんな方でも宮を見る影もないやうにする事は出來ませぬ。

げにあなめてた　前の「宮の御有樣にはえ並び給はじ」を受けて「げに」といふ。

すずろに　何かしら薫にはお目にかかりにくく、きまりがわるくて。

額髪なども　きまりがわるいから自然身づくろひもされるのである。

御前　前驅の人々

宮たちの　中宮腹の皇子達が中宮のお側にゐられなかつたので。

今朝もいと　今朝も大層なまけて遲參された事は、多分あなたが引きとめておかれた爲の過失だと、面白からず推察して居ります。

げにおろかならず　宮の代理を勤めて懃意をつくろつて下さつたとは、ほんに並々ならぬ御同情ある御心づかひです。

さしもいかでか　どうしてさういつまでも大君の事が忘れられないではゐられよう。これはやはり最初深く思ひこんでの事のやうに申し出されたのだから、すつかり忘れてしまつたやうには思はれたくないとの事か、などと思つては見られるが。

あはれなる　中君も岩や木では心持が分つて來る。薫の眞實なるお文集四「人非二木石一皆有レ情」

斯かる御心をやむる　伊勢物語一戀せじと御手洗川にせし御禊神は受けずぞなりにけるかな」

かの人形　大君の代りの浮舟。浮舟の事を人形といふやうになつたのは宿木卷二八五頁九行以下參照。

お前にさぶらふ人々、「いざや、えこそ聞え定めね」と聞えあへり。中君「むかひておはせしさま、宮はいとなさけなげに、見にくくこそ見え給ひしか。取放ちては、いづれもともかくもわかれず。かたちよき人は、人を消つこそ憎けれ」と宣へば、人々笑ひて、女房「されどお前にはおされ奉り給はざめり。いかばかりならむ人か宮をば消ち奉らむ」などいふ程に、今ぞ車より給ふなりと聞くほど、かしかましきまで追ひののしりて、とみに度をいふも見え給はず。待たれたる程に、歩み入り給ふさまを見れば、げにあなめてた、をかしげとも見えずながらぞ、なまめかしうあてに清げなるや。すずろに見え苦しう恥かしくて、額髪などもひきつくろはれて、心恥かしげに用意多く、きはもなきさまぞし給へる。うちよりまゐり給へるなるべし、御前どものけはひあまたして、「よべ后の宮の惱み給ふよし承りて參りたりしかば、宮たちのさぶらひ給はざりしかば、いとほしく見奉りて、宮の御代りに今までさぶらひ侍りつる。今朝もいと懈怠しあいなう御あやまちに推し量り聞えさせてなむ」と聞え給へば、「げにおろかならず思ひやり深き御用意になむ」とばかりいらへ聞え給ふ。宮はうちにとまり給ひぬるを見おきて、ただならずおはしたるなめり。例の物語いとなつかしげに聞え給ふ。事に觸れて、ただ古への忘れがたく、世の中の物憂くなりまさるよしを、あらはには言ひなさで、かすめるよしを、あらはには言ひなさで、かすめ愁へ給ふ。さしもいかでか世をへて心に離れずのみはあらむ、なほ淺からずいひそめてし事の筋なれば、名殘なからじとにや、など見なし給へど、人のくままに、あはれなる御心ざまを、岩木ならねば思ほし知る。恨み聞え給ふ事も多かれど、いとわりなくうち歎きて、斯かる御心をやむる御禊をせさせ奉らまほしく思ほすにやあらむ、かの人形とて、宣ひいでて、「いと忍びてこのわたりになむ」と、

うちつけに　浮舟の事を聞くなり直に中君を浮舟に思ひかへる氣にもなれない。**その本尊**　本尊とは浮舟の事。宿木卷二八八頁四行に「人形の願ひばかりにはなどかは山里の本尊にも思ひ侍らざらむ」とあつた。本尊たる浮舟が私の願望を叶へて下さるならば有りがたくもありませうが、時々なやましい思ひをしなければならぬやうでしたら、却つて煩惱の種になりませう。**思ひいづれば**　中君が浮舟の事をいうて薫から遁れようとするのが、大君が中君に讓つたのに似てゐて緣起がわるい。**見し人の**　浮舟が大君の身代りであるならば、始終そばにおいて、大君を戀しく思ふ時々に、その戀しさを撫で移して捨てる撫物にしよう。形代は我が身にかたどつた人形の事で、御禊の折に、その人形に總ての罪穢れを移して流し捨てるもの。**みそぎ河**　撫物は御禊の時川に流してしまふ物ですもの、浮舟を一生お側において頂かれるものと安心は出來ませぬ。**引く手あまたに**　伊勢物語「大幣の引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ」**さかしらなれど**　いらぬおせつかいだけれど。**遂に寄る瀬は**　伊勢物語「大幣と名にこそ立てれ流れても遂に寄る瀬はありといふものを」**いとうれたきやうなる**　古今戀五「水の泡の消えてうき身といひながら流れてもなほ頼まるるかな」の歌によって書いたもの。

ほのめかし聞え給ふを、彼も（薫の心に浮舟もいい加減には考へられず）なべての心地はせず、ゆかしく（見たくなつたが）な
りにたれど、うちつけにふと・（思ひ）・移らむ心地はたせず。薫「いで
や、その本尊（ほとけ）・（も）・願ひ滿て給ふべくばこそ尊からめ、時々心や（朝夕常に逢つてゐ
ましく（ることが出來ないで）ば、なか〳〵山水も濁りぬべく」と宣へば、はて〳〵は、
中君「うたての御聖・（の）・心や」と、（中君が）ほのかに笑ひ給ふも、をかしう聞
ゆ。薫「いで、さらば傳へ（私の心持を何もかも浮舟の母に）果てさせ給へかし。この御のがれ言葉
こそ、思ひいづればゆゆしく」と宣ひて・（も）・、又涙（大君を想ひ出して）ぐみぬ。
薫　見し人の形代（かたしろ）ならば身に添へて戀しき瀬々（折々の意であつて水の緣語）のなで物にせむ
と、例のたはぶれにいひなして、まぎらはし給ふ。
中君「みそぎ河瀬々にいださむ撫物を身に添ふ影と誰か頼まむ
引く手あまたにとかや、さかしらなれど、いとほしくぞ侍るや（浮舟が可愛さうです）」
と宣へば、薫「遂に寄る瀬は（私の心の落着き所はいふ迄もなくあなたです）更なりや。いとうれたきやうなる水
の泡（水の泡と何れ劣らぬ我戀のはかなさを思ふと悲しい事です）にも爭ひ侍るかな。かき流さるる撫物（私はあなたに捨てられる撫物です）・（は）・、いで誠ぞかし。
いかで慰むべきことぞ」などいひつつ、暗うなるも・（例の）・うるさ（中君の心に）

かな」の歌によって書いたもの。**怪しと思ふらむ**　薫が長居しては。**さらばその**　ではそのお客様に私の願ひは長年の事ですもの、突然の思ひ付だなどと淺い心と誤解しないやうにお傳へ下さつて、恥をかかないで濟むやうならば願ひます。**いとうひ〳〵しう**　戀路に不馴れな私は戀にかけては萬事痴呆に近い様です。**乳母のゆくりかに**　乳母が急場の思ひつきで浮舟を薫にあげなさいと度々勸めた事を、とんでもない事と退けたのだが、今このの立派なお姿を見ては、年に一度でもよいからこんな夫を通はせたいものだ。**東めきたる**　長年の東國生活で。**寄り居給へる**　伊行釋引歌「わぎもこが來ては寄り添ふ眞木柱そも睦まじやゆかりと思へば」**時々見奉る**　始めて見た北方の驚嘆はさこそあれ、時々お目に懸る中君の女房までが。

ければ、中君「假初に物したる人（浮舟の母）も、怪し・（く）・と思ふらむ（も）とつつまし
きを、今宵はなほ疾く歸り給ひね」と、こしらへ（すかして）やり給ふ。薫
「さらばその客人（浮舟の母の事）に、斯かる（浮舟を望む心）心の願ひ年經ぬるを、うちつけにな
ど、淺う・（は）・思ひなる（す）まじう、宣はせ（ひ）・（こ）知らせ給ひて、はしたなげ（私の願ひを叶へて下さいの意）
なるまじうばこそ。いとうひ〳〵しうならひにて侍る身は、何
事・（に）・もをこがましきまでなむ」と、（中君に）語らひ聞えおきて出で給ひ
ぬるに、この（浮舟の）母君、「いとめでたく（う）思ふやうなる（薫の）御さまかな」と
めでて、（浮舟の）乳母の・ゆくりかに思ひ寄りて度々いひしことを、あ
るまじきことにいひしかど、この（薫の）御有樣を見るには、天の川を
わた（へだて）りても、斯かる彦星の光をこそ待ちつけさせめ、わがむす（浮舟）
めは、なのめならむ（平凡な男に縁づけるのは）人に見せむは惜しげなるさまを、夷（えびす）めきた
る人をのみ見ならひ（見なれて）て、少將をかしこきものに思ひけるを、く（立派な男と）
やしきまで思ひなりにけり。（薫の）寄り居給へりつる眞木柱も茵（しとね）も、
名殘（歸られたあとの）匂へる移香、いへば（口に出せばわざと作つたと思はれる程）いと殊更めきたるまでありがたし。時

香のからばしきを　香の芳ばしい事を貴い事と佛が仰せられおかれたのも御尤もだ。

薬王品　法華經第二十三章。

牛頭栴檀とかや　薬王品「若有レ人聞二是薬王菩薩本事品一、能隨喜讃善者、是人現世、口中常出二牛頭栴檀之香一、身毛孔中常出二牛頭栴檀之香一、正法念經云修羅と戰ふ時牛頭栴檀を疵にぬれば卽癒と云々牛頭の如くなる山也其山に栴檀は生する也。

行ひもいみじく　佛道修行遊ばしたから、身内からこのやうに香氣が發散するのだ、薬王品にあるやうに。

すずろにゑみて　もう薫をわが婿にしたつもりで。

君は忍びて　中君は薫が内々仰しやつた事を母北方にほのめかされる。

執念きまで　執念深いと思はれる程慥々しく變改なさらぬ方のやうですが。

げに只今の　女二宮のおありになると、現在の有様などを考へて見るとうるさい氣持はしませうが。

かの世を背きても　あの尼になつてもなどと考へられるのと同じ事に考へて女一人を捨てたつもりで薫にあげて御覽なさい。二九貞に「尼になして深き山にやらふ」などいつた事を受けていふ。

鳥のね聞えざらむ　古今戀一「飛ぶ鳥の聲も聞えぬ奥山の深き心を人は知らなむ」

げに人の御有様　成程あなたの仰しやる通り薫の御様子を拜見しますと。

数ならぬ身に　数ならぬ浮舟の身の上で、その爲一層物思ひの種を蒔かせるやうな結果になつて、私もそのやうなやみを見なければならぬ事になりませう。

それもただ　それも全くあなたの御考へ次第です。お見捨てなくあなたのやうになりと宜しくお願します。

きし方の　今迄薫が心深かつたので、うつかり口をきつたが、これから先の事は分らないもの。

車など　常陸から北方を迎への車などを。

いと腹立たしげに　娘の婚禮をよそに他に長居をするのは何事ぞなどと。

いはほのなかに　出家させるなりどうするなり思案して居る間中、不束者ながらお見捨てなく何事も教へてやつて下さい。古今雜下「いかならむ巖の中に住まばかは世の憂き事の聞えこざらむ」

時見・・(なれ)奉る人だに、薫を見る度ごとにめで聞ゆ。女房「經などを讀みて、功徳のすぐれたることあめるにも、香のかうばしきをやんごとなき事に佛の宣ひおきけるもことわりなりや。薬王品などにも、取り分きて宣(はべ)へ・る、牛頭(ごづ)栴檀とかや、おどろ〳〵しきものの名なれど、まづかの殿の近く振舞ひ給へば、佛はまことし給ひけりとこそ覺ゆれ。薫がをさなくおはしけるより、行ひ・もいみじくし給ひければよ」などいふもあり。又、女房「さきの世こそゆかしけれ」など、口々めづることどもを、すずろにゑみ

じの心にてこそ、鳥のね聞えざらむすまひまで思(う)給へおきつれ。げに人の御有様けはひを見奉り思ひ給ふるは、下仕の程などにても、斯かる人の御あたりに馴れ聞えむはかひありぬべし。まいて若き人は、心つけ奉りぬべく侍るめれど、數ならぬ身に、物思ひの種をやいとど蒔かせて見侍らむ。高きもみじかきも、女といふものは、斯かる筋にてこそこの世後の世まで苦しき身となり侍るなれ、と思ひ給へ侍ればなむ、いとほしく思(う)給へ侍る。それもただ御心になむ。ともかくも思し捨てず物せさせ給へ」と聞ゆれば、いと煩はしくなりて、いざや、きし方の心深きに打解けて。ゆく先の有様は知りがたきを」とうち歎きて、殊に物も宣はずなりぬ。

明けぬれば、車などゐて來て、守の消息など、いと腹立たしげにおびやかしたれば、北方「忝くよろづに頼み聞えさせてなむ。なほ暫し隱させ給ひて、いはほのなかにともいかにとも、思ひ給

いと心細く　「ならはぬ心地に、立ち離れむことをいと心細く思へど」と句をおきかへて見る。

若君おぼつかなく　宮は若君の事が氣がかり故、微行の體で、御車なども常と違つた網代車のやつれたのに召して歸つて來られた所へ北方の車にでくはして。

なぞの車ぞ　薫の車かと疑はれての詞。

かやうにてぞ　こんな風にして忍び女の所からは紛れ歸るのだと御自分の經驗からさう思ひ付きなさるのも氣味のわるい事である。

御前ども殿こそ　受領風情の妻に殿呼ばりは耳ざはりだ。

まして正身を　身分でさへ一人前らしくなりたいのだから、まして姫自身をつまらぬ人の妻にしてしまふのは大變惜しく思ふやうになつた。

ここに通はし　當家に出入りさせてありますか。

殊に今めかしう　田舍者故格別當世風な女にも見えないやうだのに、それを何か意味ありげに仰しやる事よ。

常に取りない　何でもない事をいつも意味ありげに解釋して、人に不審を抱かせるやうな事ばかり仰しやつて無實の罪をきせなさる。後撰戀二「思はむと頼めし事もあるものを無き名を立てただに忘れぬ」の語だけを借りたもの。

左のおほ殿の君だち　夕霧の子息達。

人々　中君の女房達。

方々へめぐらし侍るほど、數に侍らずとも、思ほし放たず、何事をも教へさせ給へ」などと、打泣きつつ聞えおきて、この御方も、いと心細く、ならはぬ心地に、立ち離れむことをいかめしくをかしく見ゆるにも嬉しく思ほえけり。車引きいづる程のすさがに嬉しくこしあかうなりぬるにも、宮、うちよりすかで給ふ。若君おぼつかなく覺え給ひければ、忍びたるさまにて、御車なども例ならでおはしますにさしあひて、おしとどめ立てたれば、廊に御車寄せてをり給ふ。「なぞの車ぞ、暗き程に急ぎ出づるは」と目とどめさせ給ふ。かやうにてぞ忍びたる所にはまぎれ出づるかし、と御心ならひに思しよるもむくつけし。「常陸殿の御前ども申す。若やかなる御前ども、「殿こそあざやかなれ」と笑ひあへるを聞くも、げにこよなの身の程やと、悲しく思ふ。ただこの御方のことを思ふ故にぞ、おのれも人々

しくならまほしくおぼえける。まして正身を、なほ〳〵しくやつして見むことは、いみじくあたらしく思ひなりぬ。宮入り給ひて、「常陸殿といふ人やここに通はし給ふ。心ある朝ぼらけに、急ぎ出でつる車添ひなどこそ、殊更めきて見えつれ」など、なほ思し疑ひて宣ふ。聞きにくく傍痛しと思して、大輔などが若くての頃、友だちにてありける人は、殊に今めかしうも見えざめるを、故々しげにも宣ひなすかな。人の聞きとがめつべき事をのみ、常に取りない給ふこそ。無き名は立てて」とうち背き給ふも、らうたげにをかし。明くるも知らず大殿籠りたるに、人々あまた參り給へば、寢殿にわたり給ひぬ。后の宮は、事々しき御惱みにもあらで、怠り給ひにければ、心地よげにて、左のおほ殿の君だちなど、甚うち韻塞などしつつ遊び給ふ。夕つ方宮こなたにわたらせ給へれば、女君は御ゆするのほどなりけり。人々もおのく〳〵うち休みなどして、お前には人もなし。

小さき童　中君の召使ふ童女。

さうぐ〳〵しくてや　中君の洗髪がすむまで自分一人でぼんやり相手もなしにゐるでもあるまい。

げにおはしまさぬ　「げに」は「一折あしき御ゆするの程こそ云々」を受ける。匂宮がおいでにならぬ時にばかりいつもは髪をお洗ひになるのです。「すます」は洗ふ意。

日もなし　髪を洗ふべきよい日がない。洗髪には日柄や月を選んだのである。

西の方　西の對即ち浮舟の隠れてゐる所。

例ならぬ童　見馴れぬ童女即ち浮舟の召使である。

今參り　新參者。

帷子一重を　几帳の垂布一重を

几帳の手にかけて。

紫苑色　表薄色裏青。

女郎花　表は經青綿黄裏は青。

今參りの　新參の女房の中の萬更ではないのだらうと想像して。

端近く添ひ臥して　浮舟が端近の所で脇息に脩向き加減にもたれて庭の景色を眺めてゐるのであつた。

例の御心は　宮の例の浮氣心には只にはおけなくて、浮舟の裾をとらへて。

屏風のはざま　屏風と襖との間にすわられた。

名のりこそ　名前が聞きたい。

さるもののつらに　さうした屏風などの蔭に顔を外の方に向けて誰やら分らぬやうにしてゐられるので。

このただならず　これはあの懸想の心をほのめかしてゐられる大將かも知らぬ。

小さき童のあるして、匂「折あしき御ゆするの程こそ見苦しからめ」と聞え給へば、大輔「げにおはしまさぬひまぐ〳〵にこそ例はすませ。怪しう日頃も物憂がらせ給ひて、今日過ぎ・ば、この月は日もなし。九十月はいかでかは・とて、仕うまつらせつるを」と、大輔いとほしがる。若君も寢給へりければ、そなたにこれかれある程に、宮はたたずみありき給ひて、西の方に例ならぬ童の見えつるを、今參りのあるか、など思して、さしのぞき給ふ。中の程なる障子の、細目にあきたるより見給へば、障子のあなたに、一尺ばかり引きさけて、屏風立てたり。その屏風の端に一重をうちかけて、紫苑色の花やかなるに、女郎花の織物と見ゆるかさなりて、袖口・・・・・さしいでたり。屏風の一枚たたまれたるより、心にもあらで見ゆるなめり。今參りの口惜しからぬなめりと思して、この廂に通ふ障子を、いとみそかに押しあけ給ひて、宮がやをら歩み寄り給ふも人知らず。こなたの廊のなかの壺前栽の、いたりの石高きほど、いとをかしう色々に咲き亂れたるに、遣水のわたる・なりけり。あつまよりのぞき給ふに、宮とは思ひもかけず、例こなたに來馴れたる人にやあらむと思ひて、起きあがりたる樣態、いとをかしう見ゆるに、例の御心は、・過ぐし給はで、衣の裾をとらへて給ひて、こなたの障子は引き立て給ひて、屏風のはざまに・・・居給ひぬ。怪しと思ひて、扇をさし隱して、見かへりたるさまいとをかし。扇を持たせながら、とらへ給ひて、匂「たれぞ。名のりこそゆかしけれ」と宣ふに、むくつけくなりぬ。さるもののつらに、顔を外ざまにもて隱して、いといたう忍び給へれば、このただならずほのめかし給ふらむ大將にや、かうばしきけはひなども思ひわたさるるに、いと恥かしくせむ方なし。乳母、

人げの例ならぬを、怪しと思ひて、あなたなる屏風をおしあけて來たり。乳母「これはいかなる事にか侍らむ。怪しきわざにも侍るかな」と聞ゆれど、憚り給ふべきことにもあらず。かくうちつけなる御しわざなれど、言・葉多かる御本性なれば、何やかやと宣ふに、暮れ果てぬれど、「誰と聞かざらむ程はゆるさじ」とて、馴れ〳〵しく臥し給ふに、宮なりけりと思ひ果つるに、乳母いはむ方なくあきれてゐたり。大殿油は燈籠にて、女房「今わたらせ給ひなむ」と人々いふなり。お前ならぬ方の御格子どもぞおろすなる。浮舟の部屋は離れの渡り場に捨てゝあつてこなたは離れたる方にしなして、高き棚厨子一よろひばかり立て、屏風の袋に入れこめたる、所々に寄せかけ、何かの荒らかなる障碍も大ざつぱであつて通路の樣なるさまにし放ちたり。かく人の物し給へばとて、浮舟がゐられるからといつて掃除もせずにめのさぶらふ來て、格子おろしてここに寄り來なり。今浮舟のゐる所「あな暗や。まだ大殿油もまゐらざりけり。御格子を苦しきに急ぎまゐ御本くらきに

人げの例ならぬを　人のけはひがいつもと違ふので。

かくうちつけなる　斯樣に出來心からのお仕事ではあるが。

言葉多かる　宮は多くの口數をきく御性質故。

誰と聞かざらむ　名前を聞かぬうちは放さない。

今わたらせ　中君の御洗髮がすんで今すぐにお部屋にお歸りになりませう。

お前ならぬ　中君のお部屋の格子だけを除いて他は皆おろすのである。

棚厨子一よろひ　棚のある厨子を一雙。

まだ大殿油も　まだおあかしもつけなかつたのですね。

宮もなま苦しと　右近の來るのを聞いて、かうした所を見られるのを心苦しく思召さないではない。

見給へごうじて　長い間見まもつて居つて疲れました。

袿姿　袿だけで上に直衣や狩衣などを着ない姿。

女の　浮舟の同意なき事と想像されるので。

右近はいかにか　私は何とも申上げる詞はありませぬ。直に參つて中君にこつそりお知らせしませう。

かたはに　中君に知らせる事を皆が見ともない事と思ふけれども。

右近がいひつる　右近の話し具合から見ても並々の新參者ではないやうだ。

心づきなげに　浮舟は不愉快なとりすました態度もしないけれども。

りて、闇にまどふよ」とて、引きあぐるに、宮もなま苦しと聞き給ふ。乳母としても氣の強い女でおぞき人にて、「右近にいふ詞に、見給へごうじてなむ。桂姿なる男の、いとかうばしくて添ひ臥し給へるを、例のけしからぬ御さまと思ひ寄りにけり。女の、心はさぐり寄るに、短氣なはやりかせ給ふまじき事と推し量らるれば、右近「げにいと見苦しき事にも侍るかな。右近はいかにか聞えさせむ。いま參りて、お前にこそは忍びて聞えさせめ」とて立つを、あさましくかたはに誰も誰も思へど、宮はおぢ給はず。あさましきまであてにをかしき人かな、なほ何人ならむ、右近がいひつる氣色も、いとおしなべての今參りにはあらざめり、と心得がたく思されて、といひかくいひ怨み給ふ。心づきなげに氣色ばみてももてなさねど、ただいみじう死ぬばかり・・・・思へるがいとほしければ、な

しかぐ〳〵こそ　只今宮がかくかくの有様でいらつしやいます。どんな氣持でいらつしやるかお氣の毒の事です。

うしろやすく　安心の出來るやうにお預り下さいと。

いかが聞えむ　何と申上げようぞ。宮は次のやうなお癖の方でどうせ聞きなさらないのだから。

さぶらふ人々も　侍女達でも、すこし若々しく一寸した器量なのは、其儘ではおきなさらず、けしからん浮氣癖の方なのだから、何とも申上げる詞もない。

皆打解けて　平素も早寢するのだから、今日もおいでが遲くなる事だらうと思つて皆氣をゆるして寢てゐられる、だから相談も出來ない。

かの乳母こそ　前に「物づつみせずはやりかにおぞき人にて」とあつた。あの乳母は氣の强い人だ。浮舟の側を離れないで番をしてゐて。

心なき折の　（細）たはふれにいへり、眞實にいふにあらず（孟）。句宮の浮舟の方に入おはするをりふし、中宮の御なやみを告きたれば句のため心なきをりとは右近がいふ也、眞實心なき折といふにあらず（哂）以上湖月抄。今はかひなくも　かうなつては今更どうにもならないのだから。

まだしかるべし　まだ事實には及んでない。

すこし心あらむ　すこし物の分つた人は、宮ばかりか、私をまでもきらひさうな事だ。

參りて　右近が句宮の御前に。

宮のさぶらひ　中宮職の侍。

出で給はむことの　句宮はこの場を去るのが非常に殘念なので人目を憚酌しようともなさらないので。

西おもてにて　寢殿の西面で浮舟の居る方である。宮もそこにゐられる。右近はわざ〳〵御使を西面にまはして、宮に聞えよがしに御容態を尋ねると。

大夫　中宮大夫。

をやさしくなだめられるさけありてこしらへ給ふ。右近、うへに、「しか〴〵こそおはしませ。いとほしくいかに思ほすらむ」と聞ゆれば、「例の心憂き御さまかな。かの母も、いかにあはれ〳〵しくけしからぬさまに思ひ給はむとすらむ。『うしろやすく』と返す〴〵いひおきつるものを」と、いとほしく思せど、いかが聞えむ、さぶらふ人も、すこし若やかによろしきは、見捨て給ふなく、あやしき、人の御癖なれば。いかでかは思ひより給ひけむと、あさましきに、物もいはれ給はず。右近「今日は上達部あまた參り給ふ。日にて、遊び給ひては、例も斯かる時はおそくもわたり給へば、皆打解けて休み給ふぞかし。さてもいかにすべき事ぞ。かの乳母こそおずまし（ぞ）かりけれ。つと添ひて居てまもり奉り、引きもかなぐり奉りつべくこそ思ひたりつれ」と、「いでや、今はかひなくもあべい事を、をこがましく、あまりなおしかるべし」と、忍びてささめきかはすを、うへは、いと聞きにくき、人の御本性にこそあめれ、すこし心あらむ人は、わがあたりをさへうとみぬべかンめり、と思す。參りて、御使の申すよりも、今すこしあわただしげに申しなせば、動き給ふべきさまにもあらぬ御氣色に、「たれか參りたる。例のおどろ〳〵しくおびやかすなむ名のり侍りつる」と宣はすれば、右近「宮のさぶらひに平の重經と申す。人目もおぼされぬに、右近立ちいでて、この御使を西おもてにて問へば、申しつぎつる人も寄り來て、侍「中務の宮も參らせ給ひぬ。大夫は只今なむ、參りつる道に、御車引きいづる、見侍りつる」と申せば、げに俄に時々惱み給ふ折々もあ

人の思すらむ　他人の手前もきまりわるくなつて。

斯かる御すまひは　かうした所にいらつしやいます事は、萬事につけて氣づまりでもあり勝手がわるいものだつた。

限りなき人と　いくら高貴なお方でも穩かならぬ御振舞は誠に面白からぬ事と思ふ。

よそのさし離れたらむ　よその何の緣もゆかりもない人から、妻として愛して貰ふ方が望ましうございます。

隆魔の相　不動尊などのやうな怨怒の相。

いとむくつけく　私を氣味のわるいげすつぽい女と思召して。

直人の懸想だちて　下々の戀の所作じみて誠にをかしうございました。

ただ一所の　浮舟一人の世話にばかりかかつて居つて、私の實子は構つて下さらない。婿君の來てゐられる時の泊りある時は見つともない。

下人さへ　常陸の下部までがこの夫婦喧嘩を聞いて氣の毒がつた。

なだらかに　「おはしますべきものを」に續く。平穩に。

只今はともかくも　浮舟は今のところ昨夜の怖ろしさに親達の夫婦喧嘩など老へて見る餘裕もないのである。

いかに思すらむと　中君が自分の事を何と思召すだらうと思ふとつらくて。

何か斯く　何を御心配なさいます。

母おはせぬ　實母のない人こそ賴りなく悲しいものだと思はれる。その點であなたは仕合ですの意。

よその覺えは　實父のない子は他人の氣受は思はしくないけれども、意地のわるい繼母に憎まれるよりはこの方は氣樂です。お母樣があなたを何とかして下さるでせう。

なおぼしくつせそ　屆の字。氣をくさらせなさいますな。

さりとも　初瀬には廢々參詣した事故いくら何でも不便と思召して下さるでせう。

まで給ふことは　參詣された事は效驗なしには終らないの意。

人の斯く　今迄はどうかすると人が斯樣にあなたを輕蔑の目で見て居つたのを、昔はかうもあつたのだ（あはれな身の上であつたのだ）と人が驚く程のお仕合があやうには祈念した事ですから、あなたは世間の物笑に終る事はありませぬ。

るを、と思すに、人の思すらむ事もはしたなくなりて、いみじう恨み契りおきて出で給ひぬ。

浮舟は怖ろしき夢のさめたる心地して、汗におしひたして臥し給へり。

乳母うちあふぎなどして、「斯かる御すまひは、よろづにつけて、つつましうびんなかりけり。かくおはしましそめて、更によき事侍らじ。あな怖ろしや。限りなき人と聞ゆとも、やすからぬ御有樣は、いとあぢきなかるべし。よそのさし離れたらむ人にこそ、よしともあしとも覺えられ給はめ。人聞きも傍痛きことと思う給へて、降魔の相をいだして、つと見奉りつれば、いとむくつけく下衆々々しき女と思して、手をいといたくつまみじくはしたなく見知らぬ目を見つるに添へても、いかに思すせ給へ。こそ、直人の懸想だちて、いとをかしくも覺え侍りつれ。かの殿には、今日もいみじくいさかひ給ひけり。『ただ一所の御うへを見あつかひ給ふとて、わが子どもをば思し捨てたりき。客人のおはする程の御旅居見ぐるし』と、あらくしきまでぞ聞え給ひける。下人さへ聞きいとほしがりけり。すべてこの少將の君ぞ、いと愛敬なく覺え給ふ。

左近少將

かば、うちくしく安からずむつかしき事は折々侍るとも、なだらかに、年頃のままにておはしますべきものを」など、うちなげきつついふ。君は、只今はともかくも思ひめぐらされず、只いみじくはしたなく見知らぬ目を見つるに添へても、いかに思すらむと思ふに、わびしければ、うつぶし臥して泣き給ふ。いと苦しと見あつかひて、「何か斯くおぼす。母おはせぬ人こそ、なき人はいと口惜しけれど、さがなき繼母に憎まれむよりは、これはいとやすし。ともかくもし奉り給ひてむ。なおぼしくつせそ。さりとも初瀬の觀音おはしませば、あはれと思ひ聞え給はむ。ならはぬ御身に、度々しきりてまで給ふことは。人の斯くあなづりざまにのみ思ひ聞えたるを、斯くもありけりと思ふ

ばかりの御さいはひをはしませとこそ念じ侍れば、あが君は人笑はれにてはやみ給ひなむや」と、世をやすげにいひ居たり。匂宮は急ぎて出で給ふなり。うち近き方にやあらむ、こなたの御門より出で給へば、物宣ふ御聲も聞ゆ。いとあてに限りもなく聞えて、心ばへある古事などうちずんじ給ひて過ぎ給ふほど、すずろに煩はしく覺ゆ。ぶらふ人、十よ人ばかりして參り給ふ。

うつし馬どもも引きいだして、宿直にさうへ、いとほしくうたて思ふらむとて、知らずがほにて、中君「大宮惱み給ふとて參り給ひぬれば、今宵は出で給はじ。ゆするの名殘にや、風心地もなやましくて、起きゐ侍らぬを、わたり給へ。つれづれにも思さるらむ」と聞え給へり。浮舟「亂り心地のいと苦しう侍るを、ためらひて」と、乳母して聞え給ふ。中君「いかなる御心地ぞ」と、立ちかへりとぶらひ聞え給へば、浮舟「何心地とも覺えず、侍らず、只いと苦しく侍り」と聞え給へば、少將、右

古事　古い詩歌。

すずろに　その御聲で、昨夜の記憶がよみがへつて、何となしに氣が重い。

うつし馬　乘替の馬。

宿直にさぶらふ人　匂宮のお供をして禁中に宿直する人十數人をつれてお出かけになる。

うへ　中君は浮舟がいやな氣持でゐるだらうと氣の毒がられて。

亂り心地のご參上致しますから　氣分が大變わるうございますから、暫くしてから參上致します。

いかなる御心地ぞ　どんな御氣分か。

立ちかへり　折返して容態をお尋ねになると。何病氣か分りませんが只ひどく苦しいのです。

傍痛くぞ　中君が氣まわるく思召すだらう。匂宮の仇心から起つた事故。

ただなるよりは　誰も知らなければとにかく、侍女達までが知つてゐるから。

いかにあはれしく　どんなに分別のない女と見さげる事だらう。

かくのみ　匂宮のやうにかうまで女の事といふだらしのない人は、無實の事をも難癖をつけて閉きづらい口をきいたり。

この君は　あの方は口には言はずに心の中でしからぬと思つてゐると思つてゐるといふ大層氣のおける深みのある方だのに、浮舟といふ人は、つまらなく物思ひがふえてしまつた。

年頃　今迄は一向見も知りもしなかつた人だが、氣立や容姿を見ると、ほつておけない程可憐でいぢらしく思はれるのに。

わが身の有樣は　「げにめやすきなりけれ」に續く。

飽かぬ事　不滿な事が多いやうな氣もするが。

かく物はかなき　浮舟同樣つまらぬ目にもあひかねない身の上でありたにも拘らず、さうもおちぶれずに終つたので。

げにめやすきなりけれ　人も私を仕合者だといつてゐるが、成程その通りであつたのだ。

近、目まじろきをして、「傍痛くぞ・おぼすらむ」といふも、ただなるよりはいとほし。いと口惜しく心苦しきわざかな、大將の心とどめたるさまに・の・たまふめりしを、いかにあはれしくのみ亂りがはしくおはする人は、聞きにくく實ならぬことをもくねりいひ、又誠にすこし思はずならむことを、いと恥かしげに心深きを、あいなくいはで憂しと思はむことも、さすがに見許しつべうこそおはすめれ、この君は、かな、わが身の有樣は、はかなき目も見つべかりけるこそ、げにめやすき・なりけれ、今は只この憎き心添ひ給へる人の、なだらかにて思ひ離れなば、更に何事も思ひ入れずな

ほそやかにて 御衣ばかりで袿などを着てゐられないから細やかに見えるのである。

いと傍痛し 往かないではいやうにとの間に何かあつたやうにきまりがわるいの意。中君から折角招かれたのに病氣と稱して行かないのを責める詞。

事しもありがほに 中君の所へ行かなくては、句宮との間に事でもあつたやうに思召しませうから、只大やうな態度でおあひなさい。

物聞えさせむ お話申上げたい。

いと怪しく 妙な出來事があつて、心から苦しい。

お前にて 中君から慰めて頂かうと存じまして。御自分は何も過ちもないのに、大變恥かしさうにくよ〳〵してゐられるのも御尤もと思ひまして。

さすがにこそ 浮舟の實事もなけれど恥かしくおぼすもさすがにそこはわりなれと也（湖月抄）

いかでかは 下に「つつましげに思ほしわび給はざらむ」などの意の文が省かれてゐる。

引きおこして うつぶし臥してゐる浮舟を引き起して中君の方へ押してやる。

りなむ、と思ほす。いと多かる御ぐしなれば、とみにもえほしやられず、起きゐ給へるも苦し。白き御ぞ一かさねばかりにておはする、ほそやかにてをかしげなり。

この君は、誠に心地もあしくなりにたれど、乳母、「いと傍痛し。事しもありがほに思すらむを、只おほどかにて見え奉り給へ。右近の君などには、事の有樣、初めより語り侍らむ」と、せめてそそのかし立てて、こなたの御障子のもとにて、「右近の君に物聞えさせむ」といへば、立ちていでたれば、「いと怪しく侍りつることの名殘に、身もあつうなり給ひて、まめやかに苦しげに見えさせ給ふを、いとほしく見侍る。お前にて慰め聞えさせ給へとてなむ。あやまちもおはせぬ御身を、いとつつましげに思ほしわびにためるも、さすがにこそ。聊かにても世を知り給へる人こそあれ、いかでかはと、ことわりにいとほしく見奉る」とて、引きおこして參らせ奉る。我にもあらず、人の思

これに思しつきなば こんな美しい浮舟に句宮が執心されたならば、大變な事が起るだらう、これ程の美人でなくても、目新らしい女に興味をお持ちになる御性分だのに。

物語いとなつかしく 中君が大層やさしく浮舟にはなしかけられて。

忘らるる世なく 大君の事が忘れられる時もなく悲しく。

身も怨めしく 死なれずに一人ぼつちになつた我身も怨めしく。

思ふ人もなき身に 愛してくれる親兄弟もない私ですのに、大君が愛して下さつたやうにあなたが愛して下さるならば大變嬉しく思ひます。

年頃いと遙にのみ 今迄は全く他人のやうに思つて居りましたのに、かやうに親しくお目に懸りましては、何もかも慰められるやうな氣が致しまして。

ふらむことも恥かしけれど、いと柔かにおほどき過ぎ給へる君にて、おし出でらられて居給へり。額髪などの、いたう濡れたるをもて隱して、火の方にそむき給へるさま、うへをたぐひなく見奉るに、け劣るとも見えず、あてにをかし。これに思しつきなば、ありなむかし、いと斯からぬをだに、珍らしき人をかしうし給ふ御心を、と二人ばかりぞ、お前にてえ恥ぢあへ給はねば、見ゐたりける。物語いとなつかしくして給ひて、例ならずつつましきところなど、な思ひなし給ひそ。故姫君のおはせずなりにしのち、忘らるる世なくいみじく、身も怨めしく、たぐひなき心地して過ぐすに、いとよく思ひよそへられ給ふ御さまを見れば、慰む心地してあはれになむ。思ふ人も（更に）なき身に、昔の御志のやうにおもほさば、いと嬉しくなむ」など語らひ給へど、いと物つつましくて、又ひなびたる心に、いらへ聞えむこともなくて、

繪など　繪物語などを侍女に持つて來させて。

ことわり　筋路をよませて。繪詞の事。

心に入れて　熱心に繪を見てゐられる燈下の姿は、こゝが缺點だと思はれる所は聊かもなく、どこまでも美しい。

繪は殊に　繪は前に廣げた儘中君がじつと浮舟を見つめながら考へるのである。

いとあはれなる　大層なつかしい顏をしてゐられる事だ。

古人どもげに似たる人は　老女房達。似て居る人はなつかしいといふが、浮舟の父宮や姉君に似てゐるのを見るとその通りだ。

思しくらぶる　浮舟と大君や、父宮とを想ひ出してくらべてゐられるので。

かたはなるまで　度を過ぎて却つて缺點になりさうなまで。

もてなしの　物ごしがうぶで、萬事遠慮がちにしてゐる爲か目につくやうな色つぽさが稍乏しい。

故々しき　樣子に深みでも出來て來たら薫が妻となさるにも決して來たら苦しくあるまい。

このみ心に　いつとなく姉といふ氣持になつて浮舟をいぢりまはしてゐられる。

年頃おはせし　御存命中の御樣子などを、委しくはないけれども話される。

いとゆかしうて　八宮にお目にかゝり度く思つて、御生前お目に懸らずに終つた事を。

見奉りの心知りの　湖見抄本は本の儘。昨晩の事情即ち宮が浮舟に近づかれた事を知つてゐる右近や少將等は。

いかなりつらむな　宮と浮舟との間は實際はどうであつたのだらう。

いみじう　中君が浮舟を大事になさらうとした所で、宮との關係が出來て居つては、大事にして下さるかひはあるまい、お氣の毒な。

すずろに　とりとめもなく愚癡をこぼして居つた樣子は、何の疑はしい事もないやうな口ぶりでした。

あひてもあはぬ　伊行釋引歌「臥す程もなくて明けぬる夏の夜は逢ひてもあはぬ心地こそすれ」寢る間もなくて明けてしまつたといふやうな調子での意。

いざや　いやそれはわざと反對な風をなさつたのでもありませう、その邊の事は分らない。

えさせしに、かう見奉り侍るは、何事も慰む心地し侍りてなむ」とばかり、いと若びたる聲にていふ。繪などとりいでさせて、右近にことわり讀ませて見給ふに、浮舟は中君と向ひあつて坐つてむかひて、物恥ぢもえしあへ給はず、心に入れて見給へる火影、更にこゝそと見ゆる所ありかし、故姫君は宮の御方ざまに、我は母上にて、いとおほどかなるあてさは、ただそれとのみ思ひいでらるれば、繪は殊に目もとどめ給はで、いとあはれなる、人のかたちかな、いかでかうしもありけるにかあらむ、故宮にいとよく似奉りたるなめりかし、と思しくらぶるに、涙ぐみて見給ふ。大君は古人どもいふなりしか、げに似たる人はいみじきものなりけり、なよ〳〵とたわみたるさまし給へりしにこそ、浮舟はこれはまだもてなしのうひ〳〵しげに、よろづの事を

つつましうのみ思ひたるけにや、見どころ多かるなまめかしさぞ劣りたる（心地しけるに）、故々しきけはひだにもてつけたらば、大將の見給はむにも、更にかたはなるまじ、など、このかみ心に思ひあつかはれ給ふ。物語などし給ひて、曉がたになりてぞ寢給ふ。かたはらに臥せ給ひて、故宮の御事ども、年頃おはせし御有樣など、まほならねど語り給ふ。いとゆかしうて、見奉りずなりにけるを、いと口惜しう悲しと思ひたり。よべの心の知りの人々は、「いかなりつらむな。いとらうたげなる御さまを、いみじうおぼすとも、かひあるべき事かは。いとほし」といへば、右近ぞ、「いでさもあらじ。かの御乳母の、引きすゑて、すずろに語りうれへし氣色、もてはなれてぞいひし。宮も、あひてもあはぬやうなる心ばへにこそ打ちうそぶき口ずさび給ひしか。いざや、殊更にもやあらむ、そは知らずかし。よべの火影のいとおほどかなりしも、事ありがほには見え給は

人もけしからぬ 周圍の人達も不埒な事といひもし思ひもする事だらう。當の中君御自身も何と思召すやら、男女の事につひての嫉妬といふものは、貴人も下々と同じ事だ、と自分のこんな場合のいつもの心持から落着いてゐられない氣持になつて。

宮 匂宮は今參內中でお留守故。

怪しく 妙に子供々々した娘を抱けて、大船に乘つた氣持ではお居りながら、鬪のやうに疑つて心配ばかりして居りますので、家の祿でなしどもから憎まれ怨まれして居ります。細流抄「鬪は狐の性の類也、狐は狐疑て物を弱く疑ふ心のある也、その如くに鬪も疑心のあるもの也、その如くに鬪も疑心のあるもの也しきやすくは思へども疑はしき心のあると也」

御まかげ 鬪のまかげとも鬪が目の上に手をかざしてゐる貌。前の鬪に引かれた詞。

御まみ 鬪のまかげに引かれた詞。

心の鬼に 浮舟の事で中君が怒つて居るのではないかと氣が咎めて。

年頃の願ひ 年來の宿望が成就したやうな氣がして、人の耳にはひつても體裁がよく、名譽と心得て居りますが、でもそれはさしひかへなければならない事でございまして、山に隱遁するといふ素志は動かないものでございませうに。

ここには 此處にゐられては、何の氣はづかしく思はれる事がありませう。

とてもかくても 「びんなうはもてなし聞えじ」を修飾する。

その心を皆 その邊の事情は誰も呑込んでゐるやうですから、私が注意して、不都合なやうには取計らふまいと思ひますのにあなたはどう思つてそんな事を仰しやるのです。

傍痛う 故宮が浮舟を子として認めて下さらなかつたあのきまりのわるかつた事につひては、今更何の愚癡を申上げまいう。その點ではなくても、あなたと私との間には叔母姪といふ斷ちそれに得ない綱もございますから、あなたを力にして居ります。二三頁參照。

あさましう 北方は意外なけしからん事に驚き騷いだので、祿々口もきかずに歸つて行つた。

ざりしを」など、うちささめきて、いとほしがる。

乳母、車乞ひて、常陸殿へいぬ。北の方にかう〳〵といへば、

胸つぶれ騷ぎて、人もけしからぬさまにいひ思ふらむ、さうじみもいかが思すべき、斯かる筋の物憎みは、あて人もなきものなりと、おのが心ならひに、あわただしく思ひなりて、夕つかた參りぬ。宮おはしまさねば心やすくて、「怪しく心をさなげなる人を參らせおきて、うしろやすくは賴み聞えさせながら、鬪の侍らむやどもに、憎み怨みられ侍る」と聞ゆ。「いとさいふばかりのをさなげさにはあらざめるを、うしろめたげに氣色ばみたる御まかげこそ煩はしけれ」とて笑ひ給へるが、心恥かしげなる御まみを見るも、心の鬼に恥かしくぞ覺ゆる。いかに思すらむと思へば、えも打ちいで聞えず。「斯くてさぶらひ給ふは、年頃の願ひの滿つ心地して、人の漏り聞き侍らむもやすく、おもだたし・き事になむ思ひ給ふるを、事になむ侍りけるを、・深き山の本意は、みさをになむ侍るべきを」とて、打泣くもいとほしろめたく・覺え給ふべき。とてもかくても、疎々しく思ひ放ち聞えばこそあらめ、けしからずだちてよからぬ人の、時物し給ふめれど、その心を皆人見知りためれば、心づかひして、びんなうはもてなし聞えじと思ふを、いかに推し量り給ふにか」と宣ふ。「更に御心をば隔てありても思ひ聞えさせ侍らむ。その方ならでも、思し放つまじき綱も侍るをなむとらへどころに賴み聞えさする」など、おろかならず聞えて、「明日明後日かたき物忌に侍るを、おほざうならぬ所にて過ぐして、又も參らせ侍らむ」と聞えていざなふ。いとほしく本意なきわざかなと思せど、えとどめ給はず。あさましうかたはなる事に驚

かやうの　斯樣な場合の方違の場所にとの目的で、かねて小さい家を用意してあつたのだ。それは三條邊で、しやれてはゐるがまだ出來上らずに居る家であるので、十分な飾りつけもせずにあつたのだ。

心にかなはぬ　ままならぬ憂世には生きてゐるべきものではなかつたのです。私一人だけならば、身分卑しく人がましくなくとも、さういふ身分と觀念して憂世を捨てて引籠りきりに引籠つても暮されるのです。「只ひたぶるに—」は「這ひこもりて過ぐしつべし—」を修飾する。

心憂しと　父宮が娘として認めて下さらなかつたので。

むつび聞ゆるに　中君に頼るのは浮舟の爲と思つて近づいて行つたのに。

異樣なりとも　此處はへんな家であつても、誰にも知らせずに隱れてゐなさい。

世にあらむこと　生きてゐるのも肩身の狹い身と小さくなつてゐられる樣子は可愛さうだ。

親はたまして　「—やすからぬなりけり—」を修飾する。浮舟は親の心が分らないのでこの詫住居を悲しがるのであるが、母は浮舟をよい緣につけたいからこそここにおくのである。

あたらしく惜しければ　浮舟を臺なしにするのがあつたらもので惜しいから、無事に成長させて思ふ通りの立派な緣につけようと思つて、あんな不都合な事の爲に人からも考への無い者と

きさわぎたれば、をさ〳〵物も聞えで出でぬ。
かやうの方違所（かたたがへどころ）と思ひて、小さき家まうけたりけり。三條わた
りに、ざればみたるがまだ造りさしたる・・・（やうなる）所なれば、は
か〴〵しきしつらひもせでなむありける。北方「あはれ、この御身（浮舟）
一つ（一人を）を、よろづにもてなやみ聞ゆるかな。心にかなはぬ世には、
あり經（ふ）まじきものにこそありけれ。みづからばかりは、只ひた
ぶるに、品々しからず人げなう・・（こと）（も）、只さる方に這ひこもりて
過ぐしつべし。（中君方はつらく思ひ上げて居た所ですのに）この御ゆかりは、心憂しと思ひ聞えしあたりを、
むつび聞ゆるに、（不都合な事でも起つては世間の物笑でせう）びんなき事も出で來なば、いと人笑へ・・・（に古へ）
・・・・（の事取添へ心憂か）なるべし。（この世はいやだ）あぢきなし。異樣（ことやう）なりとも、ここを
人にも知らせず忍びておはせよ。（どのやうになりともお世話しませう）おのづからともかくも仕うま
つりてむ」といひおきて、（母北方自身は）みづからは歸りなむとす。（浮舟）君はうち
泣きて、世にあらむこと所せげなる身と思ひく・（ん）し給へるさま、（浮舟の）
いとあはれなり。（母北方の心には）親はた・・まして、あたらしく惜（かひなし）しけれ・・（と思）

思はれたり言はれたりするのが心配で、こんな所に詫住居をさせたのである。

しか隱ろへたらむ　そんな風に小さくなつてゐるのを氣の毒に思つて斯樣に取計らつたのであるが。河内本は本の儘。

あばれて　十分出來上らず戸締りなども不完全故。

さる心し給へ　無用心だから注意しなさい。

宿直人の事など　番人の事なども指圖してはありますが、それでもまだ心配だから私も此處に居たいのですが。

少將の　左近少將（次女の婿）の世話を。

もろ心に　自分と一緒になつて婿の世話をしない、不體裁な事だ。

いと心憂く　この人故に浮舟に取つてこんなどさくさがあるのだ、實にいやだ。

又なく思ふ　無類の愛兒の浮舟がこんな有樣故。

・（こ）ば、・・・（いかで）恙なくて思ふごと見な・・（やど）さむと思ひ・・（ふに）、さる傍痛（匂宮の一件）
き（件）ことにつけて、人にもあは〳〵しく・・（いひ）思はれ言はれむが、
やすからぬなりけり。（母は物の分らぬ人ではないが）心地なくなどはあらぬ人の、（おこりつぽくて）なま腹立ち
やすく、（に）（氣儘）思ひのままに・・（なる事）ぞすこしありける。（常陸の家にも浮舟を隱の者として）かの家にも隱ろ
へ（おけばおけたのだが）てはすゑたりぬべけれど、しか隱ろへ・・（けも）たらむをいとほしと
思ひて斯くあつかふ・・（くらす）に、（今迄は一度も母子そばを離れた事がなかつたから）年頃かたはら去らずあけくれ見なら
ひて、（母子互に）かたみに心細く（別居を）わりなし（つらい）と思へり。北方「ここは、まだ・（又）斯く
あばれて、あやふげなる所なめり。さる心し給へ。（部屋々々にゐる女房達）曹司々々に
あるものども召しいでて使ひ給へ。宿直人の事などいひおきて
・・（見捨こ）侍るも、いとうしろめたけれど、（守の・・こ）（常陸から）かしこに腹立ち恨みらる
るがいと苦しければ」と、うち泣きて・・（つこ）歸る。
少將のあつかひ（かしづき）を、（常陸）守は又なきものに思ひ急ぎて、「もろ心に、
さま惡しく、いとなまず」と怨（ゑん）ずるなりけり。（母の心）いと心憂くこの
（少將）人により斯かるまぎれどももあるぞかしと、又なく思ふ方の事

をさ〳〵見入れず　少將の事は碌々構はない。

かの宮のお前にて　少將があの匂宮の御前で實にみすぼらしく見えたので、それが主なる原因で輕蔑するに至つた事故、浮舟の秘藏婿にして大事にしようなどゝ思つた念は消えてしまつた。

こなたにつて物の　北方が少將の方に行つて物の隙からのぞく。

なつかしげなるに　糊氣の無くなつてしなやかな衣。

今樣色　薄紅梅色。

擣目　砧で打つて艶を出したその艶の具合。

宮のうへの　中君が匂宮と並んでゐられた御樣子などを思ひ出して見ると、二人とも見苦しい姿だなと思はれる。

前なる御達に　少將がそばに居る女房達に冗談などをいつて打解けてゐる樣子は、以前見た時のやうに引立たないそして人前にも出せないといつたやうな男と思はれないので、あの時二條院に居つたのだと思ひ直して見る折も折。

事だに惜しき　拾遺秋「うつろはむ事だに惜しき秋萩に折れぬばかりもおける露かな」

心ばせの程を　浮舟を變改した根性の卑しさを思ふと人間とも思はれないし、それに匂宮の御前に出てのみすぼらしさは實にひどかつたくせに、歌でもあるまいて。

しめゆひし　約束した浮舟は迷ふ事なくいつまでも約束を守つて居つたのに、あなたはなぜ妹に乘りかへたのでせうの意。「移る」が薬の紅葉するの意であるが、少將は薬の變る意にとりなしたもの。「下葉」は少將である。

宮城野の　初めから浮舟を宮樣の姫君と知つて居つたら少しも心を他に移すのではなかつたのにの意。宮城野の宮を八宮にとりなしたのである。

故宮の御事　さては故宮との關係を聞いたのだらうと思ふと、ぜひとも浮舟を人並の緣につけたいものだと、その事ばかりが一入氣が揉めてくるゝ。「いとど」は「一入思ひあつかはる」を修飾する。

のかかれば、つらく心憂くて、をさ〳〵見入れず。かの、宮のお前にて、いと人げなく見えしに、多く思ひおとしてけれ ば、私物に思ひかしづかましをなど思ひし事はやみにたり。こ こにてはいかが見ゆると、まだ打解けたるさまも見ぬに、と思 ひて、のどかに居給へる書つかた、こなたにわたりて、物より のぞく。白き綾のなつかしげなるに、今樣色の擣目なども清ら なるを著て、端のかたに、前栽見るとて居たるは、いづくかは と見ゆ。むすめ、まだ片な りに、何心もなきさまにて添ひ臥したり。宮のうへの並びてお はせし御さまどものやと見ゆ。 前なる御達に物などいひたはぶれて、打解けたるは、いと見し 樣色にも見えぬを、かの宮なりしは、異 少將なりけりと思ふ折しもいふことよ。「兵部卿の宮の萩の、 枝ざしなどの、いと艶なるこそ。一日まゐりて、出で給ふ程な りしかば、え折らずなりにき。『事だに惜しき』と宮のうちずじ 給へりしを、若き人たちに見せたらましかば」とて、我も歌詠 みゐたり。「いでやな 笑の詞もれるがで消えは・いとこよなかりけるに、何事いひゐたるぞ」とつぶ やかるれど、いと心地なげなるさまはさすがにしたらねば、い かがいふとて試みに、

しめゆひし小萩が上も迷はぬにいかなる露に移る下葉ぞ

とあるに、いとほしく覺えて、

「宮城野の小萩がもとと知らませば露も心を分かずぞあらまし

いかでみづから聞えさせあきらめむ」といひたり。故宮の御事 聞きたるなめりと思ふに、いとど、いかで人とひとしくとのみ、 思ひあつかはる。あいなう大將殿の御さまかたちぞ戀しう面影 に見ゆる。同じう

さすがに「うちつけにも言ひかけ給はず云々」に係る。薫は浮舟を妻にしたい氣持はありながら、突に口外するやうな事もせず、平靜を裝つてゐられる所がえらい。

よろづにつけて　自分でさへ萬事につけて薫の事が思ひ出されるのだから、まして若い人は私のやうに思ひ出してゐる事だらう。

わがものにせむと　こんないやな男をわが婿にしようと思つたのは見苦しい譯のものであつたのだ。

とてやかくてやと　あれやこれやと萬事都合のよさうな空想を描き續けて見ると、その實現は實にむつかしい事だ。

やんごとなき　尊い身分だからいと應度の薫である、妻としてゐられる婦人は浮舟よりも今一段優れてゐる（後文に「當帝の御かしづきむすめ」とある）のを指したもの、卽ち浮舟の親王の女、これは内親王であるからである、）浮舟がどれ程の女といふのだ、薫がこれに心を留められることがあらうや。

劣りまさり　優劣といふ事、それは身分の高下によつて容姿も心も判定される譯のものであつた。

わが子ども　常陸との間に出來た娘達。

似るべきやはある　この下に「と」を補つて解する。

旅の宿り　浮舟の居る三條の隱家。

庭の草も　何もかも物思の種でないものはないから、庭の草までが鬱陶しく感ぜられる所へ。

あづま聲したる　常陸の家來達である。

あやにくだち　無理わざをされた匂宮の事までも、あんなに驚いたとはいふものの思ひ出されて。

何事にかありけむ　あの晩匂宮は何事だつたか、しんみりした口調で長々と仰しやつた。匂宮の法ら**名殘をかしかりし**れた後までも興味をそゝつた御移香が、今も殘つてゐるやうに思はれて、またその感じにつれて、悟しかつた記憶もよみがへつて悟しくなる。

母君だつやと　母親らしくとふつもりで。湖月抄師說「今まではこの母卑下し給へど、今かく浮舟の賴りなき有樣には、母君めきていひつかふ也、此人の賴もしくあらんとて、あはれに親めきたる文をおこせたると也」

當帝の　薫が女二宮を見た目で浮舟を見られては、眞に恥かしく氣の引ける譯のものだと思ふにつけても、北方は氣もそろに魂のぬけがらになつてしまつた。

て、心もとまらず、あなづりて押し入り給へりけるを思ふもねたし。この君は、さすがに、尋ねおぼす心ばへのありながら、うちつけにも言ひかけ給はず、つれなしがほなるしもこそいたけれ、よろづにつけて思ひいでらるれば、若き人はまして、斯くや思ひいで聞え給ふらむ、わがものにせむと、斯く憎き人を思ひけむこそ見苦しきことなるべかりけれ、など、ただ心にかかりて、ながめのみせられて、とてやかくてやと、よろづによからむあらましごとを思ひつづくるに、いと難し。やんごとなき御身の程御もてなし、見奉り給へらむ人は今すこしなのめならず、いかばかりにてかは心をとどめ給はむ、世の人の有樣を見聞くに、劣りまさり、賤しうあてなる品にしたがひて、かたちも心もあるべきものなりけり、わが子どもを見るに、この君に似るべきやはある、この家の内に又なきものにと思へども、宮に見くらべ奉りしかば、いとも口惜しかりしに、推し量らる。當帝の御かしづきむすめを得奉り給へらむ人の御目移しには、いともく恥かしくつつましかるべきものかな、と思ふも、すずろに心地も・あくがれにけり。旅の宿りは・つれく〳〵にて、庭の草もいぶせき心地するに、いやしきあづま聲したる者どもばかりのみ出で入り、慰めに見るべき前栽の花もなし。うちあばれて・・・・・・・、晴れくした氣持でしからで明し暮すに、宮のうへの御有樣思ひいづるに、若い心地に戀しかりけり。あやにくだち給へりし人の御けはひも、さすがに思ひいでられて、何事にかありけむ、いと多くあはれげに宣ひしかな、名殘をかしかりし御移香も、まだ殘りたる心地して、怖ろしかりしも思ひいでらる。母君だつやと、いとあはれげなる文を書きておこせ給ふ。おろかならず心苦しう思ひあつかひ給ふめるに、かひなうもてあつかはれ奉る事と、うち泣かれて、「いかにつれく〳〵に見ならはぬ心地し給ふらむ。

ひたぶるに　今居るこの場所を全然憂世を離れた別世界と考へる事が出來たら嬉しい事でせう。「ひたぶるに」は「世の中にあらぬ」を修飾する。拾遺雜上の「世の中にあらぬ所も得てしがな年ふりにたるかたち隱さむ」の詞を用ひたもの。

憂き世には　あなたの爲に此世以外の別世界を探し求めてでもあなたの榮華のさまを見るすべがあつてほしい。

ならひにし　大君を思ひ出すのが習慣になつてゐるから。

物忘れせず　大君を忘れず。

こぼちし寢殿　元の寢殿を取拂つてその跡に又新たに寢殿を建てたのである。

さまかへてけるも　改築して舊觀を改めてしまつた事までが。

もとありし　改築前の寢殿の設備は、故宮の方は持佛をする大層崇嚴にし、一方の部屋は姫君達の爲に女らしく行きとどいた飾付をするなど、それぞれ趣をかへて一樣ではなかつたのだが。

山里めきたる　新築の寢殿に使用する爲に。

絕え果てぬ　昔ながらに流れてゐるこの清水に、なぜ亡き人の面影をだけなりとうつしとめておかなかつた事だらう。

かの人は　あの人は先頃匂宮邸にと聞いて居つたが、訪ねて行きたいけれども、恥かしいやうな氣がしてまだ訪ねては見ませぬ。やはりあなたからはつきり私の意向を傳へて頂きたい。

忌たがふとて　浮舟は方違の爲にあちこちうつつてゐるらしいやうです。只今もむさくろしい小家に隱れてゐるのも氣の毒で、宇治がもう少し近かつたら、そこへ預けて安心してゐられるのですが、途中の山道がけはしくて簡單には出かけかねて居ります。

暫し忍びすぐし給へ」とある返りごとに、浮舟「つれ〴〵は何か。辛抱して居なさい　却つて氣樂です　徒然ぐらゐは何でもありませぬ

心やすくてなむ。

ひたぶるに嬉しからまし世の中にあらぬ所と思はましかば」

をさなげにいひたるを見るままに、浮舟の返事を　ほろ〳〵とうち泣きて、

かう惑はしはふるるやうにもてなす事と、いみじければ、

憂き世には　母君　あらぬ所を求めても君がさかりを見る由もがな

と、平凡な歌を詠みかはして悲しい心持を慰めたなほ〳〵しき事どもをいひかはしてなむ心をのべける。

かの大將殿は、例の秋深くなりゆく頃、ならひにし事なれば、薫

寢覺々々に物忘れせず、あはれにのみ覺え給ひければ、宇治の

御堂造り果てつと聞き給ふに、みづから　宇治へ　おはしましたり。久し

う見給はざりつるに、山の紅葉も珍らしうおぼゆ。こぼちし寢

殿、今度　こたみはいと晴れ〴〵しう造りなしたり。故宮が簡素にして　昔いと事そぎて

聖だち給へりしすまひを思ひいづるに、八宮　故宮も繼しう覺え給ひ

て、さまかへてけるも口惜しきまで思さるれば、感慨に堪　常よりもなが

め給ふ。

もとありし　御しつらひは、いと尊げにて、今片つかた

を、女しくこまやかになど、一方ならざりしを、昔からの　網代屏風何か

の荒々しきなどは、調度類は　かの御堂の僧坊の具に殊更になさせ給へり。今度新に造らせられて

山里めきたる具どもを殊更にせさせ給ひて、いたうも事そがず。

いと清げに故々しくしつらはれたる遣水のほとりなる岩に居給

て、とみにも立たれず。

絕え果てぬ　清水になどか亡き人の面影をだに留めざりけむ

涙をのごひつつ辨の尼君の方に立ちより給へれば、辨は薫を　いと悲しと

見奉るに、ただひそみにひそむ。泣顏をする　長押に假初に居給ひて、薫が　簾垂

のつまを引きあげて物語し給ふ。辨と　几帳に隱ろへて居たり。辨は　事の物語の

ついでに、薫かの人は、さいつ頃宮にと聞きしを、さすがにう

ひ〳〵しく覺えてこそ音づれ寄らね。なほこれより傳へ果て給

へ」と宣へば、浮舟「一日、かの母君の文侍りき。『忌たがふとて、

此處彼處になむあくがれ給ふめる。此頃も、あやしき小家に隱

まろこそ 私だけが昔に變らず踏分けて訪ねて來るのです。

何ばかりの それもどれ程の因縁があつてかと思ふと感慨無量です。

宮にだにともかくも 中君の二條院へも。かれこれと人が聞き傳へて噂をしたらわるからう。

愛宕の聖 河海抄は空也上人、花鳥餘情は柿本紀僧正眞濟を引いてゐるが、細流抄の説の如く「利生方便の爲には山籠りの人も出る事のあると也」の意である。

深き誓ひを 山を出ないといふ深い誓ひを破つて人の願ひを叶へてやられるのこそ尊い事でせう。

例ならず 薫は人を强ひるやうな事のない穩かな人なのだが。

ろへ物し給ふめるもいと心苦しく、すこし近き程ならましかば、そこにわたして心やすかるべきを、あらましき山道に、たはやすくもえ思ひ立たでなむ』と侍りし」と聞ゆ。薫「人々の斯く・・怖ろしがる宇治街道に、まろこそ古りがたく分け來れ。何ばかりの契りにかと思ふはあはれになむ」とて、例の涙ぐみ給へり。

「さらばその心やすからむ所に消息し給へ。みづからやはかしこに出で給はぬ」と宣へば、辨「仰言を傳へ侍らむことは易し。宮にだにえ參らぬを」とも、かくも人の聞き傳へばこそあらめ、愛宕の聖だに、時に隨ひては出でずやはありける。深き誓ひをや」と宣へば、辨「人々の斯く・・怖ろしがる宇治街道に、まろこそ古りがたく分け來れ。何ばかりの契りにかと思ふはあはれになむ」とて、例の涙ぐみ給へり。

「さらばその心やすからむ所に消息し給へ。みづからやはかしこに出で給はぬ」と宣へば、薫「なほよき折なるを」と、例ならず强ひて、薫「明後日ばかり車奉らむ。その旅の所たづねおき給へ。ゆめをこがましく不都合な仕業など馬鹿げた事はしない積りですよ。

あぶなく 「あぶなからず」あはしからぬ」の意。薫は輕薄な危險人物ではないのだから、自然御自分の名譽の爲にも外聞などは憚られる事だらう。

近き程にこそ 浮舟の隱家はお邸（薫の三條宮）から近い所でもやつておいて下さい。

ふりはへ さうでないと私がわざ〳〵出しやばつて自分の考へで、今更伊賀姥のやうに皆に思はれるのも、女をするやうに思はれるのもうかときまりがわるくて。

伊賀たうめ （細）伊賀たうめ也國々にある也たうめとは狐の名也云々諸抄にみえたり。愛の心は女を云也、女のものをいふはきつねの人をばかすがごとしと（前略）細、女をしいふ（師）の御説可レ用之尼の身とし今更に女にやなり侍らんつゝましきとの儀也（湖月抄）

人の物いひ 人の口といふものはいやなものだから。

出で給ふかひなからず 薫は歸京された。薫が女二宮に對する態度はどうだかひがないとなさうだが、敬遠してゐるやうな態度で、あまり親しくなさうでないやうだ。

うちより 「聞え給へば」に續く。主上から、普通の人親が娘を心配するやうに、女二宮の事

へ。ゆめをこがましくひがわざすまじうを」と、ほゝゑみて宣へば、辨は迷惑がつて煩はしく、薫の御料簡が解せないけれどもいかに思すことならむと思へど、あぶなくはしからぬ御心ざまなれば、ものづからわが御ためにも人聞きなどはつつみ給ふらむ、と思ひて、辨「さらば承りぬ。近き程にこそ。御文などを・見せさせ給へかし。ふりはへさかしらめきて、心しらひのやうに思はれ侍らむも、今更に・伊賀たうめ・・・にや・つつましくてなむ」と聞ゆ。薫「文・・は易かるべきを、人の物いひいとうたてあるものなれば、『右大將は、常陸の守のむすめをなむよばふなる』などや取りなしてむをや。そのかんのぬし、いとほしと思ふ。暗うなれば、出で給ふ。下草のをかしき花どもを、紅葉など折らせ給ひて、宮に御覽ぜさせ給ふ。かひなからずおはしぬべけれど、かしこまりおきたるさまにて、いたうも馴れ聞え給はずぞあめる。うちより、・・ただの親めきて、

を女三宮にお頼みしてあるので薫も女二宮を此上なく尊重してゐられた。

こなたかなたと 薫は主上からも母宮からも大事にされてゐる女二宮に忠勤を励まねばならぬ外に、浮舟に対する厄介な戀心のきざしたのも苦しい事であつた。

宣ひしまだ 明後日と約束された日の早朝、薫は陸まじく召使つてゐられる下部一人と顔見知りのない牛飼とを用意して宇治に遣はされた。

御庄 薫の領地。

斯くなむ 斯様々々の仔細でやつて来ました。

しるべのをのこ 弁に附添つて来た道案内の男を以て取次がせたので。

初瀬の 浮舟が初瀬詣の時にお供した若女房。

親と聞えける 弁を父宮のゆかりの人と思ふと親しい感じがするのであらう。

あはれに人知れず 一度お目に心密かに思ひ出し、以来は心つて感慨に耽らない折とてはありませんが。

この大将殿の あの薫君が、不思議に思はれる程お頼みになりましたので、思ひきつてやつて参りやした。

忘れぬさまに 薫が心に留めてゐるやうに仰しやつて下さるのも嬉しいが、急にかうした計畫があらうとは氣もつかない。浮舟は弁が薫の旨を受けて来た事を知らないのである。

さにやあらむ 弁は薫の使だらうと思つたので。

この近き御庄の 薫は自分の名を隠して宇治附近の領地の支配人の名をいはせたので。

かうなりけり さては薫であつたのだ。

御けはひをかしければ 弁はおもしろく思つて取次いだのである。省筆である。

用意もなく 隠家では薫が訪ねて来られようとはまだ豫期しない時なので、用意をしてゐないで。むさくろしくしてゐたので。

薫の母 入道の宮にも聞え給へば、いとやんごとなき方は、限りなく思ひ聞え給へり。こなたかなたとかしづき聞え給ふ宮仕に添へて、むつかしき私の心の添ひたるも、苦しかりけり。

宣ひしまだつとめて、睦まじくおぼす下﨟のさぶらひ一人、顔細御本宣ひし日まだ知らぬ牛飼つくりいでて遣はす。薫「御庄の者どもの田舎びたる召出でて、附けよ」と宣ふ。弁の車に附添はせよ 必ず出づべく宣へりければ、弁は氣恥かしく迷惑には思つたがとつつましく苦しけれど、うちけさうじつくろひて乗りぬ。野途中 山の氣色を見るにつけても、古へよりの故事ども思ひいでられて、ながめくらしてなむ来著き・ける。浮舟の家にいとつれ〴〵に人目も見えぬ所なれば、心やすく引き入れて、「斯くなむ参り来つる」と、しるべのをのこして言はせたれば、初瀬の供にありし若・き人出で来て弁を車から おろす。あやしき所を眺め暮しあかすに、昔語りも な弁が来た事故しつべき人の来たれれば、浮舟は嬉しくて呼び入れ給ひて。親と聞えけ 八宮 る人の御あたりの人と思ふに、睦まじきなるべし。薫「あ

はれに人知れず、初瀬詣の中宿りに見奉りしのちよりは、思ひいで聞えぬ折なけれど、世の中・(を)かばかり・(深う)思ひ給へ捨てたる身にて、かの宮 世捨人の我身故 中君の御方へにだに・(え)参り侍らぬを、この大将殿の、あやしきまで宣はせしかば、思ひ給へおこしてなむ」と聞ゆ。薫 浮舟君も乳母も、忘れぬさまに宣ふらむと二條院でと見おき聞・えてし、人の御さまなれば、浮舟を めでたし もあはれなれど、俄に斯くおぼしたばかるらむとは思ひも・寄らず。宵うち過ぐる程に、「宇治より人まゐれり」とて、門忍びやかにうちたたく。さにやあらむと(を)思へば、弁・(の尼)あけさせたれば、車をぞ引き入るなる。乳母の心 怪しとおもふに、薫「尼君にたいめん・賜はらむ」とて、この近き御庄の預りの名のりをせさせ給へれば、弁が戸口にゐざり出でたり。雨すこしうちそそぐに、風はいと冷かに吹き入りて、いひ知らずかをりくれば、かうなりけりと、誰も〳〵心ときめきしつ(ぬ)べき薫の御けはひをかしければ。(と)用意もなくあやしきに、まだ思ひあへぬ程なれば、心さわぎ・(し)て、人々「い(どう)

いかに聞ゆべき　何と御返事申上げたものか。

しかおはしまし　あのやうに御出で下さいましたのですもの、其儘おかへし申す譯には參りませぬ。

かの殿にこそ　母君方へこの由を内々お知らせ申上げませう、近所の事ですから。

若き御どち　お若い同志がお話をなさるのは、直によい仲になられる譯のものでもないのですもの。それに薫は若いにも似合はず不思議な程氣のゆつくりした考へ深いお方ですから。

宿直人夜行やか　夜まはり。

巽　東南。

この人の御車　この御車は門内に引入れるんなら引入れて門をしめて下さい。「人の御車」で一語。

斯かる人の供人　かうした供人といふものは氣のきかぬものだ。「人の供人」で一語。

佐野のわたりに　萬葉二・新勅撰羇旅「苦しくも降りくる雨か三輪が崎佐野のわたりに家もあらなくに」

かなる事にかあらむ」といひあへり。薫「心やすき所にて、月頃の思ひあまる事も聞えさせむとてなむ」と言はせ給へり。いかに聞ゆべき事にかと、君は苦しげに思ひて居給へれば、乳母・見苦しがりて、乳母「しかおはしましたらむを、立ちながらやは返し奉り給はむ。かの殿にこそ、斯くなむと忍びて聞えめ、近き程なれば」といふ。「・・うひ〳〵しく、などてかさはあらむ。若き御・・どち物聞え給はむは、ふとしもしみつくべくもあらぬを。・・怪しきまで心のどかに物深うおはする君なれば、よも人の・許しなくて打解け給はじ」などいふ程・、雨やや降りくれば、空はいと暗し。宿直人の・怪しき聲したる、夜行うちして、宿直人「・やかの巽の隅のくづれいと危し。この、人の御車入るべくば、引き入れて御門さしてよ。斯かる、人の・供人こそ、心はうたてあれ」などいひあへるも、薫の心に聞きならはぬ心地し給ふ。薫「佐野のわたりに家もあらなくに」など口ずさびて、薫「さとむる葎や繁き東屋のあまり程經るあまそそぎかな」と、袖にかゝる雨を拂ひ給へる追風、いとかたはなるまで、あづま・の里人も驚きぬべし。

とざまかうざまに聞えのがれむ方・なければ、南の廂に御座引きつくろひて入れ奉る。心やすく・もたいめん・し給はぬを、こ逆が浮舟を れかれ押し出でたり。遣戸といふものさして、聊かあけたれば、細目にけてある 薫「飛驒のたくみも恨めしき隔てかな。斯かるものの外には、まだ居ならはず」と愁へ給ひて、いかがし給ひけむ、入り給ひぬ。不平をいはれて

かの人形の願ひ・も宜はで、ただ、薫「覺えなき、物のはざまより見しより、すずろに戀しきこと、やしきまで・ぞ思ひ聞ゆる」とぞ語らひ給ふべき。人のさまいとらうたげにおほどきたれば、見劣りもせず、いとあはれと思しけり。程もなう明けぬる心地するに、鳥などは鳴かで、大路

さしとむる　この歌は催馬樂東屋「東屋のまやのあまりの雨そそぎ、われ立ちぬれそのとのど開かせ云々」によつた歌である。葎が繁つてゐて出入の路を閉ぢふさいでゐるのか、雨だれの落ちで待たされてゐる時間が徐り長い。アの頭韻で巧に調子がとつてある。

とざまかうざまに　何とか口實を設けて薫を其儘おかへしするすべもないので。

飛驒のたくみ　この隔ての遣戸を造つた大工が恨めしい。飛驒から多くの名匠が出たので飛驒たくみは大工の惣名となつた。

かの人形の願ひも　大君の代りに浮舟をといふやうな願での希望も仰しやらずに。

語らひ給ふべき　自分は直接聞かないが多分、と地の文。

いとあはれと　薫は浮舟を大層可愛く思召した。

程もなう明けぬる　古今戀三「長しとも思ひぞ果てぬ昔よりあふ人からの秋の夜なれば」

いかにとか　何といつてゐるのか聞いたことのない賣り物を呼ぶ聲がして。

かやうの朝ぼらけに　今日のやうなしら〳〵明けの薄暗い中で見ると頭に物を載せた物賣どもが鬼のやうに見えるといつてゐるのがお耳にはひる、それもかうした蓬の宿で丸寢をした事のない藁には面白くも感じられた。

九月にも　今は結婚を忌むといふ九月だのに、いやな事だ、どうしたといふのだらう。

おのづから　薫君に自然何かお考があるのでせう。氣づかひなさるな。九月といつても明日九月の節に入るのだと聞いて居ります。節分は季節の變り目で立春立夏立秋立冬の事。今回は私は浮舟にお供して參りますまい。中君の聞召す手前もありますのに、こつそりと行つたり來たりするのもいやですし。私は中君をお訪ねしますの意。

それはのちにも　その事ならあとでも中君におわびしてもすむ事でせう。宇治に行つてもすぐ勝手知りのあなたが居なくては、たよりなくて困る。人一人や誰でもよいから一人浮舟のお供をしなければなりませぬ。

近き程にや　近所に行くのかと思つたらさうではなくて。

法性寺　拾芥抄下諸寺部に二十一寺の一で、貞信公の創建で九條河原にあつた。

いとあさましきに　あまりの事にぼんやりして。

石高きわたりは　高い石のごろごろして居る所は車ががたん〳〵して苦しいものだ。

車のなかに　車の前部に薫と浮舟、後部に辨と侍從と、その間を細長で假に仕切つたのである。

近きところに、おほどれたる聲（しまりのない聲で）して、いかにとか聞きも知らぬ名のりをして、うちむれてゆくなどぞ聞ゆる。かやうの朝ぼらけに見れば、物しと聞き給ふも、斯かる蓬のまろねにならひ給はぬ心地に、をかしうもありけり。宿直人も門あけて出づる（わが方に歸つてゆく音が聞える）おと（夜番の人々が）す。おの〳〵この妻戸に寄入りて臥しなどするを聞き給ひて、人召して、車（に）見えてゆく）ぞ（除りあつけなくてをかしい）怪しうあへなせさせ給ふ。かき抱きて（浮舟を）乘せ給ひつ。誰も〳〵（女房達）、思ひのほかなる事どもなれど、（思ひがけぬ事ではあるが）外なる事ぞ」と歎けば、辨「尼君もいとほしく、（浮舟に對して）たうな思ひ給ひそ。九月は明日こそ節分（せちぶ）と聞きしか」といひ慰む。今日は十三日（立冬の前日）なりけり。尼君、「こたみはえ參らじ。宇治へ宮のうへ聞召さむこと（中君）もあるに、（を）中君に・・忍びて行き返り侍らむも、いとうたてなむ」と聞ゆれど、（匆々に浮舟の車をまだきこの事・聞かせ奉らむも、心恥かしく覺え給ひて、「それはのちにも罪さり申し給ひてむ。（遠路故牛など引きかしこに、しるべなくてはたづきなき所を」とせめて（强ひて）宣ふ。「人一人や侍るべき」と宣へば、この君に添ひたる侍從と（辨と同車）乘りぬ。乳母、尼君の供なりし童などもおくれて（あとに殘つて）、いと怪しき心地して居たり。

近き程にやと思へば、宇治へおはするなりけり。牛など引きかふべき心まうけし給へり・・。（けり）河原（賀茂の）過ぎ、法性寺（ほふさうじ）のわたりおはしますに、夜は明け果てぬ。若き人（侍從）はいとほのかに見奉（薫を）りて、氣もそぞろにめで聞えて、すずろに（世間への噂ひも）戀ひ奉るに、世の中のつつましさも覺えず。君ぞ、いとあさましきに、物も覺えで、うつぶし臥したるを、「石高きわたりは苦しきものを」とて、抱き給へり。羅（うすもの）の細長を、車のなかに引き隔てたれば、花やかにさし出でたる朝日影に、尼君はいとはしたなく覺ゆるにつけて、（尼姿でこんな中に居るのだから）故姫君の御供に（大君の御供をしてこそ今のやうな有樣で蓬を見奉るべきであつたのだ）こそ、かやうにても見奉りつべかりしか、（ぬ）あり經れば（長生きして居れば）、思ひか

いと憎く　辨の態度を大層憎く思つて。

物の初めに　このめでたい結婚の折に尼姿で同車するのも不吉と思ふのに、なぜかうめそ／＼して居るだらうと。やがて浮舟が出家する事を暗示するのである。

おろそかに　老人といふものは何といふ事なしに涙もろいものだと、侍從は委しい事情を知らないから、一通りの涙と思ふのであつた。

袖のかさなり　直衣の袖と紅の下著の袖と重なつた儘長々と下簾垂の外に垂れて居つたのが。

御直衣の花の　衣裳が濕つてゐるので直衣の地文の花が紅の下著にうつつて著しく目立つてゐるのを高い坂の所で見つけて。

形見ぞと　浮舟を大君の形見と思つて見るにつけても戀し涙に袖が濡れる。

心にもあらず　物の初であるので涙などいふ事は言忌すべきであるのに。

心ゆく道に　この嬉しい旅に涙でもあるまいと。

けぬ事をも見るかな、と悲しう覺えて、つつむ（隠さうと努めても）とすれどうちひそみ（泣顔して）つつ泣くを、・・（この）侍從はいと憎く、物の初めに、かたち（辨が）異にて乘り添ひたるをだに思ふに、なぞ（など）斯くいやめなると、憎く・（も）をこにも思ふ。老いたる（以下地の文）もの（人・）は、すずろに涙もろにある（な・）ものぞと、おろそかにうち思ふなりけり。君（薫も）も、見る人（目前の浮舟は）は憎からねど・（も）、空の氣色につけても、來し方の戀しさ（大君追慕の情が）まさりて、山深く（宇治へ近づく）入るままに（につれて）・（も）、霧立ちわたる（悲しさに目がかすむやうな）心地し給ふ。うちながめて（物思に耽りながら）寄り居給へる、袖（薫の）のかさなりながら長やかに出でたりけるが、川霧に濡れて、御ぞの紅なるに、御直衣の花・・（など）の、おどろ／＼しううつりたるを、おとしがけの高き所に見つけて（車の内に）引き入れ給ふ。

（薫）形見ぞと見るにつけても朝露の所せき（「所せき」の枕詞、濡れない所のないほど）まで濡るる袖かな

と、心にも（うつかり）あらず獨りごち給ふを聞きて（辨が）、いとどしぼるばかり尼君の袖も泣き濡らすを、若き人（侍從）、怪しう見苦しき世かな（人間の世は見苦しいものだ）、心ゆく道に、いとむつかしき（厄介な事）事添ひたる心地す。忍び（尼君の）がたげなる

さすがに　悲しさの中にも浮舟の手前を斟酌して、紛らはしに浮舟に詞をかけたのである。

あまたの年頃　長年この道を幾度も／＼往復した事を思ふと、何がなし感慨に堪へない。

をかしき程に　風情のある程度に扇で顔を隱しながら、恥かしさうにして外を見てゐられる目付などは。

おいらかに　おつとりしてあまり大やうすぎる點が賴りないやうな感じがする。

行くかたなき　古今戀一「わが戀はむなしき空に滿ちぬらし思ひやれども行く方もなし」

あはれ　あゝ、大君の亡靈が茲に宿つて見てゐられる事だらう。私は誰故にかうして氣もそぞろにうろつきあるいてゐるのでもない皆大君戀しさの故なのだ。

すこし心しらひて　浮舟を休息させる爲に氣をきかして。

鼻ずすりを聞き（薫が）給ひて、我（薫も）も忍びやかにうちかみ（鼻を）給ひて、さす（人や）がに・・（こ）いかが思ふらむといとほしければ、（薫）あまたの年頃、この道を行きかふ度かさなるを思ふに、そこはかとなく物あはれなるかな。すこし起きあがりて、この山の色を・も見給へ。いとうもれたりや（沈み過ぎる）」と、強ひてかき起し（浮舟を）給へば、をかしき程にさし隠して、つつましげに見いだし（物見から）たるまみなどは、いとよく思ひ（大君を髣髴させるものがあるが）いでらるれど、おいらかに（浮舟は）、あまりおほどき過ぎたるぞ心もとなかめる。いといたうこめいたる（大君は大變に子供々々して居つたが）ものから、用意の淺からず（注意が行届いてゐた）物したまひしはやと、なほ行くかたなき悲しさは、むなしき空にも滿ちぬべかめり。

（宇治に）おはし著きて、・・・・・・（引き入るゝより）あはれ（薫の心）、亡き魂（たま）や・・（とま）やどりて見給ふらむ、誰によりて斯くすずろに惑ひありくものにもあらなくに、と思ひつづけ給ひて、（車から）おりては・（も）、すこし心しらひ・・（給ひ）て・（す）・・（こし）立去り（浮舟のそばを）給へり。女（浮舟）は、母君の思ひ給はむことなど、いと歎

艶なるさまに 薫が花やかに愛情をこめて話されるので。

尼君はこなたに 婢はわざと遠慮して車を廊に寄せておりたので。

わざと思ふべき わざ〳〵そんな斟酌のいる住居でもないのに氣をつかひすぎたものだと薫は思召す。

例の人々 例によつて支配人達がうるさい程集まつてくる。

女の御臺は 浮舟のお膳は尼君の方から差上げる。

この有樣は この御屋敷は廣々として大變晴々しい。

河の氣色も この御殿は宇治の山河の景色が引立つて見えるやうな構へであるが、さういふ構への御殿からあたりの景色を眺めて。

まだなりあはぬ 佛前の御裝飾などがまだ十分整頓して居らぬ事を先達見ておいたので。

打解けたる 取澄してゐられるよりも打寛ろいでゐられる薫の御樣子が更に一段と引きつけるものがあつて。

かしけれど、(をか)・・・艶(えん)なる・(御)さまに心深くあはれに語らひ給ふに、思ひ慰めてゐ(車から)りぬ。尼君はこなたに殊更におりて、廊におぞ寄するを、わざと(薫の心)思ふべきすまひにもあらぬを、用意こそあまりなれ、と見給ふ。御庄より、例の人々、さわがしきまで參り集まる。女・(君)の御臺(んだい)(など)は、尼君の方より・(そ)まゐる。道は繁(途中は樹木が)つて(繁茂)難渋(しかつたが)かりつれど、この有樣はいと晴れ〳〵し・(う)。河(山)の氣色も山(河)の色も、もてはやしたる造りざまを見いだして、(三條の隱家の氣づまりであつたのが)日頃のいぶせさ・(も)慰みぬる・(べき)心地すれど、(薫が自分をどうなさるお積りかと)いかにもてない給はむとするにかと、浮きて怪しう(く)覺ゆ。(薫)殿は京に御文書き給ふ。(薫)文「まだなりあはぬ(心がおちつかないで)佛の御飾りなど見給へおきて、今日よろしき日なりければ、急ぎ物し侍りて、(氣分がわるい上に生憎精進日であつた事を思ひ出したので)亂り心地のなやましきに、(宇治に)物忌なりけるを思ひ給へいでてなむ、今日明日ここにてつつしみ侍るべき」など、(浮舟の方へ)打解けたる御有樣今すこしをかしくて、入りおはしたるも・(いと)

いろ〳〵によくと さま〴〵の色合のを配合のよいやうに仕立てかされてはあるが、多少垢抜けのしない點もあつて。東國に住み馴れた母君の仕業故。

思ひいでられて 忘れられないといふやうな言葉が省かれてある。

かつは 浮舟の樣子を見て色々の感が湧いてくる一方、その處置についてあれこれと思案するのである。「かつは……と思ふも」と續くのである。

これかれある 女三宮方に幾人も仕へてゐる女房のなみで。

見ずば 京と宇治と離れて居つて。

あやまりても 罷り間違つてもこんな風に手答へのないのは大變結構だ、ため直して連れ添つてゆかう。

恥かしけれど、(浮舟は身をもて)隱すべくもあらで居給へり。(浮舟の)女の御裝束などは、いろ〳〵(き)によく(ら)と思ひてしかさねたれど、すこし田舍びたることもうちまじりてぞ、(大君の紐氣のぬけたのをお召しになつてゐたお姿の)昔のいとなえばみたりし御姿の、あてになまめかしかりしのみ思ひいでられて。(浮舟の)髮の裾のをかしげさなどは、こまで〳〵(どこまでも)とあてなり。(女二宮)宮の御ぐしのいみじくめでたきにも劣るまじかりけり、と見給ふ。かつは、(浮舟をどう處置したものだらう)この人をいかにもてなしてあらせむとすらむ、(今直に堂々と本妻として三條宮に引取るのも外聞がわるいからう)只今もの〳〵しげにてかの宮に迎へすゑむも、音聞きびんなかるべし、さりとて、(侍女達並に一通りの宮仕させておくのは不滿足だ)これかれあるつらにて、おほざうにまじらはせむは本意なからむ、暫しここに隱してあらむ、と思ふも、(浮舟を)見ずばさう〳〵しかるべく、あはれに覺え給へば、(委しく)こまやかにいひたはぶれ給へも宣ひでて、(故宮や大君當時の事を)昔物語、(情愛をこめて)をかしうおろかならず語らひ暮し給ふ。(八宮)故宮の御事ど、(浮舟は)只いとつつましげにて、(はにかんでゐるだけなのを)ひたみちに恥ぢたるを、(薫は)さう〳〵しう思す。あやまりても、かう心もとなきはいとよし、教へつ

形代不用ならまし　大君の身代にはなるまい。

琴笋斯かることはたましてあつまし　きんは七絃、箏は十三絃。それがといつて、こんな事は一層出來ないだらう。

おどろ〳〵しくは　大層らしい彈きぶりではなかつたが、非常に面白くて人の心を動かす音色であつた。

今すこしあはれは　も少し趣味が羨はれたでせうに。

添ひ臥したる　脇息にもたれて俯向いてゐる浮舟の横顏は。

つも見てゐむ、田舍びたるざれ心もてつけて、しな〳〵しからず、はやり〳〵と落着きがなかつたらしかばしも、形代不用ならまし、と思ひなほし給ふ。ここにありける琴、箏のこと召しいでて、斯かることはたましてえせじかし、と口惜しければ、獨りしらべて、みやうかし、と珍らしく我ながら覺えて、いとなつかしくまさぐりつつ眺め給ふに、月さしいでぬ。宮の御琴のねの、おどろ〳〵しくはあらで、いとをかし、あはれに彈き給ひしはや、と思しいでて、「昔誰も大君も〳〵おはせし世に、ここに生ひ出で給へらましかば、今すこしあはれはまさりなまし。みこの御有樣は、よその人だにあはれに戀しくこそ思ひいでられ給へ。などて、さる所には年頃經給ひしぞ」と宣へば、いと恥かしくて、白き扇をまさぐりつつ添ひ臥したるかたはら目、いと隈なう白うて、なまめいたる額髮のひまなど、いとよく思ひいでられてあはれなり。まいてかやうの事はつきなからず教へなさばや、と思しつるかな、と思す。尼君の方より菓子まゐれり。「これはすこしほのめい給ひたりや。あはれわがつまといふこと、さりとも手ならし給ひけむ」など問ひ給ふ。浮舟「その大和言葉だにつきなく、ならひにければ、ましてこれは」といふ。いとかたはに心おくれたりとは見えず。ここにおきて、え思ふまじにもこざらむ事を思すが、今より苦しきは、なのめには思さぬなるべし。きんはおしやりて、「楚王の臺のうへの夜の琴の聲」とずんじ給へるも、かの弓をのみ引くあたりにならひて、いとめでたく思ふやうなりと、侍從も聞き居たりけり。さるは扇の色も心おきつべき閨の古へをば知らねば、偏へにめで聞ゆるぞ、おくれたるなめるかし。事こそあれ、怪しくもいひつるかな、と思す。尼君の方より菓子まゐれり。箱の蓋に、紅葉蔦など折り敷きて、無恰好にふつつかに書きたるもの、隈なき月にふと見ゆれ

まいてかやうの事は　一般の樣は申すに及ばず音樂なども薫の北方として相應しい程度に仕込んでやらう。

これはすこし　琴は少しは稽古されたことがありますか。

あはれわがつまと　東國育ちのあなただからいくら何でも吾妻琴といふものは彈かれた事でせう。

その大和言葉だに　東琴大和琴和琴皆同じ物。吾妻琴を大和琴ともいふからのあや。歌を詠むのさへ似合はしからぬ生活をしつけて來ましたからまして東琴などは。

楚王の臺の　朗詠上冬「班女閨中秋扇色、楚王臺上夜琴聲」一浮舟が白扇をまさぐつてゐたとこるから、ふと此句を誦じたのである。

かの弓をのみ　侍從は武ばかりを事とする東國に住み馴れた事故。

扇の色も　薫が吟じられた右の句は、漢の成帝の宮女班女が寵衰へて捨てられた事を白扇が夏珍重されて秋風に捨てられるのに比して詠んだものであるのに、侍從は其故事を知らずに只管感心してゐるのは氣がきかないのだらう。

事こそあれ　吟誦すべき句もあらうに自分ながら妙な句を誦つたものだと。これも例の前表である。

菓子急ぎ　薫の様子が果物に早く手を出したがつてゐるやうに見えた。

宿木は　宿木巻の薫の歌「宿木と思ひ出でずば木のもとの旅寝もいかに淋しからまし」を受けた歌。大君と浮舟と二人は變つてゐるけれども、今こゝに來てゐる事が思ひ出される薫は昔ながらの薫だから昔の**里の名も**　宇治の里の意。里の名も即ち世を憂く思ふといふ里の名も昔と變らず、大君を失つた闇の中にさした月影即ち自分も昔のまゝに（昔は大君に容れられなかつた）世を憂く思つてゐるの義。「里の名も」とあるのだから、これと併せ指すものが無ければならないのに、この「も」を解く事が忘れてゐる。諸説皆誤である。

わざと　わざ〳〵返歌する積りでなしに口ずさまれた歌を侍從が辨に取次いだとか。

ば、目とどめ給ふ（薫がその紙に書きぶりをしてゐるのを）程に、菓子（くだもの）急ぎにぞ見えける。

辨　宿木は色かはりぬる秋なれど昔覺えてすめる月かな（光の澄むに住むをひゞかした艶な書きぶりをしてゐるのを）

と、

薫　里の名も昔ながらに見し人のおもがはりせる闇の月影（浮舟に移つたことが恥かしく）

わざと返りごととはなくて宣ふを、侍從なむ傳へけるとぞ。

宮なほ　句宮今年二十八。「思し忘るる世なし」を修飾する。

ほのかなりし　二條院の對での事。

女君をも　中君に對しても、斯様につまらぬ事の爲に、かうした方面（女に關する）の事で無關に嫉妬なさる。浮舟を中君が隱したと邪推されたからである。

思はずに心憂し　こんなでないと思つてゐたのに、なさけない女だ。

やんごとなきさまに　薫が本妻の待遇はなさらないにしても、相當深く愛して隱しておかれた人なのに、餘計な口をきいておらせしたならば、宮は其儘聞き流しになさる筈の御氣質でもないやうだ。

さぶらふ人の　句宮は女房達の中でも一寸手をつけて見たいと思ひ立たれた總ての女は、宮などのおいでになるやうな家でないふ不體裁な御性質なのだから、あれ程長い間思ひつめてゐられては、まして必ず見る浮舟に對しては、まして必ず見苦しい事件を引起される事だらう。

宮、なほかのほのかなりし夕べを思し忘るる世なし。（今もまだ夕方ちらりと浮舟を見た事を分ではなさうであつたが）ことく〳〵しき程にはあるまじげなりしを、人がらのまめやかにをかしう（浮舟の）あだなる御心には、口惜しくてやみにしもありしかなと、（浮氣な句宮の）（いと）（本意を遂げずに）（し）残念にねたう思さるるままに、女君をも、かうはかなき事ゆゑ、あながちに斯かるすぢの物憎みし給ひけり。（句）「思はずに心憂し」と、はづかしめ怨み聞え給ふ折々は、（中君は）いと苦しうて、（浮舟の身分を句宮に打明けようかと）まにや聞えてまし、（浮舟の身分ありのまゝ）と思せど、やんごとなきさまにはもてなし給はざなれど、あさはかならぬ方に心とどめて人の（薫）隱しおき給へる人を、物いひさがなく聞えいでたらむにも、（浮舟の事を句宮に）さて聞きすぐし給ふべき御心ざまにもあらざめり、さぶらふ人のなかにも、（句宮の）はかなう物をも宣ひ觸れむと思し立ちぬる限りは、（あ）るまじきなと（は）までも尋ね（と）させ給ふ御さまよからぬ本性（ほんじやう）なるに、さばかり月日を經ておぼしし（あの女は犬した身）こと取りいで給ひてむ、（浮舟の事を他人から）ほかより傳へ聞き給はむはいかがはせ

防ぐべき人の一旦思ひ立たれた以上、他からはないから、結局浮舟に本意を遂げられる事だらう。
よその人よりは
とてもかくても
いとほしながら
おしこめて
匂宮といふ人は、さうなれば自分は浮舟とは姉妹の事故、他人よりは一層外聞わるい目を見るだらう。どうあらうとも、自分の怠慢から破滅を招くやうな事はすまい。迷惑に思ひながらも。心の中に収めて嫉妬してゐる世間普通の女になつてゐられた。

所せき身の程を
今いとよく
やう〳〵
窮屈な御身の上だもの、適当な便宜がなくては手軽に通つて行ける道でないから、神の禁止にあふよりもつとうるさい事情で通ふ事が出来なかつた。伊勢物語「戀しくば來ても見よかし千早振神のいさむる道ならなくに」今いとよくやがて浮舟を好過すもと〳〵宇治に行つた時の慰めにもとの考があつての事だもの少し日数のかゝりさうな用事を拵へて、ゆつくり行つて見よう。「もどきあるまじく」逐次世間の非難を緩和させて。

なのめにてこそ
人目に立たぬやうにして我物にするが上策だらう。

俄に何人ぞ
薫は急に女を迎へられたが、あれは何人だらう、いつからの間柄だらう。
又宮の御方の
又浮舟を京に引取つて八宮の時からの宇治をきつぱり捨てて昔の事を忘れたやうなことをするのも、中君の手前本意ない思ひがする、などと冷静な態度を取られるのも、例の暢氣すぎる薫の心故であらう。

すこし暇なき
薫は官位も進んで、今迄よりは多少政務繁忙にはなられたが、中君に對しては今も怠らず好意を寄せられる事昔と同様である。
見奉る人も
それを見る女房もある。
これこそは
薫の親切を怪しむ者もあるが。薫のあの態度こそは、人情に厚い例でもあり、又大君に對したいつまでも愛情の（大君に對しては）衰へがないのみならず、もこれやかな例もあるし、そこれが相手の亡くなつた後までと思ふ。
思はずなりける
自分は意外に不運な身の上であつたのだ、姉君のお考へに背いて薫君の妻にもなり兼ねずにかういつも心配して氣苦しなければならぬ（浮舟が實妹だから前文にあるやうに遠慮しなければならぬ）匂宮に身をまかせねばならぬ）匂宮に身をまかせてあるよ。
少なからず心を動かされる
「物思ひ憚かる」は湖月抄に「物思はゝかる」とあつて「物思はしかる」とも讀みうる字體である。

む、いづかたざまにもいとほしくこそはありとも、防ぐべき、人の御心ざまならねば、よその人よりは聞きにくくなどばかりぞ覺ゆべき、とてもかくても、わが怠りにてはもてそこなはじ、と思ひかへし給ひつつ、いとほしながらも聞えいで給はず、こと忘れて尤もらしくいひくるめる事はえうなさらないからとざまにつき〳〵しくはえいひなし給はねば、おしこめて物怨じしたる、世の常の人になりてぞおはしける。

薫は、何ともいへない程鬱氣に搆へて居つて宇治に通つてもゆかずたとしへなくのどかに思しおきてて、浮舟が待ちどほなりと思ふらむ・と、心苦しうのみ思ひやり給ひながら、所せき身の程を、さるべきついでなくて、かやすく通ひ給ふべき道ならねば、神のいさむるよりもわりなし。されど、今いとよくもてなさ・むとす、山里の慰めと思ひおきてし心あるを、すこし日數も經ぬべき事ども作りいでて、のどやかに行きても見む、あのやうにして當分は誰も知らない所に住ませてさて暫しは人の知るまじき住みどころして、やう〳〵、田舎住居に理さる方にかの心をものどめおき・て、薫自身のわが爲にも人から非難される事のないやうにして人のもどきあるまじく、

なのめにてこそよからめ、俄に、何人ぞ、いつよりなど、聞きとがめられむも世間うるさしいと、物さわがしく、初めの心にたがふべし、又宮の御方の聞きおぼさむことも、もとの所をきは〳〵しうねて離れ・・、昔を忘れがほならむも、いと本意なし、など思ししづむるも、例のいとのどけさ過ぎたる心からなるべし。浮舟を引取るべきわたすべき所思しまうけて、忍びてぞ造らせ給ひける。すこし暇なきやうにもなり給ひにたれど、宮の御方には、なほたゆみなく心寄せ仕うまつり給ふこと同じやうなり。見奉る人も、あやしきまで思へ・ど、世の中をやう〳〵お・ぼし知り、人の有様を見聞き給ふままに、これこそは誠に昔を忘れぬ心ながさの名殘さへ淺からぬためしなめれと、あはれもすくなからず。漢が年を取られるにつれてねびまさり給ふままに、人がらも世のおぼえも、さま殊に物し給へば、宮の御心のあまり頼もしげなき時々は、中君の後悔思はずなりける宿世かな、大君故姫君のおぼしおきてしままにもあらで、かく物思ひ憚かるべ

なほ〳〵しき　普通の平人こそさうした縁故があるといふのでその縁をたよつて親しみを續けるといふに相應しからう。（宮家の縁によつて出世を計らうとするのである）

なか〳〵　なまなか斯様に身分がいいだけに並はづれた親しい交際ぶりであるなどと。

かぎりある程に　親しくするにも際限のある身分ではこれ〳〵の親しみが最高の親しみであるのにそれを超えての意。

さりとても　中君の方でさうしたら態度ではあつても、薫はいつまでも昔の儘の心持が變らずに中君に好意を寄せてゐられたのであつた。

宮も　宮も、浮氣の御性質こそ氣に入らぬ點もあるが。

ほかには　中君以外の人の腹にはなにかと中君を第一夫人といふは生れなこんな若君は生れながらの心持で氣のはらない親しみのある點で、一段上に置いて待遇されるので、中君も今迄よりは多少落着いた氣持でゐられる。

正月の一日　匂宮二十八。若君二つ。

き方にしもかかりそめけむよ、と思す折々多くなむ。されど對蕗に御心を深う知らぬ人は、ゆかり尋ねたる睦びをも忘れぬにつき〳〵しけれ、なか〳〵、かう限りある程に、例にたがひたる有樣ぞ、など言ひ思はむも、つつましければ、宮のうおぼし憚り給ひつつ、さりとても絶えず同じ心の變り給はぬなりけり。宮も、あだなる御本性こそ見ま憂きふしもまじれ、若君のいとうつくしうおよすげ給ふままに、ほかには斯かる人も出でくまじきにやと、やんごとなきものに思して、打解けなつかしき方には人にまさりてもてなし給へば、ありしよりは、すこし物思ひしづまりて過ぐし給ふ。

正月の一日過ぎたる頃わたり給ひて、若君の年まさり給へるを、

もてあそびうつくしみ給ふ晝つかた、小さき童、綠の薄樣なる包み文の大きやかなるに、小さき鬚籠を小松につけたる、又すくゝしき立文取り添へて、「それはいづくよりぞ」と宣ふ。童「宇治より大輔のおとどにとて、もて煩ひ侍りつるを、例のお前にてぞ御覽ぜむとて、取り侍りぬる」といふも、いとあわただしき氣色にて、童「この籠は、金を造りて、色どりたる籠なりけり。松もいとよう似て造りたる枝ぞとよ」と、童がゑみていひつづくれば、宮も笑ひ給ひて、「いで、我ももてはやしてむ」と召すを、女君、いと傍痛くおぼして、「文は大輔がり・・やれ」と宣ふ御顏の赤みたれば、宮、大將のさりげなくしなしたる文にや、宇治の名のりもつきづきし、と思し寄りて、この文を取り給ひつ。さすがに、それならむ時に、と思すにいとまばゆければ、「あけて見むよ。怨じやし給はむとする」と宣へば、見苦しう、何かは、その

包み文　書狀の一形式。薫物などを包むやうに薄樣に包んで糊封にしてある文で艷書などは包み文にするのが常である。

鬚籠　竹などを編みなる籠。

立文　書狀の一形式。本紙を禮紙で包み、その上を更に白紙で包んで、その上下を裏へ折りこむ。

大輔のおとどもて煩ひ侍りつるを　中君の女房。使者がどうして渡していやらしてゐうて、持ち惱んでゐましたのを。例によつて中君の御前で御覽になつてと思召すことと存じまして私が受取りました。

金を造りて　この鬚籠は銅で拵へて綠青で彩つた物であつた。

我ももてはやしてむ　私もその鬚籠の品を稱美しよう。

大將のさりげなく　薫が自分のらしく見えないやうによそほつたる文かも知れぬ、宇治からといふ文かも知れぬ、うてよこしたのもそれらしいと感づかれて。

さすがにそれならむ　それが本當に薫からの文であつたらと思ひ召すとさすがに匂宮はきまりがわるいやうがわるいから一應「あけて見むよ云々」とことわられたのである。

女どちのなかに書きかよはしたらむ氣輕に書いた内輪の文打解け文をば御覽ぜむ」と宣ふが、中君がさわがぬ氣色なれば、「さば見むよ。女の文がきはいかがある」ととて、つかなくて年も暮れ侍りにける。山里のいぶせさこそ、峯の霞も絶間なくて」とて、端に、「これ・は、若君のお前に。變なものと思ひまあやしう侍るめれど」と書きたり。殊にらう〳〵じき節も見えねど、覺えなきを、御目立てて・この立文を見給へば、中君の言葉通りに女の手にて、

年改まりて・何事かさぶらふ。御わたくしにも、いかに賴もしき御喜び多く侍らむ。ここには、いとめでたき御すまひの心深きを、なほふさはしからず見奉る。斯くてのみつく〳〵となむ、物憂きことに歎かせ給ふめる。若君のお前にとて、卯槌まゐらせ給ふ。大きお前の御覽ぜざらむ程に御覽ぜさせ給へ」

と・なむ・、こまかに言忌もえしあへず、物歎かしげなるも、打返し〳〵怪しと御覽じて、「今はまのかたくなしげなるに付けても宣へかし。たがぞ」と宣へば、「昔かの山里にありける人のむすめの、さるやうありて、此頃かしこに侍るとなむ聞き侍りし」と聞え給へば、おしなべてつからまつる・とは見えぬ文がきを、と・心得給ふに、かの、「煩はしきこと」とあるに思しあはせつ。卯槌・・をかしう、つれ〳〵なりける人のしわざと見えたり。

またぶりに、山橋造りてつらぬき添へたる枝に、

まだふりぬ物にはあれど君が爲深き心にまつと知らなむ

と、殊なることなきを、かの思ひわたる人のにやと思し寄りぬるに、御目とまりて、「返りごとし給へ。なさけなし。隱い給ふべき文にもあらざめるを、など御氣色のあしき。まかりなむよ」とて立ち給ひぬ。女君、少將などして、「いとほしくもありつるかな。をさなき人の取りつらむを、人はいかでか・見ざり

言忌もえ避けずに。以前に宇治の山莊に仕へて居つた人の娘で、仔細あつて彼處に居るのだとの事である。

おしなべて・並々の奉公人の手紙とは思はれぬ書きぶりなるもをと。

煩はしきこと・浮舟の手紙中に煩はしい事がある故中君方に行く事を厭ふといふ意味が書いてあるので、さては浮舟かと思ひ當られた。

卯槌・正月上卯日に内裏に獻る一般民間にも贈物にした。もの。湖月抄(抄)卯枝にしたが本で、槌大からたいは同やうに聊其姿も小からぬなるべし、糸所より獻かはれる槌也、糸などにてかざりたるは物也、何も同時に獻ずるとはおぼえず。

まだふりぬ・二股の枝。

山橋造りて・作り物の藪柑子を卯槌に付けてあるに二股の松の枝を通して添へてあつて、その枝につきつけてあつて。

なさけなし隱い給ふべき・古歌を響かしなくてはなしてある。

返歌秘密の手紙ではないのに、私が見たからといつて何でもない。

歸りませう。この手紙は童女

が受取つたのだらうに、なぜ女房達は知らなかつたのですか。

この子　文を受取つた童女。

生ひ先見えて　末はさこそとおもはれるやうに大やうなのが子どもは奥ゆかしいものです。

こぞの冬　以下この童女の種姓を説明するのである。

わが御方に　匂宮がわが居間にお歸りになつて。

いとあまりなる　いくら大君の形見の地だからとて、泊るべからざる所へ泊るのはあまりだと思つて居つたが、それはかうした戀人を隠しておかれたのだらう、と頷かれる事もあつて。

大内記　衆式部大輔なる人で道定と名のる男である。

集　詩集。

つるぞ」など、忍びて宣ふ。少將「見給へましかば、私が見つけたのなら御前へ差上げる宮はございませぬいかでかは參らせまし。すべてこの子は、考への足りない出過ぎ者心地ならうさしすぐして侍り。生ひ先見えて人はおほどかなるこそをかしけれ」など愼めば、中君「あなかま。をさなき人な叱りなさるな腹立てそ」と宣ふ。こぞの冬、人の參らせたる童の、顔はいとうつくしかりければ、匂宮もいとらうたくし給ふなりけり。

わが御方におはしまして、匂宮の心中怪しうもあるかな、宇治に薫大將の通ひ給ふことは、年頃絶えずと聞くなかにも、『忍びて夜とまり給ふ時もあり』と人のいひしを、いとあまりなる、人の形見とて、さるまじき所に旅寢し給ふらむ事と思ひつるは、かやうの人隱しおき給へるなるべし、と思し得ることもありて、御書のこと樂間上の事でにつけて使ひ給ふ大内記なる人の、かの殿に薫親しきたより・・・を思しいでて、お前に召す。大内記が參れり。韻塞すべきに、集どもえり出でて、こなたなる厨子に積むべきことなど宣はせて、匂「右

いかでか　ぜひとも見たいものだ。

不斷の三昧堂　常住不斷の念佛堂。

下の人々　下々の者ども。

けしうはあらず　薫が憎からず思召す女でございませう。

あのわたりに　宇治界隈の薫の領地の支配人で薫の命を奉じて山莊に參り御用をつとめてゐる人達を宿直に當らせたりなどして。

京よりも　薫の本邸からも内密に然るべき面倒は見てゐられます。

さすがに　幸福ではありながらさすがに不自由な淋しい山住ひをしてゐれるのだらう。

たしかに　はつきり誰それとその女の名を語らなかつたか。

今建てられたる　新築の寢殿に。

大將の宇治へいますること、なほ絶え果てずや。寺をこそいと立派に造つたのだねかしこく造りたなれ。いかでか見るべき」と宣へば、内記「寺いとかしこくいかめしく造られて、不斷の三昧堂など、いと尊く莊嚴に造作を指圖されたときてられたりとなむ聞き給ふる。通ひ給ふことは、こぞの秋ごろよりは、以前よりも繁々とありしよりもしばしば物し給ふなり。下の人々の忍びて申ししは、『浮舟の事女をなむ隱しすゑさせ給へる。けしうはあらず思す人なるべし。あのわたりに領じ給ふ所々の人、皆仰せにて參り仕うまつる、山莊の宿直にさしあてなどしつつ、京よりも、いと忍びてさるべき事など問はせ給ふ。いかなるさいはひ人の、さすがに心細くて居給へるならむ、となむ、ただこの十二月の頃ほひ申す』と聞き給へしなり」と聞ゆ。匂宮の心いと嬉しくも聞きつるかな、とおもほして、匂「たしかにその人とはいはずや。かしこにもとよりある尼ぞとぶらひ給ふと聞きし」。内記「辮君尼は廊になむ住み侍りける。この人は、今建てられたる・屋になむ、きたなげなき女

口惜しからぬ 相當立派な生活をして居ります。

何の心ありて 一體薫はどういふ料簡で、どういふ身分の女をそんなにしてかこつておかれるのだらう。

猶いと氣色ありて 薫はやはり一癖ある人なみはづれた人だ。

房などもあまたして、口惜しからぬけはひにて居て侍る」と聞ゆ。匂「をかしき事かな。何の心ありて、いかなる人をかはさてすゑ給ひつらむ。猶いと氣色ありて、なべての人に似ぬ御心なりや。左夕霧のおとどなど、『この人のあまり道心に進みて、山寺に夜さへともすれば泊り給ふなるかろ〳〵しさ』ともどき給ふもすれば、かの殿にいと睦まじく仕うまつる家司御心の婚になむありければ、隠し給ふことも聞くなるべし。御心のうちには、いかにして、この人を、見し人かとも見さだめむ、かの君のさばかりにてすゑたるは、なべてのよろしき人にはあらじ、このわたりには、いかでか疎からぬにか、あらむ、心を

げに 成程夕霧のいはれる通り薫はなぜあゝも佛いぢりにこそ〳〵あるきまはつて居るのだらう。今も猶大君の形見の宇治を忘れかねてゐると聞いて居つたのだが、實はかうした内證事があつたのだ。

この人は この大内記は薫に親しく仕へてゐる大藏大夫仲信の婿であつたので、薫の秘密をも聞くのであらう。一三〇頁參照。

かの君の 薫がそれ程大事にして隠しておくのは、平凡な並々の女ではあるまい。中君とはどうしてこんなに遠々しくないのだらう。

ただその事を 匂宮は此頃は浮舟の事のみを思ひつめてゐられる。

賭弓 正月十八日に天皇弓場殿に臨御して近衛兵衛四府の舍人どもの競射をみそなはすのである。

内宴 正月廿一二三日の間に當つた日仁壽殿で行はれるうち〳〵の節會で、文人どもも題を賜つて詩を作り御前で講ぜられ、一二獻の後親王公卿に若菜のあつものを賜ふ。

司召 (細)親王は巡給にあづかりて、吾身の昇進などには心をもかけたまはざると也(師)春の除目をばあがためしといへどもつかさめしは惣名なればかくもいふ也(抄)春の除目は縣召也其内にも、京官を任ずる事はある也(後略)(湖月抄)實は甚だ不都合な話なのだがね。以前に私が一寸逢つた事のある女でその後行方知れずになつて居つたその女が。

かはして隠し給へりけるも、いとねたう覺ゆ。

ただその事を此頃はおぼしみたり。 賭弓、内宴など過ぐして、司召などいひて人の心つくすめる方は何とも思さねば、宇治へ忍びておはしまさむことをのみ思しめぐらす。この内記は、例よりはなつかしう召使ひて、匂「いと難きことなりとも、わが言はむことはたばかりてむや」など宣ふ。かしこまりてさらば、いかにして、かの君のさばかりにてすゑたるは、なべてのよろしき人にはあらじ、このわたりには、いかでか疎からぬにか、あらむ、心を

いとびんなき 實は甚だ不都合な話なのだがね。以前に私が一寸逢つた事のある女でその後行方知れずになつて居つたその女が。

何か人に 誰にも少しも感づかれずに宇治へゆくにはどう工面したものだらう。

あな煩はし うるさい相談だな。

殊に程遠くは 内記は思つたが。格別遠いといふ程ではございませぬ。

亥子の時 夜の十時から十二時迄の間には著けませう。そして明早朝お歸りになるがよろしからう。

人の知り侍らむ 人に知れる事は、只お供の人に知れるだけで他に知れる氣遣はございませぬ。

それも深き心は お供の者とても深い事情は知る筈もございませぬ。

かろ〳〵しき 輕率といふ非難を受けさうなのが外聞上憚られるのだ。

かうまで かうまで口に出してしまはれたからには思ひ止まることはお出來にならない。

かうぶり得たる 叙爵した。出雲權守時方の事。

古へを 中君に通つた當時を。

怪しきまで 昔は不思議な位私の味方になつて中君に手引してくれた薫の爲に後暗い事だ。

さま〴〵なるに 薫に對し濟まぬと思つたり、浮舟を見たく思つたりする意。

むげに人知らぬ まるで人に知られぬお忍びあるきは、いくらも出來なさらぬ御身分であるのに。

夕つかた出でさせおはしまして、亥子の時にはおはしまし著きなむ。さて曉にこそは歸らせ給はめ。人の知り侍らむことは、ただ御供にさぶらひ侍らむこそは。それも深き心はいかでか知り侍らむ」と申す。

さかし。昔も一度二度通ひし道なり。かろ〴〵しきもどき負ひぬべきが、物の聞えのつつましきなり」

とて、返す〴〵あるまじき事にわが御心にも思せど、かうまでうちいで給ひつれば、え思ひとどめ給はず。御供に、昔もかし

その他

こののあ・ない知れりし者二三人、この内記、さては御乳母子の、藏人よりかうぶり得たる若き人、睦まじき限りをえり給ひて、

「大將今日明日よもおはせじ」など内記によくあ・ない聞き給ひて、出で立ち給ふにつけても、古へを思し出づ。怪しきまで心を合せつつねてありきし人のために、うしろめたきわざにもあるかな、と思し出づることもさま〴〵なるに、京のうちだに、むげに人知らぬ御ありきは、さはいへどえし給はぬ御身に

物のゆかしき 人一倍好奇心の強いお氣質故。

いつしかいかならむ 首尾はどうだらう、顏も見あはないで歸るやうな結果になつたら、心淋しくもあり變な事になつたりしまふだらう（こんなにまでして來たのに）と宇治が近くなると早速そんな事を考へておいでになる。「いつしか」は「思すに」を修飾する。

法性寺 九條河原にあつて貞信公の建立。

内記 大内記は、昵懇の間柄なる薫の家來に、山莊の勝手を委しく尋ねに聞いてあつたので、夜番の居る所には立寄らないで。

我もさすがに 勝手は豫め聞いておいたものの、自分もまだ見た事のないお屋敷故。

參りて 内記が匂宮の待つてゐられる處に來て。

ただこれより 構はず此處からお入りになるが宜しからう。

やをらのぼりて 匂宮が寢殿の縁に。

隙あるを 粗雜な造り故。

しも、あやしきさまのやつれ姿して、御馬にておはする心地も、物怖ろしくやましければ、山深うなるままに、問ひ聞きたりければ、宿直人ある方には寄事もなくて歸らむこそさう〴〵しく怪しかるべけれ、と思すに、心もさわぎ給ふ。法性寺のほどまでは御車にて、それよりぞ御馬には奉りける。

急ぎて、宵過ぐる程におはしましぬ。内記、あ・ない、よく知れる限の殿の人に、問ひ聞きたりければ、宿直人ある方には寄らで、葦垣しこめたる西おもてを、やをらすこしこぼちて入りぬ。我もさすがにまだ見ぬ御すまひなれば、たど〳〵しけれど、人繁うなどしあらねば、寢殿の南おもてにぞ、火ほの暗う見えて、そよ〳〵と・・する音。參りて、まだ人は起きて侍るべし。ただこれより・・おはしまさむ」としるべして、入れ奉る。やをらのぼり・・て、格子の隙あるを見つけて寄り給ふに、伊豫

誰かは來て見む　誰がこんな所へ來て覗く者があらうと油斷して。

うちかけて　奥をかくすには布を垂れておかなければならないのに、几帳の手に垂布を打懸けて隅に押しやつてある。

うちつけ目か　二條院で見たのは無用意に見たのだから、そのせいで今似てゐるやうに思ふのかと。

君　浮舟。

對の御方に　中君に大層よく似て居る。

物折るとて　縫物に折目をつけようとして。

かくてわたらせ　浮舟が母と共に石山詣をする約束のあつた前夜故斯くいふ。

折しも　薫の來られた時にお留守では、隱れたやうで見苦しいことです。

むかひたる人　右近に對座してゐる女房。

斯くなむわたり給ひ　石山詣に出かけられたと薫へ御通知申上げておかれるが宜しからう。

かる〴〵しう　何で沙汰なしに隱れるやうなかる〴〵しい眞似が出來ませう。

やがてわたり　京の母君の方には行かずに眞直にお歸り遊ばせ。

かくて　此儘此處にじつとして居つて。

このおとどの　あの乳母殿があまり性急なもんだから、こんなに俄に石山詣などをお勸めなさつたのでせう。

物念じして　辛抱強い氣の長い人が最後の幸福を得るのです。

などてこのままを　なぜあの乳母を此處に引きとめておかなかつたのでせう。お婆さんといふものは厄介な考へを持つてゐるものです。

げに憎き者　さう〳〵あの時邪魔した憎いお婆さんが居つたつけ。

簾は、さら〳〵と鳴るも氣つまし。新しう清げに造りたれど、さすがに荒々しくて隙ありけるを、誰かは來て見むと打解けて、穴もふたがぬなるべし。几帳の帷子うちかけておしやりたり。

火あかうともして、物縫ふ人三四人居たり。童のをかしげなる、糸をぞよる。この童女のこれが顏、まづかの二條院での火影に見給ひしそれなり。うちつけ目かと、なほ疑はしきに、右近と名のりし若き人もあり。君は腕を枕にて、火を眺めたるまみ、髮のこぼれかかりたる額つき、いとあてやかになまめきて、對の御方にいとよう覺えたり。この右近、物折るとて、右近「かくてわたらせ給ひなば、とみにしもえ歸りわたらせ給はじを、『殿は、この司召の程過ぐして、朔日頃には必ずおはしまさなむ』と、昨日の御使も申しけり。御文にはいかが聞えさせ給へりけむ」といへど、いらへもせず、いと物思ひたる氣色なり。右近「折しも這ひ隱れさせ給へるやうならむが見苦しさ」といへば、むかひたる人、「それは、斯くなむわたり給ひぬると、御消息聞えさせ給へらむこそよからめ。かる〴〵しういかでかは音なくては這ひ隱れさせ給はむ。御物詣のちは、やがてわたりおはしましねかし。かくて心細きやうなれど、心にまかせて、安らかなる御すまひにならひて、なか〳〵旅心地すべしや」などいふ。又あるは、「なほ暫し斯くて待ち聞えさせ給はむぞ、のどやかにさまよかるべきや。京へなどおいでなし。このおとどのいと急に物し給ひて、俄にかう聞えなし給ふなめりかし。昔も今も物念じしてのどかなる人こそ、さいはひは見果て給ふなれ」などいふなり。右近、「などてこのままをとこそ」と憎むは、乳母やうの人を譏るなめり。げに憎き者ありきかし、と思しいづるも、夢の心地ぞする。傍痛きまで打解けたる事どもをいひて、右近「宮のうへこそいとめでたき御さいはひ

左の大殿　夕霧があれ程すばらしい御威勢を以て、大騒ぎして匂宮を大事にしていらつしやるけれども、中君に若君がお生れになつてからは、六君よりもずつとうは手でいらつしやる。**かかるさかしら人**　中君には浮舟の乳母のやうなでしやばり者が附いて居ないので、あせらずにうまくたちまはつていらつしやるのでせう。**殿だに**　薫の眞の御愛情さへ變らなかつたら、浮舟の幸福も中君に劣るものではありませぬ。**よその人にこそ**　他人との優劣を考へるのは構はないが、中君の事は決して口にしてくれるな。**何ばかりの**　浮舟と中君とはどの程度の親族關係なのだらう。**心恥かしげにて**　氣がおける深みがあつて上品な點は。**らうたげにこまかなる**　可憐で情味のこまやかな點が興味を引く。**よろしう**　いゝ加減な不十分な點を浮舟に見付けたからとて、あれ程心から見たがつてゐられた女だもの、浮舟たる事をつきとめただけでその儘にしておかれる匂宮の御性質ではないから。**物へ行くべき**　以下匂宮の心。浮舟は物詣に出かけるのだと見える。**いかで此處ならで**　此處でなくては又と尋ねあふ事が出來るものではない、といつて今晩中には何とも仕樣がない。**御車は**　母君からのお迎への車は。**君のあと近く**　浮舟の足の方近く。**又せむやうも**　といつて別に爲すべきすべもないので。**殿の覺えなき**　薫の御入來かと。思ひがけない時のおいでといつしやいますこと。**物へわたり**　以下薫の眞似をしていふのである。

なれ。左の大殿の、さばかりめでたき御いきほひにて、いかめしうののしり給ふなれど、若君うまれ給ひてのちは、こよなくぞおはしますなる。かかるさかしら人どものおはせで、御心のどかに、かしこうもてなしておはしますにこそはあめれ」といふ。女房「殿だにまめやかに思ひ聞え給ふこと變らずば、劣り聞えじ」といふを、浮舟君すこし起きあがりて、浮舟「いと聞きにくき事。よその人にこそ、劣らじともいかにとも思はめ。かの御事なかけても言ひそ。漏り聞ゆるやうもあらば傍痛からむ」などいふ。何ばかりの親族にかはあらむ、いとよくも似通ひたるけはひかな、と思ひくらぶるに、心恥かしげにてあてなる所は、かれはいとこよなし。これは只らうたげにこまかなる所ぞいとをかしき。よろしうなりあはぬ所を見つけたらむにてだに、さばかりゆかしと思ししめたる人を、それと見てさてやみ給ふべき御心ならねば、まして隈もなく見給ふに、いかでかこれをわが物にはなすべきと、わりなくおぼし惑ひぬ。物へ行くべきなめり、親はあるべし、いかで此處ならで又は尋ねあふべき、今宵の程には又いかがすべき、と心も空になり給ひて、なほまもり給へば、右近、「いとねぶたし。つとめての程にも、これは縫ひてむ。いそがせ給ふとも、御車は日たけてぞあらむ」といひて、しさしたる物どもとりまとめて取り具して、几帳に打懸けなどしつつ、うたたねのさまに寄りにり臥しぬ。浮舟君もすこし奥に入りて臥す。右近・北おもてにいきて、暫しありてぞ來たる。君のあと近く臥しぬ。ねぶたしと思ひければ、いと疾う寢入りぬる氣色を見給ひて、又せむやうもなければ、忍びやかにこの格子をたたき給ふ。右近聞きつけて、「たぞ」といふ。こわづくり給へば、あてなるしはぶきと聞き知りて、殿のおはしたるにやと思ひて、起きて出でたり。「まづこれあけよ」と宣へば、右近「あやしう覺えなき程にも侍るかな。

仲信　大藏大夫で大内記道定の舅。

いとこそ　暗い山道をひどい難儀をしてやつて來た。

思ひも寄らず　匂宮とは知らずに。

道にて　燈火を消させようとの匂宮の策略。盜賊にあつたやうに僞つたのである。

來たりとて　私が來たからといつて人を起すな。

いとらう〳〵じき　匂宮は機轉の利くお方故。

ただかの御けはひに　薫そつくりの樣子に。

ゆゆしき事のさま　「わりなく怖ろしき事」とあつた事。

近う寄りて　匂宮が浮舟に。

馴れがほに　薫を裝つて。

例のおましに　いつもの御寢所に。

物も宣はず　匂宮は發覺をおそれて。

御ふすま參りて　浮舟に夜具をかけてあげて。

夜はいたう更けて侍・・らむものを」といふ。匂「物へわたり給ふべかなりと仲信（薫の家司）がいひつれば、おどろかれつるままに出で立ちて、いとこそ（たまらなかつた）わりなかりつれ。まづあけよ」と宣ふ聲、いとようまねび（薫に）似せ給せて、忍びたれば（小聲だから）、思ひも寄らずかい放・つ。匂「道にて、いとわりなく（いひやうもない）怖ろしきことのありつれば、あやしき姿になりてなむ（盜賊にあつて變な旨を）。火暗うなせ」と宣へば、右近「あな（まあ大變だ）いみじ」とあわてまどひて、火は取りやりつ。匂「われ人に見すなよ。來たりとて、人おどろかすな」と、いとらう〳〵じき御心にて、もとより・ほのかに（も）似（薫に）たる御聲を、ただかの御けはひにまねびて入り給ふ。ゆゆしき、事のさまと宣へ・る（ひっ）、いかなる御姿ならむ、といとほしくて、我も（右近も）隱ろへて見奉る。匂宮のさまいとほそやかになよなよと裝束きて、香のかうばしきことも劣（薫に）らず。近う寄りて、御ぞども脫ぎ、馴れがほに打臥し給へれば、右近「例のおましにこそ」などいへど、物も宣はず。御ふすま參りて、寢つる（浮舟の近くに）人々おこし

御供の人など　薫が來られる時には、お供の人などはいつも辨尼の方にあつて、浮舟の方では構はぬ事になつてゐるので。

あはれなる　こんなに夜おそくおいで下さるとはありがたい事だ。

ささめくしもぞ　さゝやき聲が却つてやかましい。

つつましかりし　人前のある二條院に於てすら無理わざをなさらうとした御料簡なのだから。

ひたぶるに　誰憚る人もない今の場合、まるつきり話にならない。

その折の　二條院で浮舟が冷淡であつた事や、それ以後ずつと思ひ續けてゐる趣を、だん〳〵と仰しやるので。

又猛きこと　外によい手段がないので。

なか〳〵にて　今後容易に逢へさうもない事を豫想すると、なまなかの逢瀨がつらくてお泣きになる。

て、すこししぞきて皆寢ぬ。御供の人など、例のここには知らぬならひにて、女房「あはれなる、夜のおはしましざまかな。かかる御有樣を御覽じ知らぬよ」など、さかしらがる人もあれど、右近「あなかま給へ。夜聲は、ささめくしもぞかしかましき」などいひつつ寢ぬ。女君は、あらぬ人なりけりと思ふに、あさましういみじけれど、聲をだにせさせ給はず。いとつつましかりしわりなかりし御心なれば、ひたぶるにあさまし。所にてだに、わりなかりし御心なれば、ひたぶるにあさまし。初めよりあらぬ人と知りたらば、聊かいふかひもあるべきを、夢の心地するに、やう〳〵、その折のつらかりしこと・・、年・月頃思ひわたるさま宣ふに、この宮と知りぬ。いよ〳〵恥かしく、かのうへの思さむことなど思ふに、又猛きことなければ、限りなう泣く。宮もなか〳〵にて、たはやすくあひ見ざらむことなどを思すに、泣き給ふ。

夜はただ明けに明く。御供の人來てこわづくる。右近聞きてま

出で給はむ　匂宮は歸る氣にもなれず。

京には　京では自分が所在不明で騒がれようとも、今日だけは此儘此處に留まらう。

生ける限りの　拾遺戀一「戀ひ死なむ後は何せむ生ける日の爲こそ人は見まくほしけれ」

をのこども　お供の者どもはこの附近に人目に立たないやうにして伺候せよ。

時方　出雲の權守とて源氏の家司。九〇頁。

山寺へ　匂宮は山寺へ忍びの參籠だとふさはしいやうに答へておけ。

いとあさましく　右近は初めて匂宮と知つたのである。不注意から起つた昨晩のわが失態を思ふと氣も狂ひさうなのを。

心もなかりける　今はよろづにかうなつたからにはいくらあわて騒いでも仕方がないばかりか却つて宮に失禮だ。

怪しかりし　二條院で變な破目で見られ時に深く思ひこまれたのも斯様に避け得ぬ宿命であつたので決して人間の犯した過失ではないのだ。

御迎へに　石山詣の爲に母君から御迎へにといふ事でございましたのに。どうなさらうといふお積りでですか。

折こそ　丁度お生憎の折でございます。

物思ひつるに　浮舟を思ひ續けてその爲にぼけてしまつてゐるから、人の誘りも分らない、向ふ見ずの氣持になつてゐる。

思はば、かからむ人の　河内本は「思ひはばからむ人の」と讀むのであらう。

御返りには　迎へが來たらその返事には。

人に知らるまじき　浮舟の爲又私の爲に、誰にも感づかれぬやう工夫せよ。

他事は　今の私には外の事は何いつても駄目だ。

雪なふ人に　歸京を促してゐる大内記に。

斯くなむ　匂宮は今日は歸らぬと仰しやいますが。

あさましう　聞いたこともないやうな餘りな御仕打は、宮がたいふ思召しても、貴方がたお供の人々の御胸の中にあることと思ひます。宮を宇治までお連れ申すといふやうな考へのない事がありますか。

なめげなる　無禮な口をきく山賤などあつたらどうならう。

の方に　ねれり。出で給はむ心地もなく、飽かずあはれなるに、又おは
しまさむことも難ければ、京には求めさわがるとも、今日ばか
りは斯くてあらむ、何事も、生ける限りの爲・こそあれ、只今
出でおはしまさば、誠に死ぬべく　心ない仕業と　おぼさるれば、この右近を召
寄せて、いと心地なしと思はれぬべけれど、今日はえ出づま
じうなむある。をのこどもは、このわたり近からむ所に、よく
隱ろへてさぶらへ。時方は京へ物して、『山寺へ忍びてなむ』と、
つき〴〵しからむさまに、・・・いらへなどせよ」と宣ふに、い
とあさましくあきれて、心もなかりける、夜のあやまちを思ふ
に、心地も惑ひぬべきを、思ひしづめて、今はよろづにおぼほ
れ騷ぐともかひあらじものから、なめげなり、怪しかりし折に、
匂宮が浮舟の事を　いと深うおぼし入れたりしも、からのがれざりける御宿世にこ
そありけれ、人のしたるわざかは、と思ひ慰めて、右近「今日御迎
へにと侍りしを、いかにせさせ給はむとする御ことにか。かう

避けられぬ運命なのですから何とも申しようがございませぬが、それは殿方ありませぬが
のがれ聞えさせ給ふまじかりける御宿世は、いと聞えさせ侍ら
むかたなし。折こそいと　一旦御歸京なさいまして　わりなく侍れ。・今日はいでおはしま
して、御志侍らば、のどかにも」と聞ゆ。　後日又ゆつくりと　およすげてもいふか
なと思して、匂「我は月頃物思ひつるに、ほれ果てにければ、人
のもどかむも・・・知ら・ず、ひたぶるに思ひなりにたり。
すこしも身のことを思はば、かからむ人の斯かるありきは思ひ
立ちなむや。御返り・・・には、今日は物忌などいへかし。人に
知らるまじきことを、たが爲にも思へかし。他事はかひなし」
と宣ひて、この人の、世に知らずあはれに思さるるままには、
よろづの誹りも忘れ給ひぬべし。右近出でて、この音なふ人に、
右近「斯くなむ宣はするを、『なほいとかたはならむ』とを申させ給
へ。あさましう珍らかなる御有様は、さ思召すとも、かかる御
供の人どもの御心にこそあらめ。いかで斯う心をさならはねて
奉り給ひしぞ。なめげなることを聞えさする山賤などもを侍らま

さなむ 斯様々々と宮が仰しやいました。

かうがへ給ふ あなたのお叱りが怖ろしいので、宮の仰せがなくとも逃げて歸ります。

まめやかには 實の所。

身を猶ててに 我身の事は顧みずにお供したのです。

人に知らすまじうは どういふやうにしたら人に知らさないですむだらう。

殿は 薫は子細があつて。句宮を薫といひなすのである。

夜さり忍びて 今夜ひそかに持參するやう京にいひ遣されました。

御達 女房達。

御さきも 先驅もお連れにならず。

心地おそろし さういうて右近は内心ひや〳〵してゐる。

あやにくに 意地わるく薫から使が來たら何といひのがれよう。

石山に今日 實は今日は浮舟を石山に參詣させる爲に母君から迎へが來る事になつて居つたのだ。

さらば今日 薫が御滯在では今日は石山詣は出來さうありませんね。

物忌など 物忌の折には小さい木札に物忌と書いて簾垂などに掛けておくのである。

夢見さわがし 實は昨晩夢見がわるかつたから謹愼しなければならぬと虚構するのであつた。

御手水など 右近は薫の時と同じやうにして御手水などを差上げたのだが。

まかなひめざましう その世話を餘りの事と思つて。浮舟が自仕理由はない。秘密にする爲に給ひめざましうしたのである。器物が揃はぬと解くべきあるひ。

時のまも 片時も見ずに居ては。

焦れ死にする 句宮を見ては。

怪しかりける 不思議な運命を持つた自分だ。

しかば、いかならまし」といふ。内記は、（右近のいふ通り厄介な事だ）げにいと煩はしくもあるかなと思ひ立てり。右近「時方と仰せらるるは誰にか。さなむ」と傳ふ。笑ひて、時方「かうがへ給ふことどもの怖ろしければ、（京へ歸れと仰しやらずとも）さらずとも、逃げてまかでぬべし。まめやかには、（浮舟に對する宮の並々ならぬ愛情を）おろかならぬ御氣色を見奉れば、誰も〳〵身を捨ててなむ。（山莊の宿直人々起きぬるに、）よし〳〵、宿直人も皆起きぬなり」とて、急ぎ出でぬ。右近、人に知らすまじうはいかがはたばかるべきと、（當惑してゐる）わりなう覺ゆ。（宿直の人々）起きぬるに、右近「殿はさるやうありて、いみじう忍びさせ給ふ氣色見奉れば、（昨夜途中で）道にていみじきことのありけるなめり。御ぞどもなど、夜さり忍びてもて參るべくなむ仰せられつる」などいふ。御達、「あな氣味わるくつけや。木幡山はいと怖ろしかんなる山ぞかし。例の御さきも追はせ給はず、（姿をやつして）やつれておはしましけむよ。あないみじや」といへば、右近「あなかま、あなかま。下衆などの塵ばかりも聞きたらむに、いといみじからむ」といひ居たる、心地

おそろし。あやにくに（母君が浮舟を）殿の御使のあらむ時、いかに言はむと、「初瀬の觀音、今日、事なくて暮し給へ」と、大願をぞ立てける。石山に今日（お伴の女房達）この人々も皆精進し、清まはりてあるに、女房「さらば今日はえわたらせ給ふまじきなめりな。いと口惜しきこと」といふ。日高くなれば、格子などあげて、右近ぞ浮舟の近く仕うまつりける。母屋の簾垂は皆おろしわたして、物忌など書かせて附けたり。母君（姓君御自身が來られては事だ）もやみづからおはするとて、夢見さわがしかりつ、といひなすなりけり。（今日乳母の來たらん時いかさまにせんと思ふ）御手水など參りたるさまは、例のやうなれど、まかなひめざましう思されて、（漱を見馴れてゐたのに）そこに洗はせ給はば」（そなたが洗はれたらといはれたので尉の挨拶）と宣ふ。女、（浮舟は）いとさまよう心にくき人（憎氣のいい控へ目がちの人）を見ならひたるに、時のまも見ざらむは死ぬべし、と思しこがるる人を、志深しとは斯（句宮）かるをいふにやあらむ、と思ひ知らるるにも、怪しかりける身

誰も　母君薫中君なども、私と宮との關係が知れたら。

御心を思ひいできこゆれど　後の一なびきたるを」に續く。湖月抄には「きみゆれど」とある。

知らぬを　宮は浮舟の種姓を知らないので。

いみじき　貴女がどんな下賤の身でも。

他事は　身分や種姓以外の事は。

迎への人　母君方から。

しなじなしからぬ　上品ならぬ樣子をして東國詞でしやべりながらやつて來たので。

傍痛がり　賤しい東國武士を恥ぢて薫（實は匂宮）の手前をきまりわるがつたのである。

あなたに隱れよ　薫（實は匂宮）の目に觸れぬやう。

殿なむ　薫が來てゐられる爲に石山詣は出來ませぬと斷つてやつたならば。

京にさばかりの　廣い京でも薫程の身分の方の在不在は、自然彼方此方聞き傳へて母君方にもよく分つてゐるといふ處があるなき」に續く。「おはしおはせず」は「隱れ

かな、誰も、物の聞えあらば、いかに思さむと、まづかのうへの御心を思ひいできこゆれど、知らぬを、「返す〳〵いと心憂し。なほあらむままに宣へ。いみじき下衆といふとも、いよいよなむあはれなるべき」と、わりなう問ひ給へど、その御いらへは絶えてせず。他事は、いとをかしくけ近きさまにいらへ聞えなどして、なびきたるを、いと限りなううたしとのみ見給ふ。日高くなるほどに、迎への人來たり。車二つ、馬なる人々の、例の荒らかなる七八人、をのこども多く、しなじなしからぬけはひ、さへづりつつ入り來たれば、人々傍痛がりつつ、「あなたに隱れよ」と言はせなどす。右近、いかにせむ、殿なむおはしおはせず、京にさばかりの人のおはしおはせず、と思ひて、はするといひたらむに、京にさばかりの人のおはしおはせず、おのづから聞きかよひて、隱れなき事もこそあれ、と思ひて、この人々にも殊にいひあはせず、返りごと書く。「よべより

物の妨げの　魔物の爲に邪魔されたのかと存じます。

わたり給はぬ　浮舟は石山詣にお出かけになりませぬ。

暮れゆくは　日の暮れてゆくのはつらい（歸りが近づくから）事だとそれ計かり氣にやんでゐられる匂宮に引かれて。

見れども　いくら見てゐても浮舟に此處ぞ不足と思はれる缺點もなく。古今戀四「春霞たなびく山の櫻花見れども飽かぬ君にもあるかな」

大殿の君　夕霧の息女六君。

こよなかるべき　話にならない程劣つてゐる筈の浮舟を。この句「まだ知らずをかしと」に續く。

こよなく　匂宮の方が格段でいらつしやつたのだと。

宵夢見さわがしく見えさせ給へれば、今日一日ばかり愼しませ給へとてなむ（御）・物忌にて侍る。返す〳〵口惜しく、物の妨げのやうに見奉り侍る」と書きて、人々に物などくはせてやりつつ。尼君にも、「今日は物忌にて、わたり・給は・・・ぬ」といはせたり。例は暮しがたくのみ霞める山ぎはを眺めわび給ふに、暮れゆくはわびしくのみ思しいらるる人に引か・れ奉りて、いとはかなう暮れぬ。まぎるる事なくのどけき春の日に、見れども見れども、飽かずその事ぞと覺ゆる隈なく、愛敬づきなつかしくをかしげなり。さるはかの對の御方には・劣りたり。大殿の君のさかりに匂ひ給へるあたりにては、こよなかるべき程の人を、たぐひなく思さるる程なれば、まだ知らずをかしとのみ見給ふ。女は又、大將殿を、いと清げに、又斯かる人あらむやと見しかど、こまやかに匂ひ、清らなることは、こよなくおはしけりと見る。硯引きよせて、手習などし給ふ。いとをかしげに書きす

思ひもに移つてしまひさうだ。**心よりほかに**思ひながらも私が逢ひに來られぬ間はこの繪を見てゐなさい。愛情が薫を離れて匂宮

長き世を束はしても、明日の命が皆目分らぬといふ事は矢張悲しい事であつたのだ。**心に身をも**思ふ儘にも出來ずいろ〳〵と貴女に逢ふ工夫をして居る間に、本當に死んでしまひさうな氣がします。「誠に」は歌の「明日知らぬ命」を受ける。**なか〳〵**なまなか尋ねなかつたらよかつた。なまじか逢つた爲に却つて悲みがまさるの意。**心をば**不定なものは命だけだと思ふのでしたら、男心の不定を悲しむ歎きはあるまいに、不定なのは命ばかりではないので。**いかなる人の**誰に捨てられた經驗があつてそんな事をいはれるのですか。**大將の**薫が浮舟を此處に連れてこられた當初の事情を返す〳〵も知りたがつて尋ねられるけれども。行末かけて變らぬ約

さび、繪などを見どころ多くかき給へれば、若き心地には、思ひも移りぬべし。匂「心よりほかにえ見ざらむ程は、これを見給へよ」とて、いとをかしげなる男女、もろともに添ひ臥したるかたをかき給ひて、匂「常に斯くてあらばや」など宣ふも、涙落ちぬ。

匂宮「長き世を頼めても尙悲しきはただ明日知らぬ命なりけり

いとかう思ふこそゆゆしけれ。心に身をも更にえまかせず、よろづにたばからむ程、誠に死ぬべくなむ覺ゆる。つらかりし御有樣を、なか〳〵何に尋ねけむ」など宣ふ。女、濡らし給へる筆を執りて、

浮舟「心をば歎かざらまし命のみさだめなき世と思はましかば

とあるを、變らむをば怨めしう思ふものかと見給ふにも、

いとらうたし。匂「いかなる人の心がはりを見ならひて」など、ほほゑみて、大將のここにわたしそめ給ひけむ程を、返す〳〵

え言はぬいへない事ですものそんなに仰しやつて。

いはせまほしきぞ浮舟の日から聞きたいとは困つたものだ。

京へつかはし時方を京へ遣した事は九八頁にある。**大夫**は五位。**時方の叙爵**の事は九〇頁。**夕霧**も匂宮の出あるきを苦情いはれて。

すべてうちなどに一體この事が主上のお耳に入つても、私自身の不注意といふ事になつて甚だつらい。**東山に**匂宮は東山に僧にあひに行かれたと人前は取繕つておきました。

すずろなるけそうの何でもないお供の自分達をまでも困らせて、嘘までつかせなさる「けそう」は見處、顯證又袈裟の字音であると。**聖の名をさへ**浮舟に聖といふ名をおつけになつたのは大出來です。**いと怪しき御心の**こんなけしからぬたくらみをどうして修行されたのでせう。

ゆかしがり給ひて問ひ給ふを、浮舟は苦しがりて、浮舟「え言は（れ）ぬことを、かう宣ふこそ」と、うちゑ（怨）じたるさまも（いと）・若びたり。宮の心おのづからそれは聞きしきぞわりなきや。

夜さり、京へつかはしつる（今朝京へ遣した時方が夜歸つて來て）大夫參りて。左（右）のおとど（ほい殿）・もむづかり聞えさせ給ひて、『人に知ら（れ）・させ給はぬ御ありきは、いとかるがるしく、なに宮と分らないから、失禮な事も起るめげなる事もあるを、すべてうちなどに聞召さむことも、身（こ）・の爲なむいとからきき』といみじく申させ給ひけり。夕霧がひどく小言を東山に聖御覽じにとなむ人にはうおはするものには・は物し侍りつる」など語りて、時方「女こそ罪深給ひて、空言（そらごと）をさへせさせ給ふよ」といへば、右近「聖の名をさへつけ聞えさせ給ひてければ、いとよし。私の罪もそれにて滅ぼし給ふらむ。誠にいと怪しき御心の（かまへ）・・・、げにいかでなら

かねて斯う　前以ておいでの旨を承つたにしても、それはあまり勿體ない事ですから、何とか工夫しておいでお遂はせ致しませうものを。無考へな御忍びありきです。

參りて　右近が匂宮の御前に罷り出て時方の詞を申上げると。

げにいかならむ　明石中宮や夕霧などの立腹を想像するのである。

かうつつむべき　浮舟故には、憚るべき人目も憚られさうもない。

さるべき程とは　薫と自分とは親しかるべき間柄とはいひながら。薫と匂宮とは叔父甥の間。

斯かる心の隔て　浮舟を横取りした事が薫に知れたら恥かしく。

怨みられ給はむ　浮舟が薫から怨まれることまでも心配する。

袖のなかにぞ　古今雜下「飽かざりし袖のなかにや入りにけむわが魂のなき心地する」

は せ給ひけむ。かねて斯うおはしますべしと承らましにも、いと忝ければ、たばかり聞えさせてましものを。あぶなき御ありきにこそは」とあつかひ聞ゆ。參りてさなむとまねび聞ゆれば、げにいかならむと思しやるに、匂所せき身こそわびしけれ。地位が如何すべき。かうつつむべき人目も憚りあふまじくなむ。大將もいかに思はむとすらむ。さるべき程とはいひながら、怪しきまで昔よりも、斯かる心の隔ての知られたらむ時、恥かしう、又いかにぞや世のたとひにいふ事もあれば、待ちどほなるわが怠りをも知らず、怨みられ給はむをさへなむ思ふ。夢にも人に知られ給ふまじきさまにて、ここならぬ所にゐて離れ奉らむ」とぞ宣ふ。今日さへ斯くてこもりゐ給ふべきならねば、出で給ひなむとするにも、袖のなかにぞとどめ給へらむかし。明け果てぬさきにと、人々しはぶきおどろかし聞ゆ。妻戸にも

ろともにゐておはして、え出でやり給はず。

世に知らず　別れの悲しさのみか先に立つ涙も歸りの道を眞暗にして、どう往つていいやら分らず、世に類もない程私はまごついてゐる。

涙をも　この賤しい私の狹い袖では涙さへ包みきれず、溢れ出るのを止めかねてゐるのですもの、どうしてあなたをおとめ申す餘裕がありませう。

おのがきぬ〳〵も　後朝といふ語を衣々即ち二人銘々の衣の意にはたらかしたもの。古今戀三「しのめのほがら〳〵と明けゆけばおのがきぬ〳〵なるぞ悲しき」

いとたはぶれにくし　戯談ぢやない。

五位二人　時方と大内記。

昔もこの道に　中君に通つた當時の事。

あやしかりける　宇治と自分との間には不思議な因緣があつたのだと宮は思召す。

心やすき方に　氣樂なわが居間で寢られたのだが。

ろともにゐておはして、え出でやり給はず。

世に知らず惑ふべきかな先に立つ涙も道をかきくらしつつ

女も、限りなくあはれと思ひけり。

涙をも程なき袖にせきかねていかに別れをとどむべき身ぞ

風のおとともいと荒ましう霜深き曉に、おのがきぬ〳〵も冷かになりたる心地して、御馬に乘り給ふほど、引きかへすやうにあだ急がしに急がしいづれば、我にもあらで出で給ひぬ。この五位二人なむ御馬の口にはさぶらひける。さかしき山越え果てて

ぞおの〳〵馬には乘る。汀の氷を踏み鳴らす馬の足音さへ、心細く物悲し。昔もこの道にのみこそは斯かる山踏はし給ひしかば、あやしかりける里の契りかな、と思ふ。

二條の院におはしまし つきて、女君のいと心憂かりし御物隱しもつらければ、心やすき方に大殿籠りぬるに、ねられ給はず、

いとよく似たる　中君と浮舟とは異母姉妹故。
女君も　中君をも御帳の中に。

まろは　私がいくら貴女を愛して居つても、私が死んだら直に貴女は薫の方へ心變りなさるだらう。人の一念といふものは必ずとほるものですから。

かう聞きにくき　そんな人聞のわるいお詞がもし薫の耳に入りましたら、私がどういふやうに作つてお話したことやらと薫も疑はれるだらうが、それは心外です。
心憂き身には　つらい我身にとつては、何でもない冗談でも大變苦しみます。
誠につらしと　私が本氣で貴女をつらく思ふ事でもあつたら貴女は何と思ひますか。

いと淋しきに、物思ひまされば、心弱く對にわたり給ひぬ。何も心もなく、いと清げにておはす。珍らしくをかしと見給ひし人よりも、又これはなほありがたきさまはし給へりかし、と見給ふものから、いとよく似たるを思ひ出で給ふも胸ふたがれば、いたく物おぼしたるさまにて、御帳に入りて大殿籠る。女君も心地こそいとあしけれ。いかならむとするにかと心細くなむある。まろは、いみじくあはれと見おい奉るとも、御有樣はいとなふなれば」と宣ふ。けしからぬ事をも、まめやかにさへ宣ふかな、と思ひて、中君からう聞きにくき事の漏り聞えたらば、いかやうに聞えなしたるにかと、人も思ひ寄り給はむこそあさましけれ。心憂き身には、すずろなる事もいと苦しく」とて、そむき給へり。宮もまめだちも給ひて、誠につらしと思ひ聞ゆる事もあらむは、いかが思さるべき。まろは御ためにはおろかなる人かは。人も、『ありがたし』など咎むるまでこそあれ。人には

ありがたし　あんなに妻を大事にする人は滅多にない、などと私を非難する程なのです。
それもさるべきに　それも尤もだと當然のやうにも考へられるが。
隔て給ふ　私に隱しだてをなさる御心の深いのが甚だ面白くない。浮舟の事をいふ。
宿世の　こんなに隱されてゐても、因緣が淺からねばこそ浮舟に逢ふ事が出來たのだ。
まめやかなるを　匂宮の眞顏なのを見て、迷惑な、薫との事につひてどんな事を聞きこまれたのだらう。
物はかなき　正式の儀式もなしに私と結婚されたので、萬事につけて自分をうすつぺらな女と考へてゐられるのだらう。中君が簡單に薫に許すものと宮が推量なさるだらうの意。
すずろなる人を　緣もゆかりもない薫を賴つて、その好意を受け入れ始めたりなどしたそれだけの失錯故に宮から輕く見られるのだ。
ことざまに思はせて　實は浮舟の事を話しながら全く別な事のやうな風に怨まれるので。
ただ　「思ずに」を修飾する。薫の事をむきになつて仰しやるのだと一途に思ひこんでゐられるので。
ありやなしや　實否をたしかめぬ間は宮に顏を合せるのも恥かしい。

薫に比べて私をひどく見くびつてゐられるやうだ　人には　こよなう思ひおとし給ふべかめり。それもさるべきにこそはと　ことわらるるを、隔て給ふ御心の深きなむいと心憂き」と宣ふにも、宿世のおろかならで、尋ね寄りたるぞかしと思しいづるに、涙ぐまれぬ。まめやかなるを、いとほしういかやうなる事を聞き給へるならむと驚かるるに、いらへ聞え給はむこともなし。物はかなきさまにて見そめ給ひしに、何事をもかろらかに推し量り給ふにこそはあらめ、すずろなる人をしるべにて、その心寄せを思ひ知り始めなどしたるあやまちばかりに、匂宮に安つぼく見られてゐる身にこそ、と思しつづくるも、よろづ悲しくて、いとどらうたげなる御けはひなり。かの人見つけたりとは、暫し知らせ奉らじと思せば、ことざまに思はせて怨み給ふを、ただこの大將の御事をまめ〳〵しく宣ふと思すに、人や空言をたしかなるやうに聞えたらむ、など思す。ありやなしやを聞かぬまは、見え

あなたに　句宮がわが居間に歸られた。

さわがれ　主上や中宮に。

右大將まゐりなやましげに　薫が句宮方へ。あなたが御病氣と承りましたので中宮も大層心配していらつしやいます。どんな御病氣ですか。

見るからに　句宮は薫を見るなり、脛に傷持つ身の一層胸騒ぎがするので。

聖だつと　薫がいかに清僧顔するとはいへ、あんな可憐な女を捨ておいて、暢氣な顏して居るよ。間待ちわびさせて長い。

こよなかりける　とんだ山伏心だ。「聖だつ」を嘲つた挿入句である。「山伏」といつたのは山里の宇治での出來事であるからである。

さしもあらぬ　何でもない折にも薫が實直顏したり自家廣告したりなさるのをいまいましがらしてゐられたのだもの、こんな秘密を見あらはしたからには、どんなに仰しやらうとなさるだらう。

奉らむも恥かし。（宮中から明石中宮のうちより大宮の御文あるに、宮は驚き給ひて、また心持がさらつとしない樣子でほ心解けぬ御氣色にて、あなたにわたり給ひぬ。使「昨日お見えにならないのでつかなさを、（主上が氣しよくわるく惱ましくおぼされたなる。よろしくば參內しなさい）參り給へ。その後久しうもなりにけるを」などやうに聞え給へれば、さわがれ奉らむも苦しけれど、誠に御心地もたがひたるやうにて、その日見舞には參り給はず。上達部などあまた參り給へど、御簾のうちにて暮し給ふ。

夕つかた右大將まゐり給へり。薫「なやましげにおはしますと侍りつれば、宮にもいと覺束なく思召してなむ。いかやうなる御なやみにか」と聞え給ふ。見るからに心さわぎのいとどまされば、言ずくなにて、聖だつといひながら、こよなかりける山伏心かな、さばかりあはれなる人をさておきて、心のどかに、月日を待ちわびさすらむよ、と思ふ。例は、さしもあらぬ、事のついでにだに、

ふびんなる　それはいけませんですね。大した事はないながらも長引くのは大變わるい事です。

御かぜ　お風邪を十分に御養生なさい。

恥かしげなる　薫といふ人は深みのある人だ、浮舟は自分のやうながさ〳〵者を薫と比べて何と思つた事だらう。

さま〴〵　中君を見れば浮舟をおもひ、薫を見れば浮舟をおもひ、それ〴〵の機緣に應じて浮舟の事がおもはれる。

かしこには　浮舟の方では石山詣も中止になつて大層淋しい。

御文には　句宮からのお手紙には

それだに　手紙でもまだ安心が出來ず、時方とお呼びになつた五位の家來で、事情も知らないのを使として宇治に遣された。

右近が古く　私の昔馴染の男で先達薫のお供をして私を此處で見つけたのが、又撚りを戻して親切に使をよこすのです。

我はまめ人ともてなし名のり給ふをねたがり給ひて（句宮が）、よろづに宣ひやぶるを、（薫が浮舟を隱しておいた事）斯かること見あらはいたるを（し）、いかに宣はまし。さすがに日かず經るは、いとあしきわざに侍る（り）。御かぜよくつさられどさやうのたはぶれごともかけ給はず、いと苦しげに見えくろはせ給へ」（句宮は）など、まめやかに聞えおきて出で（薫は諦められた）給ひぬ。恥かしげなる人なりかし、わが有樣をいかに思ひくらべけむ、など、さま〴〵なる事につけつつも、ただこの人を（浮舟を）時のま忘れず思し出づ。

かしこには石山もとまりて、いとつれ〴〵なり。御文には、いといみじき事を書き集め給ひてつかはす。それだに心やすからず、時方と召しし大夫の從者（ずさ）の、（物の）心も知らぬしてなむやりける。「右近（右近詞）が古く知れりける人の、（この）殿の御供にて尋ねいで、ねんごろがる」と友だち（右近の）にはいひ聞かせ

かう思し　句宮は斯様にいらいらした氣持でゐられるけれども。

かうのみ　こんなに浮舟の事ばかりを思ひつめて居つては、とても長生きは出來ないと思ふ。**すこしのどかに**　大方公事もすんで隙になつた頃。

ここには　「歩み入り給ふ云々」に續く。**忍びたれど**　薫は微行ではあるが句宮程には無闇に地味にはなさらず。

いかで見え奉らむ　とても合せる顏がないと。

あなかちなりし　熱情的の句宮の御有樣がまざ〳〵目に見えてくる矢先へ又も薫に逢ふのかと考へるとなさけなくなる。**我は年頃見る**　私は年來の愛人をも皆捨てて貴女にのりかへてしまひさうな氣がする。

いづくにも　どこでもかしこでも。**又いかに聞きて**　又今晩薫が來られた事を句宮が聞いて何と思ひ召すか事だらう。

久しかりつる程の　久しい無沙汰のお詫などを申されるにも。**おりたたねど**　戀し悲しといふのにかゝりきつてはゐないが。

いとあはれと　浮舟が深く動かされてしまひさうな魅力を持つてゐられる人柄である。**艶なる方は**　優艶といふ點は勿論のこと、浮舟が末長く賴るに足りさうな性格などは、すぐれてゐられる。**思はずなる**　とんでもない不料簡。卽ち句宮との事。**あやしう**　「あはれと思ふも」を修飾する。不思議にも盲目的な戀に身も世もないといつた句宮に心引かれるのも、それは實にけしからぬ輕々しい事だ。

忘れ給ひなむ　薫に捨てられた時の心細さは、骨身にしみ通りさうなので、その事を浮舟が煩悶してゐる樣子を見て。**月頃にこよなう**　この數月來に浮舟は非常に世情が分つて來て大人になつたものだ、退屈な毎日を送つて居つては、物思ひの限りをし盡す事だらう。**造らする所**　浮舟を引取る爲に建築中の京の家。

たり。よろづ右近ぞ空言（そ）・しならひける。

月もたちぬ（正月も過ぎた）。かう思しいらるれど、おはします（宇治に）事はいと・・（どうにもならぬ）わりなし。かうのみ物を思はば、更にえながらふまじき身なめり、と心細さを添へて歎き給ふ（句宮は死ぬのではないかといふ）。大將殿（薫）すこしのど・かになりぬる頃、例の忍びておはしたり（宇治に）。寺に佛などをかみ給ふ（先づ浮舟に逢はうともなさらない落着いた態度を寫したものみづきやう）。御誦經せさせ給ふ僧に、物賜ひなどして、夕つ方、ここには（浮舟方には）、忍びたれど、これはわりなくもやつし給はず、ゑぼ・し（う）直衣の姿、いとあらまほしく清げにて、歩み入り給ふより、恥かしげ（氣のひけるほど）に用意殊なり。女（浮舟は）、いかで見え奉らむとすらむと、空さへ恥かしく怖ろしき（そらはづかしくもあり怖ろしくもあるにつけ）に、無理やりな懸度（薫に）見え奉らむを思ひやるなむ、いみじう心憂き。（包）我は年頃見る人をも、皆思ひかはりぬべき心地なむする」と宣ひ・し（はせ）を、げにそののち御心地苦しとて、いづくにもいづくにも、例の御有樣ならで、御修法など騷ぐなるを聞くに、又いかに、聞きて思さむと思ふ（浮舟が）も、いとなまめかしきさまして、久しかりつる程の怠りなど宣ふも、言多からず、「戀し悲し」とおりたたねど、常にあひ見ぬ戀の苦しさを、見苦しからぬ程にうち宣へる、いみじく、いふにはまさりて、いとあはれと人の思ひぬべきさまをしめ給へる人がらなり。（薫の）艶なる方はさるものにて、行末ながく人の賴みぬべき心ばへなど、なる方はさるものにて、句宮よりもこよなくまさり給へり。思はずなるさまの心ばへなど、（薫に）漏り聞かせたらむ時・・、なのめならずいみじく（大變な事だらう）こそあべけれ、あやしう、うつし心もなうおぼしいらるる人をあはれと思ふも、それはいとあるまじくかろき事ぞかし、この人に憂しと思はれて、忘れ給ひなむ心細さは、いと深うしみぬ（に）べ・けれ（薫にいやな奴だと思はれて）ば、思ひみだれたる氣色を、月頃にこよなう物の心知り、ねびまさりにけり、つれ〳〵なるすみかの程に、思ひ殘すことはあらじかし、と見給ふも心苦しければ、常よりも心とどめて語らひ給ふ。（浮舟と）造ら

する所、日に〳〵相當見られるやうに作成されてゐる　やう〳〵よろしうしなしてけり。一日なむ見しかば、

け近き　親しみやすい川のほとりで花も眺められます。

宇治

ここよりはけ近き水に、花も見給ひつべし。薫の本邸　三條の宮も近き程なり。

おぼつかなき　無沙汰をする事も自然あるまいから。

勤部のわからぬやうな隔たり

明暮おぼつかなき隔てもおのづからあるまじきを、この

さりぬべくば　都合がついたら移轉させよう。

浮舟を

春の程に、さりぬべくばわたしてむ」と思ひて宣ふも、かの人

のどかなる　閑靜な隱家を用意してある。

匂宮

の、「のどかなるべき所、思ひまうけたり」と昨日も宣へりしを、

薫にかうした準備のある事も知らせに宮もあんなに考へてゐられるよと心を引かれながらも

斯かることも知らで、さ思すらむよと、あはれながらも、匂宮の方　そな

思ふからに　我と我心を叱つて見るはたから、先頃の句宮のお妻が目先にちらつくので。

たに靡くべきにはあらずかし、と思ふからに、ありし御・・（あり）・さ

うたて心憂の　愛相のつきたいやな身だ。

まの、面影におぼゆれば、我ながらもうたて心憂の身やと、思

御心ばへの　今迄貰女はこんな氣質ではなく大やうであつたからこそ私も氣樂で嬉しかつたのです。

ひつづけて泣きぬ。薫「御心ばへの斯からでおいらかなりしこそ、

誰か私をあしざまに告口した事でもありますか

のどかに嬉しかりしか。人のいかに聞え知らせたる事かある。

すこしも　一寸でも私がおろそかに思ふやうなら、かうまで苦心して通つて來られる輕い身分でも又道の遠さでもないのだのに。

すこしもおろかならむ志にては、からまで參りくべき身の程道

薫にかうした準備のある事も知らせに宮もあんなに考へてゐられるよと心を引かれながらも

斯かることも知らで、さ思すらむよと、あはれながらも、匂宮の方　そな

今より添ひたる　薫の上に又匂宮といふ人が出來て。

かたみにし　それ〴〵別々の物思ひをしてゐる。

の有樣にも・（なむ）・あらぬを」など、朔日ごろの夕月夜に、すこし端

近く臥して眺めいだし給へり。薫　男は、大君在世當時の感情　過ぎにし方のあはれをも

思し出で、浮舟　女は、今より添ひたる身の憂さを歎き加へて、かた

鵲鷺の事。かささぎの音から鷺の意に用ひたのである。

そのかみの事の　大君在世當時の事が只今のやうに思はれて。

いと斯からぬ　浮舟（大君に似たる）のやうでない人と對坐してゐても、二人の間には新らしい愛情が多分に出てきさうな場面である。

都馴れゆく　都の手振りになじんでゆく妻の心を引くにつけても。

宇治橋の　貴女との緣は永久に盡きる筈はないのだから、あぶながつてくよ〳〵なさるな。

今見給ひてむ　私の本心は直に分りませう。

絶間のみ　杜絶えがちで今でも不安なのですもの、それでも猶盡きぬ緣と信賴せよと仰しやるのですか。當時宇治橋は朽ちてゐるて、板がところ〴〵拔けてゐたものらしい。

見捨てがたく　浮舟を見捨てて歸りがたく。

みに物思はし。山の方は霞み隔てて、寒き洲崎に立てる鵲の姿も、所がらはいとをかしう見ゆるに、宇治橋のはる〴〵と見わたさるるに、柴積み舟の・所々に行きちがひたるなど、ほかにては・目馴れぬ事どものみ取集めたる所なれば、薫が　見給ふ度ごとに、なほそのかみの事の只今の心地して、いと斯からぬ人を見かはしたらむ・（に）・だに、珍らしき、中のあはれ多く・（かり）・添ひ・（な）・ぬべき程なり。まいて戀しき人によそへられたるもことよなからず、浮舟は大君によく似てゐると思ふと一通りならぬものがある　次第に世間が分りやう〳〵物の心知り、都馴れゆく有樣のをかしきも、こよなく・（う）・見まさりしたる心地し給ふに、薫の感じ　女は、浮舟　かき集めたる心のうちに催さるる涙、ともすれば出で立つを、匂宮の事で　慰めかね給ひつつ、薫は

宇治橋の長き契りは朽ちせじをあやぶむ方に心騷ぐな　踏むをひがかす

以前よりも

今見給ひてむ」と宣ふ。

さき〳〵よりもいと見捨てがたく、誓しも立ちとまらまほしく　浮舟方に

人の物いひ　拾遺雑秋「こゝにしも何句ふらむ女郎花人の物いひさがにくき世に」**心安きさまにて**　京に引取った上で氣樂にあはう。

梅が枝　催馬樂、呂、梅枝「梅が枝に來居る鶯や、春かけて、はれ、春かけて鳴けども未だやはれ、雪は降りつつ、あはれ、そこよし、雪は降りつつ」

御宿直所　禁中にての御居室。

闇はあやなし　古今春下「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隱るる」闇の中でも香は隱れないといつたかたちでも。薫は名にも呼ばれてゐる程の高い人であつた。**衣片敷き**　浮舟が私を待つて居むる事だらうの意。古今「さむしろに衣片敷き今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」

思さるれど、人の口がうるさいので人の物いひの安からぬに、今更長居するでもあるまいにてこそ、心安きさまにてなり、など思しなして、曉に歸り給ひぬ。以下浮舟の事を薫の心に思ふのでいとようも大人びたりつるかなと、心苦しくおぼし出づること、從前にありしにまさりけり。

二月の十日の程に、時節相應の音樂などに參りあひ給へり。折にあひたる、物の調べどもに、宮の御聲はいとめでたくて、「梅が枝」など謠ひ給ふ。何事も人よりはこよなうまさり給へる御さまにて、匂宮のすずろなる事思しいらるるのみなむ罪深かりける。雪俄かに降り亂れ、風など烈しければ、御管絃の遊び疾くやみぬ。この宮も薫も大將もりしてなどして、うち休み給へり。大將、人に物宣はむとて、すこし端近く出で給へるに、雪のやう〳〵積り、星の光におぼおぼしきを、闇はあやなしと覺ゆる匂ひ有樣にて、衣片敷き今宵もや」ととうちずじ給へるも、はかなき事を口ずさびに宜へるも、不思議に魅力ある風情のある人柄である氣色添へる人ざまにて、いと物深げなり。意味ありげである

事しもこそ　諺ふべき歌もあらうに、あれでは浮舟を深く思つて居るのだらう。**おろかには**　薫が浮舟をおろそかには思はぬのだらう。**片敷く袖を**　浮舟が待つて居つうとは私のみの推量だと思つて居つたのに、薫も同樣にしとはさうだつたかなあ。それにしてもつらいなあ。これ程愛してくれる最初からの愛人をさし、おいて、私の方を餘計に思つてくれる筈はない。

詩奉り　昨夜作つた詩を御覽に入れようと主上の御前に罷り出た匂宮の御容姿は。

今二つ三つ　實は薫は匂宮に一年の弟。

本御門の御婿にて　手本。**公々しき方詩講じ**　薫は主上の御婿として不足はない。政事上の實務。詩の披講がすんで。**いかなる心地にて**　どんな心の餘裕があつて詩などが作れるのだらうと、心も空で浮舟の事ばかり思ひつめてぼけたやうになつて居られた。

も、怪しくあはれなり、と・匂宮は寢たるやうにて御心さわぐ。おろかに事しもこそあれ、と・匂宮は思はぬなめりかし、片敷く袖を我のみ思ひやる心地しつるを、同じ心なるもあはれなり、わびしくもあるかな、かばかりなる本つ人をおきて、わが方にまさる思ひはいかでか附くべきぞ、とねたう思さる。

翌朝つとめて、雪のいと高う積りたるに、詩奉り給はむとて、お前に參り給へる御かたち、此頃いみじく盛りに清げなり。かの君薫も同年輩でも同じ程にて、今二つ三つまさるけぢめにや、すこし年は年だけの事があるねびまされる氣色用意などぞ、殊更に・も作りたらむやうに、あてなる男の本にしつべく物し給ふ。「御門の御婿にて飽かぬことなし」とぞ世の人もことわりける。ざえなども、公々しき方も、おくれずぞおはすべき。詩講じ果てて皆人まかで給ふ。宮の御ふみを、すぐれたりとずじののしれど、何とも聞き入れ給はず、い

かなる心地にて斯かる事をもしいづらむと、空にのみ思ほしほれたり。

かの人の　匂宮は薫の様子を見て一層警戒の念が強くなつたので餘りにも無理な工面をして。

友待つばかり　跡から降り續いて來る雪を待つ程に僅に。（花）其の雪を待伴と詩にも作れり。（湖月抄）或は引歌があるのかも知れない。

常よりも　雪が深い爲にいつもよりも人通りのない難儀な細道を。

煩はしき　何か事件でも起きたら大變だと思ふ。

いづ方も　本官も兼官も共に重職ではありながら、打つてつけの供人然と指貫を引上げたりしてゐる姿も滑稽であつた。

おはせむと　匂宮御來訪の由を傳へ沙汰はあつたものの。

消息したり　匂宮御入來の由を通じた。

君も　右近は勿論。

かつは　御親切は感謝しながらも。

つつましさも　あたりへの氣兼ねも忘れて歎待する氣にもなりさうだ。

同じやうに　自分同樣浮舟がかはいがつてゐられる女房で氣立もあぶなげのないのを味方につけて。

同じ心に　私と一緒になつて人前を取繕つて下さい。

もて煩ひぬ　人前を取繕ふ上に邪魔になりさうであるが、薫の樣子に似せてごまかした。

なか〳〵なる　却つて來ぬがましな位なので。

ここの人目も　山莊内に居る人々の手前も憚られるので。

先立てて　前以て準備の爲に遣しておいた所の時方が。

こはいかに　これは一體どうなさるのかと浮舟は勿論右近も氣が氣でないので。浮舟をつれ出さうとした事に對しての驚き。

あやし童べ　河内本が穩かである。

いかでか　「いかでか參らむ」などの意。

ここの後見に　山莊の留守居に居殘つて。

(う)あぶなからぬを　侍從の事

語らひて、右近「いみじく(う)わりなき事。　困つた事です

同じ心に

もて隱し給へ」といひて、香氣は滿れると引立つものである

濡れ給へる御ぞの香の、部屋一ぱいに

(こ)京へ・立ちかへり給はむも、なか〳〵なるべければ、ここの人目も

いとつつましさに、時方に工面させてたばからせ給ひて、河向ひの

人の家に、浮舟をつれてゆかうとおぼせむと構へたりければ、先立てて遣したりける、夜更くる程に匂宮方へ參れり。時方「いとよく用意してさぶらふ」と申さす。　こはいかにし給ふことにかと、右近もいと心あわただしければ、寢おびれて起きたる心地もわななかれて、あやし・・童べの雪遊びしたるけはひのやうにぞ、ふるひあがり・・ける。

「いかでか」などもいふあへさせ給はず、浮舟をかき抱きて出で給ひぬ。右近はここの後見にとどまりて、侍從をぞ奉る。御供に　いとはかなげなるものと明暮見いだす小さき舟に乘り給ひて、匂宮が　掉さし

ふ程、（浮舟の心に）遙ならむ岸にしも漕ぎ離れたらむやうに心細く覺えて、つとつきて抱かれたるも、いとらうたしと（匂宮は）思す。有明の月すみのぼりて、水のおもても曇りなきに、（船人）「これなむ橋の小嶋」と申して、御船暫しさし（島に）とどめたるを見給へば、大きやかなる岩のさまして、ざれたる（その島は）常磐木の蔭しげれり。（匂宮）「かれ（あの橋を）見給へ。いと（小さ）年經ともかはらじをこの浮舟ぞゆくへ知られぬ

つとつきて　匂宮にぴったり寄り添うて。

橋の小嶋　宇治から一町程川下にあつた島であるといふ。平等院の艮橋の小嶋が崎と平家物語にはある。

ざれたる　洒落れた恰好をした橋の木が繁つてゐる。

年經とも　千年の緑を持つ橋の小嶋が崎で契るのだから二人の仲は永久に變るものではない。

珍らしからむ　見馴れた所ながら。

橋の小嶋は　貴方のお心は變りますまいが、どちらに身を寄せてよいか分らぬ浮舟のやうな自分は身の行末が分りませぬ。

折から人のさまに　澄みわたつた有明の月、それに照らされた浮舟の美しい姿を見ては。

助けられつつ　匂宮自身も人から介錯されつつ。

時方が　その用意の家といふのは。

荒々しきに　未完成故。

（浮舟）女も、珍らしからむ道のやうに覺えて、

（浮舟）橋の小嶋は色もかはらじをこの浮舟ぞゆくへ知られぬ

折から人のさまに、をかしくのみ何事も思しなす。（匂宮の心に）かの岸にさしつきてをり給ふに、（浮舟を）人に抱かせ給はむはいと心苦しければ、（用意の家に）入り給ふを、（家主などの心に）いと見苦しく、何人をかと見奉る。時方が叔父の因幡守なるが領ずる庄に、はかなう造りたる家なりけり。まだいと荒々しきに、網代屏風など、御覽じも知らぬしつらひにて、風も殊にさはらず、垣のもとに雪むら消えつつ、今もかき曇りつつ降る。日さしいでて、軒の垂氷の光りあひたるに、人の御かたちもまさる心地す。宮も、所せき道の程に、がるらかなるべき程の御姿つき、いとをかしげなり。引きつくろふ事もなく打解けたるさまを、いと恥かしくぞどもなり。女も、ぬぎすべさせ給ひてしかば、ほそやかなるるよと思へど、まぎれむ方もなし。なつかしき程なる白き限りを五つばかり、袖口裾の程までなまめかしく、いろ〳〵にあまたかさねたらむよりも、かくまで打解けたる姿などは見ならひ給はぬを、斯かるさへぞなほ珍らかにをかしう思されける。侍從も、いとめやすき若人なりけり。これさへ斯かる事を殘りなう見るよ、と女君も、「これは又誰ぞ。わが名漏らすなよ」と

（匂宮の）御覽じも知らぬしつらひにて　匂宮の心に對岸に佛敎の彼岸をひ

（浮舟）女も　浮舟は恥

（匂宮が）抱き給ひて　匂宮

（浮舟）女も　浮舟のさま

（浮舟）女も　浮舟の

（匂宮）人に　匂宮

（匂宮）いと見苦しく　匂宮

（浮舟）女も　浮舟

（匂宮）いと見奉る　匂宮

（浮舟）女も　浮舟

（匂宮）いと恥かしう思されける　匂宮

（浮舟）女も　浮舟

（匂宮）「これは　匂宮

殊にさはらず　隙間だらけ故、風も十分には防がれず。

垂氷　今いふつらゝ。

宮も所せき　匂宮も人に見られてならぬ窮屈な道中故、微行に必要な程度の略服である。

引きつくろふ　浮舟は身づくろひもせず投げやりにしてあるわが姿を恥かしく感じ。

まぎれむ　狹い家故隱れる所もない。

なつかしき程なる　着馴れて糊氣の稍落ちた白い御衣だけを五枚程、袖口や裾のかさなりまでいろつぼく。

常に見給ふ　匂宮が始終見馴れてゐられる中君でも。

斯かるさへぞ　氣に入つた女の事とて斯かる打解け姿までが。

これさへ　右近ばかりか侍從までが匂宮との關係をすつかり知る事よと。

これは　そこにゐるのは又誰だ。

わが名　古今墨滅「犬上のとこの山なるいさや川いさと答へよわが名洩らすな」

ここの　この家の留守居番の男が時方を主人と思つて尊敬してゐるので、時方は句宮たちのおいでになる部屋の遣戸を隔てゝ得々として居つた。

聲引きしじめ　聲を落して恐縮しつつ。宿守が時方を尊敬するさま。

をかしと　句宮のゐられるのを知らずに自分の如きを尊敬してゐるから、をかしくて返事も出來ない。

いと怖ろしく　嚴重に謹愼せねばと怖ろしい結果になると陰陽師が占つた物忌故に。

斯くて見えけむ　今と同じ様に打解けて逢つただらう。

語り給ふ　薫と浮舟との間をさく爲に。

かの耳とどめ　詩會の夜の薫の口ずさみ。一一六頁一三行。

憎きや　宮の卑劣な態度を憎からず評した詞。

いみじくかしづかる　時方をひやかしての詞。えらく大事にされるお客樣よ、そんなことしてゐるとつけられるなよ。

大夫　時方は五位故いふ。

見やり給ふ　句宮が。これを浮舟がと見る説もあるが、敬語が用ひてあるから、これを浮舟の動作と見ることは出來ない。

口がため給ふを、いとめでたしと思ひ聞えたり。ここの宿守にて住みけるもの、時方を主と思ひてかしづきありけば、このおはします遣戸を隔てて、所得がほに居たり。聲引きしじめ、かしこまりて物語しけるを、いらへもえせず、をかしと思ひけり。時方いと怖ろしくうらなひたる物忌により、京のうちをさへ去りて愼むなり。ほかの人寄すな」といひたり。人目も絕えて心やすく語らひ暮し給ふ。かの人の物し給へりけむに、斯くて見えけむかし、と思しやりて、いみじく怨み給ふ。二の宮をいとやんごとなくて持ち奉り給へる有樣なども語り給ふ。かの耳とどめ給ひし一言は、宜ひいでぬぞ憎きや。時方、御手水御菓子など、取次ぎてまゐるを御覽じて、いみじくかしづかるめる客人のぬし、きてな見えそや」と誡め給ふ。侍從、色めかしき、若人の心地に、いとをかしと思ひて、この大夫とぞ物語して暮しける。雪の降り積れるに、わが住む方を見やり給へば、霞の絕え〴〵に、梢ばかり見ゆ。山は鏡を懸けたるやうに、きら〳〵と夕日に輝きたるに、よべ分けこし道のわりなさなど、あはれ多う添へて語り給ふ。

「峯の雪みぎはの氷踏分けて君にぞまどふ道はまどはず」など、あやしき硯召出でて手習し給ふ。

木幡の里に馬はあれど」

降り亂れ汀に凍る雪よりも中空にてぞわれは消ぬべき

この「中空」を咎め給ふ。げに憎くも書きてけるかなと、恥かしくて引きやりつ。さらでだに見るかひある御・・さまを、いよ〳〵あはれにいみじと人の心にしめられむと、盡し給ふ言の葉氣色、いはむ方なし。

御物忌二日とたばかり給へれば、心のどかなるままに、かたみにあはれとのみ深くおぼしまさる。右近は、よろづに例のいひまぎらはして、御ぞなど奉りたり。今日は亂れたる髮すこしけづらせて、濃き衣に紅梅の織物など、あはひをかしく著かへて

道　京と宇治との間の道。

あはれ多う　同情を引くやうに劇増して。

峯の雪　峯の雪や汀の氷を踏分けて一方ならぬ難儀はしつつも道にはまごつきませんが貴女には盲目になつて居ります。

木幡の里に　拾遺雜戀「山科の木幡の里に馬はあれどかちよりぞくる君を思へば」

降り亂れ　降り亂れ汀に凍る雪よりもはかなく、地上にも屆かないうちに中空で私は消えてしまふ事でせう。

この中空を　「中空にてぞ」の詞を句宮が氣にかけられた。句宮と薫との中間に挾まつて迷つてゐるやうに聞えるので、それが句宮には不滿であつたのである。

御物忌二日と　句宮は物忌の爲宇治滯在は二日間と京の方を取締つてあるので。

いひまぎらはし　他の女房達の手前うまい具合に取繕つて。

あはひ　かさねの色の取合せも面白く。

褶　上衣で主人などに侍する時著る。

あざやぎたれば　あざやかな衣裳に著かへたので。

姫宮に　女一宮に浮舟を侍女としてあげたならば大事に寵愛なさる事だらう。

かばかりの　浮舟程の容してゐるのはあるまい。

その程　私が盗み出す迄の間に薫に逢つたら容赦せぬ。

いとわりなき　それは本當に迷惑な事だと浮舟は思つて、返事も出來なかつた。

目の前にだに　今の一時だけすら薫を自分に思ひかへる心はないのだらうと悲しく思召す。

恨みても泣きても　古今戀五「恨みても泣きてもいはむ方ぞなき鏡に見ゆる影ならずして」

これより別れて　家の内にも入らず妻戸の所からすぐに歸京なさるにつけても。

かやうのかへさは　かうした忍びありきから歸られた折には、まだ中君のゐる二條院に休息してゐられて參内はなさらぬ。

御文　匂宮から浮舟への。

かのさかしき乳母　二條院で匂宮が浮舟に迫つた時遣つた乳母の事。東屋四三頁

出でたりける　暇を頂いてむすめの方へ行つて居たその乳母が。

かくあやしき　こんなみすぼらしい住居ではあるが、薫が世話して下さるのを將來の樂しみに思ひそれを期待して母君も心を慰めて居つたところへ。

やう〳〵人求め　母君が次々と女房を探し求め小綺麗な童女などを迎へて浮舟方へ送つてこられた。

それこそは　薫に引取られるのが本當だと最初から待ち續けてゐたのだ。

いとうたてある　自分ながらいやらしくなる程である。

居給へり。侍從も、あやしき褶著たりしを、あざやぎたれば、その裳を取り給ひて（褶の事）君に著せ給ひて、御手水まゐらせ給ふ。（浮舟に使はせ）姫宮が匂宮の心にこれを奉りたらば、いみじきものにし給ひてむかし、いと（女一宮の侍女の中にはやんごとなききはの人多かれど）や、と見給ふ。かばかりのさましたるは難く（見苦しい程はなるまで遊びたはぶれつつ暮し給ふ。忍びてゐて隱してむことを返す〳〵宣ふ。匂その程、かの人に見えたらば」と、いみじき事どもを誓はせ給へば、いとわりなき事と思ひて、いらへもやらず、涙さへ落つる氣色、更に目の前にだに思ひ移らぬなめりと、胸痛うおぼさる。恨みても泣きても、よろづ宣ひあかして、夜明に聞のあるうちにもとの山莊へ夜ぶかく歸り給ふ。例の抱き給ひたりや」と宣へば、げにと思ひて、うなづきて居たる、いとらうたげなり。右近、妻戸放ちて入れ奉る。やがてこれより別れて出で給ふも、飽かずいみじと思さる。

かやうのかへさは、なほ二條の院にぞおはします。いと惱ましうし給ひて、物なども絶えて聞召さず、日を經て青み痩せ給ひ、御氣色もかはるを、うちにもいづくにも思ほし歎くに、いとど物さわがしくて、御文だにこまかにはえ書き給はず。かしこにも、かのさかしき乳母、むすめの子生む所に出でたりける、歸り來にければ、心やすくもえ見ず。かくあやしきすまひを、ただかの殿のもてなし給はむさまを、ゆかしく待つ事にて母君も思ひ慰めたるに、忍びたるさまながらも、近くわたしてむことを思しなりにければ、いとめやすく嬉しかるべき事に思ひて、やう〳〵人求め、童のめやすきなど迎へておこせ給ふ。わが心にも、それこそはあるべき事に初めより待ちわたれ、とは思ひながら、あながちなる人の御事を思ひいづるに、恨み給ひしさま、宣ひし事どもも、面影につと添ひて、聊かまどろめば、夢に見え給ひつつ、いとうたてあるまで覺ゆ。

いとど 只でさへ主上や母宮から出あるきを制せられてゐる所へ數日來の長雨故。

親のかふこは 拾遺戀四人麻呂「たらちねの親のかふこの繭ごもりいぶせくもあるか妹にあはずて」

ながめやる 眺めやる宇治の方の雲も見えぬ迄に心のみか空までが眞暗になつてゐる此頃の悲しさよ。「ながめ」に長雨がひゞかしてある。

殊にいと重く 格別重々しいといふやうな所はない浮舟の若い心にかうした手紙を見て一層戀心も募りさうであるが。「斯かる心」は匂宮の心と解かなければなるまいが、それならば「御心」となるべきである。今は河内本による。

世の中を 男女の仲といふものを經驗した最初の相手であるからであらうか。「初めなればにや」の下に「あらむ」が省略してある。

いかでかあらむ とても生きてはゐられぬ。

いつしかと 早く薫の手で京に引取つて貰ひたいと氣を揉んでゐる母親からも。

かく心いられ かう身も世もあらぬやうに自分を愛してゐられるとはいへ、かうして愛情のさめない間こそともかくも、間もなく忘れられてしまふだらう。匂宮は根が浮氣者と始終聞いてゐるから。

又かうながらも よしや又今の

雨降りやまで日頃多くなる頃、いと山路おぼし絶えて（宇治行もあきらめて）、わりなく（たまらなく）思されければ、親のかふこは所せきものにこそ（親に大事にされてゐる身は窮屈なものだ）、とお（も）・ぼすもかたじけなし（主上母宮に對して）。盡きせぬ事ども書き給ひて（筆紙に盡されぬといふ事をいろいろ）、

（匂宮）ながめやるそなたの雲も見えぬまで空さへくるる頃のわびしさ

筆にまかせて書き亂り給へるしも（無手書きにしてあるのが）、見どころあり、をかしげなり。殊にいと重くなどはあらぬ若き心地に、いと（ど）・斯かる心を・思ひもまさりぬべけれど、初めより契り給ひしさまも・（薫の態度）、さすがに（薫）かれはなほいと物深う、人がらのめでたきなども、世の中を知りにし初めなればにや、かかる憂き事聞きつけて（匂宮との祕密を薫が）、思ひうと（自分を嫌はれた時）み給ひなむ世には（此の世には）、いかでかあらむ、いつしかと思ひ惑ふ親にも、思はずに心づきなしとこそはもて煩はれめ（とんでもないおもしろくないと思つて吾が身の始末に困られるだらう）、かく心いられし給ふ人（匂宮）、はた・（いと）・あだなる、御心の本性（ほんじやう）とのみ聞きしかば、かかる程こそあらめ（結局忘れられてしまふだらう）、又かうながらも京に・（も）隠しすゑ給ひ、ながらへても思しかずまへむにつけては、かのうへの思さむこと（中君の思はくも如何であらう）、

愛情がつゞいて、 私を京にかくまつておかれて、長く一人前にお世話下さるにつけては。

かのうへの かのうへの思さむこといかゞあらむの意。

よろづ隠れなき云々 これから薫に對する話に移る。

怪しかりし 二條院で夕暮にけしからん事のあつたその導因だけですら匂宮はかうして探し出しもなさつたやうだ、まして薫は。

わが心も疵ありて 自分にも缺陷があつて薫に嫌はれるだらうそれは。

これかれと あれこれと雙方からの手紙を見るのも具合がわるいから。

言多かりつる 長々と書き續けた匂宮の御文を。

ことわり 思ひ移られるのも御尤もだ。

かばかりの これ程愛して下さるのを知りつつ此儘じつとしてゐる事は出來ませぬ。

后の宮にも 明石中宮の御方へも奉公に參つて。

御心ばへけはひなどよ お氣立やら態度やらそんなやうな點は申分ない方だ。

よろづ隠れなき世なりければ（隠すより現はるる世の中故）、怪しかりし夕暮のしるべばかりにだに、かう尋ね出で・給ふめり、ましてわが有様のともかくもあらむを（自分のいかなる動靜なりとも）、聞き給はぬやうはありなむや（薫が）、と思ひたどるに（それからそれと考へて見ると）、わが心も疵（きず）ありてかの人にうとまれ奉らむ（薫に）、なほいみじかるべし（非常に悲しくおもふ）、と思ひ亂るる折しも（折も折）、かの殿（薫）より御使あり。これかれと見るも、いとうたてあれば、なほ言（こと）多かりつるを見つつ臥し給へれば（浮舟が）、侍從右近見あはせて（顔見合はせて）、なほ移りにけり（匂宮に）・（な）と、いはぬやうにていふ（目顔で話しあつてゐる）。侍從「ことわりぞかし。殿（薫）の御かたちを、たぐひおはしまさじと見しかど、この御有様（匂宮の）はいみじかりけり（すばらしいものだ）。うち亂れ給へる愛敬（あいぎやう）よ（冗談でもいつてゐられる）。まろならば、かばかりの御思ひを見る見る、え斯くてあらじ。后（きさい）の宮にも參りて、常に見奉りてむ（匂宮を）」といふ。右近、「うしろめたの（油斷のならぬ御心いきだ）、御心の程や。殿（薫）の御有様にまさり給ふ人は誰かは・あらむ。（御）・かたちなどは知らず（容姿などは別として）、御心ばへけはひなどよ。なほこの御事は（匂宮との祕密）、いと見苦しきわざかな。いかが（結局）ならせ給はむとす

心一つに　右近一人で氣を揉んで居つた時よりも侍從といふ相談相手が出來たので。

のちのおもひなが　あとから來た。

ら　氣にかけながら久しく御無沙汰して居ります。

おろかなるに　御無沙汰がちなのも、あなたを疎々しく思ふからではありませぬ。

水まさる　晴れやらぬ物思に心までも眞暗になつてゐる頃、長雨に宇治川の水もまさる宇治の里人（浮舟）はどうして暮してゐる事だらう。

立文　艶書めかさず、すくゝゝしき立文である。立文は儀禮的な表沙汰に用ひる樣式である。

宮は　匂宮は長文の手紙を殊更小さく結文にされた。

里の名を　宇治のう（憂）といふ事を私の身の上に感じて居りますので、山城の宇治のあたりは一入住み憂く思ひます。この歌は新拾遺雜中に「題知らず紫式部」として入る。

宮のかき　男女の絡。一〇四頁。

ほかに　薫に引取られて匂宮に逢へなくなるのは。

「心一つに右近一人して語らふ。心一つに思ひしよりは、空言もたより出で來にけり。（都合がよくなつた）（薫の）のちの御文には、「思ひながら日頃になる事。（を）（あなたからもお手紙下されたら）時々はそれよりもおどろかい給はむこそ、思ふさまならめ。おろかなるにやは」など端書に、

「水まさる遠の里人いかならむ晴れぬながめにかきくらす頃（浮舟の事）（長雨に眺めを曇かす）（を）

常よりも思ひやり聞ゆることまさりてなむ」と、白き色紙にて、（木當に）立文なり。御手もこまかにをかしげならねど、書きざま故々しく見ゆ。宮はいと多かるを、小さく結びなし給へる、薫の（尤もらしく）（匂宮への返書を）まじき事ぞと、とざまかうざまに人見ぬ程に」と聞ゆ。（れ）（は）浮舟「今日はえ聞ゆまじ」と、恥ぢらひて、手習に、

浮舟　里の名を我身に知れば山城の宇治のわたりぞいとど住み憂き

宮のかき給へりし繪を、浮舟が時々見て泣かれけり。（匂宮との絲は末の通らぬものとながらへてある）

まじき事ぞと、とざまかうざまに思ひなせど、ほかに絶えこもりてやみなむは、いとあはれに覺ゆべし。（反省）

かきくらし　落着かぬ氣持で生きてゐる我身を峯の雨雲にしてしまひたい。火葬の煙となつてしまひたい。卽ち死んでしまひたいの意。

まじりなば　花鳥引歌「白雲の晴れぬ雲居にまじりなば何れかそれと君は尋ねむ」

まめ人は　生眞面目な薫は。

徒然と雨（涙）**が**　わが身のつらさを知るので、宇治川のみか袖までが一層水嵩が增して堰へがたい。古今戀四・伊勢物語「かず〳〵に思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる」古今戀三・伊勢物語「つれ〳〵のながめにまさる涙川袖のみ濡れてあふよしもなし」以上二首を本歌とした歌。

さすがに　「心苦しさに」にかゝる。

昔より　私は若い時から人と違つて遁世の志を持つて居りまして。

かく見奉る　貴女と結婚したのを捨てがたくて。

一概にも世を　さて人並に夫婦

ありと人にも　暮しをすると、今まで存在を人にも知らせなかつた隱し妻の事まで氣の毒になつて、捨てて置くのは罪になるやうに思はれて、こちらに引取らうかと思ひます。

「かきくらし晴れせぬ峯の雨雲にうきて世を經る身をもなさばや（雲の縁語）（詩るをひがめ）

まじりなば」と聞えたるを、宮はよよと泣かれ給ふ。（おいく）（聲をあげて）さりとも（浮舟が自分を戀しがつてるてくれるだらうと）戀しと思ふらむかしと思しやるにも、（浮舟の物思ひの姿が目先にちらつく）物思ひて居たらむさまの（どんなに物思ひになやんでるだらうと）いかになが（浮舟からの返事をゆつくりと）めむらむと思ひやりて、いと戀し。

浮舟　徒然と身を知る雨のをやまねば袖さへいとどみかさまさりて

とあるを、（薫は一寸下に置くことさへしないで）うちもおかず見給ふ。

女宮に物語などし聞え給ひてのついでに、（薫「無禮なと思召さうかと氣が引けますが）「なめしともや思さむ（浮舟の事）

と、つつましながら、さすがに年經ぬる人の侍るを、（永年の愛人が）あやしき所に捨ておきて、いみじく物思ふなるが心苦しさに、近う呼びよせて、（む）と思ひ侍る。昔より異樣なる心ばへ侍りし身にて、世の中を、すべて例の人ならで見過ぐしてむと思ひ侍りしを、かく（て）・見奉るにつけて、ひたぶるにも捨てがたければ、ありと人にも知らせじざりし人のうへさへ、心苦しう罪（も）・得ぬべき心地し

いかなる事に　どんな事に対し氣兼ねするものかも知らないのに、私に斟酌は入りませぬ。

うちなどに　浮舟を引取つたならば、主上にあしざまに告口する人もあらうかと心配してゐます。一體世間の口といふものはいかなる事に**も**おもしろくもないけしからぬものですよ。

斯かる料　さては隠し妻を引取る爲の家であつたのだ。

内記が知る人の　内記の妻の親なる大藏の大夫仲言。八八頁及九六頁參照。大藏丞で五位に叙せられた人を大藏大夫といふ。

聞きつぎて　内記の妻の口を通じて。

繪師ども　室内裝飾の繪をかく繪師。

さすがに　假初の隠家ながらもさすがに念を入れてかかせなさる。

ずらう下つ方　下京。

いと忍びたる人　秘密の女を當分隠しておきたいから家を貸して下さい。

大事と　句宮が重大事と思召して頼まれるので斷るのも畏れ多いから。

て」など聞え給へば、女「いかなる事に心おくものとも知らぬを」といらへ給ふ。筆「うちになど、あしざまに聞召さする人や侍らむと、世の人の物いひぞ、いとあぢきなくけしからず侍るや。されどそれは、さばかりの數にだに侍るまじ」など聞え給ふ。

かくなむと　浮舟をこれ〳〵の場所へ引取らうと思ふ。決して人に知られぬやうに用意せよ。

うちに　河内本には、うちの右傍に宇治の字をあててある。

乳母いとさかしき　例の邪魔だてした乳母がでしやばつて浮舟を番してゐるので抜出る事はむづかしからうといふ趣を。

○さそふ水あらば　古今雜下「わびぬれば身を浮草の根をたえて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ」

浮きたる　腹がきまらぬから。

思ひめぐらす程　思案をきめる間當分そこに居たいと。

少將の妻　常陸介の第二女。

殿より　京への引越しについて薫から女房達の衣裳まで委細御配慮を頂きました。

いかで清げに　引越しについては何から何まで綺麗にしたいと思つて居りますけれども、私一人の計らひでは、ほんのみすぼらしい事しか出來ませぬ。ままは乳母の意。

思ひ給ふれど　湖月抄も河内本も「思給れど」

浮舟

るに、かたじけなければ、「さらば」と聞えけり。これをまうけ給ひて、すこし御心のどめ給ふ。この月の晦日がたにくだるべければ、やがてその日渡さむと思しかまふ。かくなむと・思ふ。なく・・あるうちに・、ここにも、乳母いとさかしければ、難かるべきよしを聞ゆ。

大將殿は、卯月の十日となむ定め給へりける。さそふ水あらば、とは思はず、いとあやしく、いかにしなすべき身にかあらむと、浮きたる心地のみすれば、母の御もとに暫しわたりて、思ひめぐらす程あらむ、となりぬとて、修法讀經など隙なくさわげば、石山にもえ出で立つまじ。母ぞこちわたり給へる。乳母出で來て、「殿より、人の裝束なども、こまかに思しやりてなむ。いかで清げに何事もと思ひ給ふれど、ままが心一つには、あやしくのみぞしいで

八重だつ山に　河海抄引歌「白雲の八重だつ山にこもるとも思ひたちなば尋ねざらめや」

今日も宣へるを　今日も手紙で仰しやつて來たのだもの。

日頃あやしくのみなむ　此頃中妙な事ばかりです。

いかなる御心地ぞと　この「と」は「物怪などにやあらむと」の「と」と共に「思へど」に續く。姙娠かと疑つた言葉である。姙娠かと尋ねたのであることは、次に女房が石山も云々と注意してゐるので明かである。

有明の空を　匂宮と舟にのつて川を渡つた夜の事。

さるべき事も　のつぴきならぬ心配をもしておいでになつた間に。

侍らむかし」などいひさわぐが心地よげ(愉快げ)なるを見給ふにも、君(浮舟)は、けしからぬ事(匂宮に迎へられる事又密通の事)どもの出で來て人笑へならば、誰も(女房達)〳〵いかに思はむ、あやにくに宣ふ・・(める)人(匂宮)はた、八重だつ山に(何處に隱れたところで)こもるとも、必ず尋ねて、我も人も(匂宮も浮舟も)いたづらに(死んでしまふ事になるだらう)なりぬべし、なほ心やす(氣樂に)く隱れなむことを思へ、と今日も宣へる(つ)を、いか・・(さま)にせむ、と心地あしくて、臥したま・・へり。母「などか斯く例ならず、いたく青み瘦せ給へる」とおどろき給ふ。乳母「日頃あやしくのみなむ、はかなき物も(一寸した食物も)聞召さず、惱ましげにせさせ給ふ」といへば、母「怪しきことかな。物怪(もののけ)などにやあらむ」と、母「いかなる(どんな氣分か)御心地ぞ」と思へど、女房「石山も・とまり給ひ(月のさはりの爲に)にきかし」といふも、傍痛けれ(浮舟は恥かしくて)ば伏目(ふしめ)なり。暮れて・(月)いと月・あかし。有明の空を思ひいづる・(も)涙の、いと・・とどめがたきは、いとけしからぬ(浮舟の自省)心かなと思ふ。母君、昔物語などして、あなたの尼君(辨尼)呼びいでて、故姫君(大君)の御有樣、心深く(大君が考へ深くて)おはして、さるべき事・(と)も思し入れたりし程に、目

おはしまさまし　大君御存生ならば、大君は薰の夫人として中君と音信しあつて、淋しい境遇であつた御二人は昔とかはつて此上もないお仕合せでございましたでせうに。

わがむすめは　わが娘の浮舟とても中君等と何の違ひがあらう、同じ八宮の女だ、思ひ通りの運が今後も續いたならば中君にも劣るまいものを。

世と共に　浮舟の事については常住心配ばかりして居りましたが、形勢も少しく緩和されて、かうして薰の側に引越していつてしまふやうですから、これから後は、わざ〳〵思ひ立つて、此處に來られるかどうか分りますまい。

こまやかに　とつくり浮舟にお目にかゝる事も。

うち捨てて　浮舟が私をおいて京へお引越しなさつたならば心細うございませうが。

かかる御すまひは　浮舟がこんな山の中においでになる事は、將來を思ふと氣のもめる事とばかり考へて居りましたのに、それは嬉しく思ひます。

世に知らず　薰が又とないほどに行動を愼んでいらつしやる方と存じ上げてをりますが、さうした御身の上で、かうまで探出してまでいたゞきましたのだから、並大抵の思召ではあるまいと嘗て申上げておきましたが、決していゝ加減な事を申したのではありませぬ。

に見す〳〵消え入り給ひにし事など語る(辨尼が)。辨「おはしまさましかば、宮のうへ(中君などのやうな身の上で)などのやうに、聞えかよひ給ひて(大君中君)、心細かりし御有樣どもの、いとこよなき御さいはひにぞ侍らまし・か・し」・(な)といふにも、わが(母の心)むすめは他人(ことびと)かは、思ふやうなる宿世の・おはし果てば、劣らじを、など思ひ續けて、母「世と共に、この君につけては、物をのみ思ひ亂れし氣色の、すこしうちゆるびて、斯く・(こ)渡り給ひぬべかめれば、此處(宇治)にまゐりくること、必ずしも殊更にはえ思ひ立ち侍らじ。かかる對面の折々に、昔の事も、心のどかに(ゆつくりと)聞え承らまほしけれども」など語らふ。辨「ゆゆしき(御主人の柏木にも)身(夫にも死別れるといつた不幸な私)とのみ思ひ給へしみにしかば、こまやかに見え奉り聞えさせむも、何かはとつつましく(氣が引けて)て過ぐし侍りつるを、うち捨てて(私を)わ(京へ)たらせ給ひなば、いと心細く(あとに殘る私は)なむ侍る・べけれど、かかる(宇治の)御すまひは、心もとなくのみ見奉るを、嬉しくも(京移りは)侍る・べかめ(な)るかな。『世に知らずおも〳〵しくおはしますべかめる殿(薰)の御有樣にて、

宮のうへの　中君が匂宮の浮舟を二條院に引取つて可愛がつて下さいましたが。**中空に**　身の置き所もないやうで肩身のせばい身の上だと。

心はせあらむ　心ある若い女房は居にくがつて居ります。

大方は　一體が大層結構な御殿ですが、さうした筋の事で中君から身の程を辨へないと睨まれるのがたまらない。

大輔がむすめ　右近。四二頁に見える女房で宇治の右近とは別人。**まして**　右近ですらさうだからまして妹の私は中君に憚らねばならぬ。**むくつけや**　氣味のわるい。

かく尋ね聞えさせ給ひしも、おぼろげならじ』と聞えおき侍りにし、浮きたる事にやは侍・る」などいふ。「のちは知らねど、只今は斯く思し離れぬさまに宣ふ・・につけても、ただ御しるべをなむ思ひいで聞ゆる。宮のうへの、忝くあはれに思したりしも、つつましき事などのおのづから侍りしかば、中空に所せき御身なりと、思ひ歎き侍りて」といふ。尼君うち笑ひて、「こ

の宮の、いとさわがしきまで、色におはしますなれば、心ばせあらむ若き人、さぶらひにくげになむ。『大方はいとめでたき御有様なれど、さる筋のことにて、うへのなめしと思さむなむわりなき』と大輔がむすめの語り侍りし」といふにも、さりや、ましして、と君は聞き臥し給へり。御門の御むすめを持ち奉り給へる人なれど、よそ〳〵にて、あしくもあらむはいかがはせむと、おぼけなく思ひなし侍る。よからぬ事を引きいで給へらましかば、すべて身には悲しくいみじと思ひ聞ゆとも、又見奉らざらまし」など、いひかはす事どもに、いとど心騰もつぶれぬ。なほわが身を失ひてばや、遂に聞きにくき事は出で來なむ、と思ひ續くるに、この水のおとの怖ろしげに響きて行くを、「斯からぬ流れもありかし。世に似ずあらましき所に年月を過ぐし給ふを、あはれと思しぬべきわざになむ」など、母君したりがほに言ひゐたり。昔よりこの河の早く怖ろしきことをいひて、女房「さいつ頃、渡守がうまごのわらは、棹さしはづして落ち入り侍りにける。すべていたづらになる人多かる水に侍り」と、人々もいひあへり。浮舟君は、さてもわが身行くへも知らずなりなば、誰も〳〵、あへなくいみじと暫しこそ思ひ給はめ、ながらへて人笑へに憂きこともあらむは、いつかその物思ひの絶えむとする、と思ひかくるにはさはりどころもあるまじう、さわやかによろづ思ひなさるれど、うち返しいと悲し。親のよろづに思ひいふ有様を、寢たるやうに

遂に聞きにくき　とゞのつまりは外聞のわるい事が起るだらう。**この水の**　水の音が耳につくのも入水を暗示するのである。**斯からぬ**　同じく川でもこんなに怖しくない川もあるものだ。**世に似ず**　又とない荒々しい所に永年住んでいらつしやるのだもの、薫が可愛さうに思召すのも尤もなわけのものだ。

うまごのわらは　孫なる小童。

誰も〳〵　母君を始め薫や匂宮など。**あへなくいみじ**　あつけなく悲しいと思召すのもほんの一時だけの事ですむが。**ながらへて**　生きてゐて、つらい事でも起きて、人の物笑ひになるやうなことになつたら、その物思ひは永久に盡きる時はないのだ。**さはりどころも**　自殺の決行に邪魔になるものもなささうで、萬事がさつぱりするやうに感ずるけれども。

御手洗川に　戀故の惱みであるのに、母君はさうとも知らずに色々と心配する。伊勢物語「戀せじと御手洗川にせし御祓神は受けずもなりにけるかな」

よくさるべからむ　然るべき家を詮索して信用のおける侍女を雇入れ、新參の氣心の分らぬ者はつれてゆかないで此處へ殘してゆきなさい。

やんごとなき　身分のいい同志では、御本人こそおだやかに御理解下さりもしようが、不和になると、侍女達の間からうるさい事も起るでせう。

かしこに煩ひ　常陸介の次女卽ち少將の妻。

又あひ見でもこそ　これきり母君にはあはずに死ぬのかも知れぬ。

暫しも　當分の間なりと母君の所へ行つて來たい。

かしこも　常陸介方も次女の出産で。

この人々も　侍女達も私方では一寸した引移りの準備も出來ない程手狹ですから。

武生の國府に　あなたがいくら遠方に行かれても私は忍んでひに行きませうものを。催馬樂「道の口武生の國府に我はあり」と親には申したべ、心あひの風や、さきんだちや」武生は越前。

御手洗川に　戀故の惱みであるのに、母君はさうとも知らずに色々と心配する。伊勢物語「戀せじと御手洗川にせし御祓神は受けずもなりにけるかな」

よくさるべからむ　庭を雇入れ、新參の氣心の分らぬ者はつれてゆかないで此處へ殘してゆきなさい。

やんごとなき　身分のいい同志では、御本人こそおだやかに御理解下さりもしようが、不和になると、侍女達の間からうるさい事も起るでせう。

かしこに煩ひ　常陸介の次女卽ち少將の妻。

又あひ見でもこそ　これきり母君にはあはずに死ぬのかも知れぬ。

暫しも　當分の間なりと母君の所へ行つて來たい。

かしこも　常陸介方も次女の出産で。

この人々も　侍女達も私方では一寸した引移りの準備も出來ない程手狹ですから。

武生の國府に　あなたがいくら遠方に行かれても私は忍んでひに行きませうものを。催馬樂「道の口武生の國府に我はあり」と親には申したべ、心あひの風や、さきんだちや」武生は越前。

惱ましと　御病氣の趣御容態如何。

みづからと　自身がお見舞に參上したいと思ひますが、餘儀ない差支が多くて。

この程の　貴女を引取るとなると、一日の日が長いやうな氣がして、樂しいといふよりも却つて苦しい。

風の靡かむ方も　薫の方へ靡くのでは無いかと心配で。伊勢物語の、古今戀四「須磨の海人の鹽燒く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり」後拾遺戀二實方「浦風になびきにけりな里のあまのたく藻の煙心よわさに」一二七頁參照。

雨降りし　長雨の頃。

かの少輔　大內記藤式部少輔。

私に　主人の御用ではなく。

かうの君　出雲權守時方。

うつろひ給ふとも、忍びては參りきなむを、程は、斯かる御ためこそいとほしく侍れ」など、打泣きつつ宣ふ。

薫殿の御文は今日もあり。薫文「みづからと思ひ侍るを、わりなき障り多くとぶらひ給へり。薫文「惱ましと聞えたりしを、いかが」とてなむ。この程の暮しがたさこそ、なか〳〵苦し・」などあり。匂宮の文は宮は、「昨日の御返りもなかりしを、いかに思しただよふぞ。風の靡かむ方もうしろめたくなむ、いとどほれまさりてながめ侍る」など、これは多く書き給へり。雨降りし日來あひたりし御使どもぞ、今日も來たりける。薫殿の御隨身、かの少輔が家にて時々見るをのこなれば、隨身「貴殿まうとは何しにここには度々・參るぞ」と問ふ。使「私にとぶらふべき人のもとに、まうでくるなり」といふ。隨身「私の戀人にや艷なる文はさし取らする。氣色あるまうとかな。物隱しはなぞ」といふ。使「誠は、この守のかうの君の御文、

女房に奉り給ふ」といへば、順ぐれ口が流つて事たがひつつ怪しと思へど、ここにて定めいはむも異様なるべければ、おの〳〵参りぬ。薫の使は頭のかどかどしき者にて、供にある童を、隨身「このをのこに、さりげなくてよい男で目つけよ。左衛門の大夫の家にや入る」と見せければ、宮「匂宮邸に参りて、式部の少輔になむ御文は渡しさした取らせ侍りつる」といふ。さまで尋ねむものとも・・・・劣りの下衆は思はず、事の心をも深う知らざりければ、舎人の人に見あらはされにけむぞ口惜しきや。隨身が薫邸に殿に参りて、薫がお出かけぞほに今出で給はむとする程に御文奉らす。薫は直衣にて、六條の院に后の宮出でさせ給へる頃なれば、六條院に参り給ふなりけり・・。事々しく御前などもあまたもなし。御文まゐらする人に、隨身「怪しきことの侍りつる、見給へ定めむとて、今までさらにぶらひつる」といふを、薫がほの聞き給ひて、歩み出で給ふままに、薫「何事ぞ」と問ひ給ふ。この人の聞かむもつつましと思ひて、かしこまりてをる。殿も、しか見知り給ひて出で給ひぬ。

御前　前駆の人。
御文まゐらする　薫に御文を取次がせる人に隨身がいふには。
この人　隨身はこの取次の人が聞くのも憚つて默つた儘畏まつてゐる。薫も様子をけどつて家を出られた。
さまで尋ねむ　匂宮の知慧の足りない下部は、これ程迄先方が自分に目をつけてゐるとは思はず、事情をも深く知らなかつたので。
舎人の人　隨身の事。隨身は近衛府の舎人が務める。
殿　薫の三條の宮。
左衛門の大夫　時方。
式部の少輔　大内記道定。
おの〳〵　薫の使も匂宮の使もそれ〳〵主人の所へ歸つていつた。

宮たち　明石中宮腹の皇子達。
殊なる事も　御病氣は格別の事もない。
政官なれば　太政官の役人だから。太政宮は詔書勅書宣命などの公務が多端であるから。
この御文も　浮舟からの返事を匂宮に。
せちに思ふ　深く愛する女からの手紙らしいなと。
文に心入れて　匂宮は手紙に氣を取られて直には薫の方へお向きなさらずにゐる所へ。
おとど出で給ふ　夕霧が出て來られた、と咳拂ひで匂宮にお知らせ申された。
引隱し　匂宮が手紙を隱されたとたんに夕霧が顏を出された。
例の御じやけの　いつもの御邪氣が久しく起らなくて喜んで居つたのに、怖ろしいものですね。

明石中宮例ならず惱ましげにおは・・すとて、宮たちも皆參り給へり。六條院に上達部など多く參りつどひて、さわがしけれど、殊なる事もおはしまさず。かの内記は政官なれば、おくれてぞ參れる。この御文も奉・・・・るを、匂宮、臺盤所におはしまして、戸口に召寄せて取り給ふを、薫その返事を大將、中宮のお前の方より・・出で給ふ側目に見とほし給ひて、せちに・思すべかめる文の氣色かなと、をかしさに、立ちとどまり給へり。その文を匂宮が引きあけて見給ふ。紅の薄様に、こまやかに書きたるべしと見ゆ。文に心入れて、とみにも向き給はぬに、夕霧おとども立ちてと外の方へ出て來られたのでざまにおはすれば、この君は、障子より出で給ふとて、「おとど出で給ふ」と、打ちしはぶきて、驚かい奉り給ふ。引き隱し給へるにぞ、おとどさしのぞき給へる。匂宮驚きて御紐さし給ふ。殿もついゐ給ひて、夕霧「まかで侍りぬべし。例の御じやけの久しく起らせ給はざりつるを、怖ろしきわざなりや。山の座主只今請じにつかはさむ」と、いそがしげにて立

宮を先に立て　匂宮の御後について。
あなたに　夕霧邸に。
隨身氣色ばみつる　出がけに隨身がわけありげな様子をして居つたのが怪しいと薫は思召したので。
御前など　前驅の人などが薫の前を引きさがつて松明をつけてゐる間に。
しかゝ問ひ　斯様々々問ひたゞしました所が。
その返りごとは　宇治からの返事はどのやうにして使に渡したか。
異方より　私の居た所とは別の所から渡しました。
たがふ事なし　六條院で見た文に相違ない。
さまで見せつらむ　さうまで見届けさせた事を機轉の利いた仕方と。
田舎びたる　宇治は田舎で遠方の事故、かうした筋合の間違はあり得ない事と思ひこんで居つたのは幼稚な考へであつた。
さても　それにしても、匂宮はさうした色事も、私にかゝはりのない人に仰しやるなら仰しやるがよい。
しるべし　中君へ御案内してお連れ申したその宇治に、さういふ事情のある宇治だのに。
うしろめたく　そんなうしろぐらい思ひつきをするといふ法はない。
それは今始めて　中君に對するわが戀は今始まつた道ならぬ戀といふ不體裁のでもなく、かつて一夜添寢をしたといふ事が動機でもあるが、只わが心中にやましい所があるといふ事は、中君に取つては勿論自分に取つても心苦しく思はれるので遠慮してゐたのだが、それはばかげた事であつたのだ。

院を
ち給ひぬ。夜更けて皆出で給ひぬ。夕霧
り給ひて、あまたの御子どもの上達部君だち・引きつづけて、
あなたにわたり給ひぬ。この殿は、おくれて出で給ふ。・隨身
氣色ばみつる怪し、と思しければ、御前などおりて火ともす程
に、隨身召寄す。薫「申しつる事は何事ぞ」と問ひ給ふ。隨身「今朝、
かの宇治に、出雲の權守時方の朝臣のもとに侍るをのこの、紫
の薄樣にて、櫻につけたる文を、西の妻戸に寄りて、女房に取
らせ侍りつる、見給へつけて、しかゝ問ひ侍りつれば、ことの
たがひつゝ、空言のやうに申し侍りつるを、『いかに申すぞ』と
て、童べ・して見せ侍りつれば、兵部卿の宮に參り侍りて、式
部の少輔道定の朝臣になむその返事は取らせ侍りける」と申す。
薫君あやしと思して、薫「その返りごとは、いかやうにして・出だ
しつるぞ」。隨身「それは見給へず。異方より出だし侍りにける。下
人の申し侍りつるは、『赤き色紙のいと清らなる』となむ申し侍
りつる」と聞ゆ。薫思しあはするに、たがふ事なし。さまで見せ
つらむを、かど〳〵しと思せど、人々近ければ、くはしくも宣
はず。道すがら、なほいかなりけむついでにに、さる人ありと聞き給ひけむ、いかでい
ひ寄り給ひけむ、田舎びたるあたりにて、か・やうの筋のまぎ
れは、えしもあらじと思ひけるこそをさなけれ、さても、知ら
ぬあたりにこそさるすきごとをも宣はめ、昔より隔てなくて、
怪しきまでしるべし・ね、てありき奉りしみ・にしも、うしろ
めたく思し寄るべしや、と思ふに、いと心づきなし。薫が中君を深く戀對の御方
しつゝも年來怠へ續けてゐるのはの御事を、いみじく思ひつゝ年頃過ぐすは、わが心のおもさは・
こよなかりけり、さるは、それは今始めてさまあしかるべき程
にもあらず、もとよりのたよりにもよれるを、只心のうちの隈
あらむは、わが爲も苦しかるべきによりこそ、思ひ憚るもをこ
なるわざなりけれ、此頃かくなやましくし給ひて、例よりも人

いかではる〳〵と 匂宮はどうして遠い宇治の浮舟の所へ文をやられるのだらう、もう通ひ始められたのぢやなからうか。

さやうの事に 匂宮は浮舟との關係に煩悶なさつて。

えおはせざりし 中君の所へ行き得なかつた時の匂宮の歎きは實に氣の毒なものであつた。

片端心得そめ その理由の一端が分つて來てからはいろ〳〵ととり合せて考へて見られるに。

この宮の あの浮舟は好色な匂宮のつれあひには大變よい相手だ。

のく心地 自分は手を引きたい氣持はなさるが。

やんごとなく 本妻にする積りで關係し始めた女ならばともかく、さうではないのだから、やはり今迄通り單なる愛人としておかう。

と言つてこれきり緣を切つてしまふのも戀ひしくも思はれるだらう。

人のため 匂宮といふ人は、女に對して後に氣の毒な目をするなどは別に考へてはゐられまい。

さやうに思す 最初愛して後に飽いた女を一品宮の御方へ二三人もあげておかれるのだ。

さて出で立ち 浮舟が同じ目にあつて宮仕に出てゐるを見たり聞いたりするのが氣の毒だ。

御みづから 薫御自身人のゐない時に隨身を。

道定 大内記兼式部少輔で仲信の婿。

道定も 道定も浮舟に懸想もするだらう。

人に見えでを 誰にも見つからぬやうにして宇治へ行け。人に知られては阿呆らしい。

少輔か常に 道定が姑息の動靜を聞合せ浮舟の事をも尋ねたりした事を隨身はさうだつたかと分つたけれども。

下衆に 隨身如き下々の者に内情を云はしくは知らせたくないのでお尋ねにもならない。

波越ゆる 私を待つて居つてくれるものとのみ思つてゐた、貴女が外の男に心變りしてゐるとも知らずに。何といふかなる私でせう。古今東歌「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ」

しげきまぎれに、いかではる〳〵と書きやり給ひつらむ、おはしやそめにけむ、いと遙なる懸想の道なりや、怪しくて、おはし所尋ねられ給ふ日もありと聞えきかし、さやうの事に思し亂れて、そこはかとなく惱み給ふなるべし、昔を思しいづるにも、えおはせざりし程の歎きは、いといとほしげなりきかし、とつく〳〵と思ふに、女のいたく物思ひたるさまなりしも、片端心得そめ給ひては、よろづ思しあはするに、いと憂し。ありがたきものは人の心にもあるかな、らうたげにおほどかなりとは見えながら、色めきたる方は添ひたる人ぞかし、この宮の御具にては、いとよきあはひなり、と思ひも讓りつべく、のく心地し給へど、やんごとなく思ひそめ・し人ならばこそあらめ、なほさるものにておきたらむ、今はとて見ざらむ、はた繼しかるべし、と人わろくいろ〳〵心のうちに思す。われすさまじく思ひなりて捨ておきたらば、必ずかの匂宮が浮舟を呼び取り給ひてむ、人のため、のちのいとほしさをも殊にたどり給ふまじ、さやうに思す人こそ、一品の宮の御方に・人二三人參らせ給ひたンなれ、さて出で立ちたらむを見聞かむ・いとほしく、など、なほ捨てがたく、氣色見まほしくて、御みづから人間に召寄せたり。「道定の朝臣は、なほ仲信が家にや通ふ」。「さなむ侍る」と申す。「宇治へは常にやこのあり遣した男けむをのこはやるらむ。かすかにてゐたる人なれば、道定も思ひかくらむかし」と、うちうめき給ひて、「人に見えでをまかれ。をこなり」と宣ふ。かしこまりて、少輔が常にこの殿の御事あないし、かしこまりて、うちうめき給ひて、「人に見えでをまかれ。をこなり」と宣ふ。かしこまりて、少輔が常にこの殿の御事申し出でず。君も、下衆にくはしくは知らせじと思せば、問はせ給はず。かしこには、御使の例より・繁きにつけても、物思ふことさま〴〵なり。ただ斯くぞ宣へる。

「波越ゆる頃とも知らず末の松まつらむとのみ思ひけるかな

御返りごとを　この歌の意味が分つたやうな顔で御返事申上げるのも憚られるし、何かの間違でもあつたら妙な事であるから。

さすがにいたくも　匂宮のしつけだけにさすがに巧者ないひのがれをしたものだ、偖て見た事のない擬轉だ。

まほならねど　薫の手紙は露骨ではないが匂宮の事をほのめかしてあるので。

けしからず　人前に出せないやうな妙な事になつてしまひさうだ。

ゆゆしく　手紙を見ずに其儘返すといふ事は不吉な忌むべき事でございますのに。

僻事の　間違ひがあるやうに思はれたので、おかどちがひかと思つて。

怪しと　何故手紙を其儘返すのか不思議であつたので。

物の氣色　例の秘密を感づかれたのでせう。

文見つらむ　右近が途中で文を見たとは思はないから。

他樣にて　手紙以外に、薫の樣子を知つてゐる人が右近に語つたのに違ひないと思ふと。

誰かさいふぞ　誰がそんな事をお前に告げたのか。

人二人　二人の男に關係したのですが。

程々に云々斯くぞかし　挿入の句。上も下も皆同じ事ですよ。

これも劣らぬ　これも匂宮と薫との場合のやうに、二人の男の愛情に甲乙がないので、迷つて居りましたので。

それにねたみて　前からの男が嫉妬して遂に後の男を殺してしまひました。そして自分も通はぬやうになつてしまひました。

あやまちしたる　殺人罪を犯した男も。

女のたいぐしき　右近の姉がよくないのだ。

館　常陸介の舘。

人に笑はせ給ふな」とあるを、浮舟の心に變だなと思ふに、胸もふたがりぬ。御返りごとを心得顔に聞えむもいとつつましく、僻事にてあらむもあやしければ、御文はもとのやうにして、浮舟「所たがへのやうに見え侍ればなむ。あやしく惱ましくて何事も」と、書き添へて奉りつ。薫が見給ひて、さすがにいたくもしたるかな、かけて見及ばぬ心ばへよ、とほほゑまれ給ふも、憎しとはえ思し果てぬなめり。

まほならねどほのめかし給へる氣色を、浮舟かしこにはいとど思ひ添ふ。浮舟の心終にわが身は、けしからず怪しくなりぬべきなめり、といとど思ふところに、右近來て、右近「殿の御文は、などて返し奉らせ給ひつるぞ。ゆゆしく忌み侍るなるものを」といへば、浮舟「僻事のあるやうに見えつれば、所たがへかとて」と宣ふ。怪し人の手紙を開けるとはと見ければ、文を途にてあけて見けるなりけり。よからずの右近がさまやな。文を見つとはいはで、右近「あないとほし。匂宮にとつても薫にとつても困つた苦しき御事ども

にこそ侍れ。薫殿は、物のてさと赤みて、物も宣はず。文見つらむとは思はねば、他樣にて、かの御氣色見る人の語りたるにこそはと思ふに、「誰かさいふぞ」などもいみじく恥かし。わが心もてありそめし事ならねども、心憂き宿世かな、と思ひ入りて寢たるに、侍從と二人して、右近が姉の、常陸にて人二人見侍りしを、程々につけては、ただ斯くぞかし、これも劣らぬ志にて、思ひ惑ひて侍りし程に、女は、今のかたに今すこし心寄せまさりてぞ侍りける。それにねたみて、終に今のをば殺してしぞかし。さて我も住み侍らずなりにき。國にも、いみじきあたらつはもの一人失ひつ。又このあやまちしたるも、よき郎黨なれど、『かかるあやまちしたる者を、いかでか使はむ』とて、國の内をも追ひ拂はれぬ。『すべて女のたいぐしきぞ』とて、舘のうちにもおいたまへらざりしかば、

まま母。浮舟の乳母で右近姉妹の

見給ふれ

ゆゆしきついでの

を申上げるのは縁起でもないやうですが。

御命までには御命にかかはる程ではなくとも、そんな事は身の程相応にさうした苦労はあるものです。

なか〳〵下々の者よりも却つて。

一方に薫か匂宮か。

さばかりうへのあれ程母君が大事になさるのに、乳母が浮舟の病氣の斟酌もしないで、この御引越に熱中してさわいでゐるにつけても。

それよりこなたにそれ以前に自分方に引取らうと仰やる匂宮こそ薫よりも一入御いぢらしく御氣の毒にも思はれる。

うたておそろしきまで浮舟の御前で、そんないやな、聞いてゐても怖ろしいやうな仰しやり方はなさるな。

さるべきにてさうなるべき運命として御定めなさいまし。

いと忝く誠に勿體ないお悲しさうな御樣子であつたので、薫がこんなに急いでおいでになつたのでは氣が向かないのです。その方には

暫しは當分は人目を避けて居てでも、餘計に愛してゐられる匂宮の方へお靡きなさいましと私は思ひます。

ぶだう無道か。落窪物語にも「穩門の督のぶだうなるやうなれど」とある。河内本は「ふてう」の假に不調と漢字をあててある。

内舎人（花）内舎人帶劍具二兵杖一武勇者也、兼二坂東掾一也。

右近の大夫右近將監で五位に叙せられた者。

よろづの事を宇治山莊の警固萬端の事を。

物の心得ぬ考へなしの田舎者どもが番人として交替で番をしてゐるのですから。

艸かなる些細な過失もないやうになどと思ふので間違も起りませう。

ありし夜の先夜川向ひの家に行かれた時は本當に氣味わるい感じがしました。

姉は田舎者になつて

あづまの人になりて、ままも今に戀ひ泣き侍るは、罪深くこそ見給ふれ。ゆゆしきついでのやうに侍れど、上も下も、かかる

秤にかけて苦勞なさるのは大變いけない事です

筋のことは、思し亂るるはいとあしきわざなり。御命までには

あらずとも、人の御程々につけて侍ることなり。死ぬるにまさる恥ぢなる事も、

貴人

よき人の御身には、なか〳〵侍るなり。一方

匂宮

におぼし定めてよ。匂宮も、

匂宮の方へ

させ給はば、そなたざまにも靡かせ給ひて、物ないたく歎かせ給ふも、いとやくなし。さばかりうへの思ひいたづき聞えさせ給ふものを、ままがこの御いそぎに心を入れて、惑ひ居て侍るにつけても、それよりこなたにと聞えさせ給ふ御事こそ、いとど苦しくいとほしけれ」といふに、今一人、侍從「うたておそろしきまでな聞えさせ給ひそ。何事も御宿世にてこそ。あらめ。只御心のうちにすこし思し靡かむかたを、さるべきに思しならせ給へ。いでや、いと忝くいみじき御氣色

なりしかば、人の斯くおぼし急ぐめりし方に心も寄らず。暫しは隱ろへても、御思ひのまさらせ給はむに寄らせ給ひねとぞ思ひ侍る」と、宮をいみじくめで聞ゆる心なれば、ひたみちにいふ。右近「いざや、右近はとてもかくても、『事なく過ぐさせ給へ』と、初瀨石山などに、願をなむ立て侍る。この大將殿の御庄の人々といふものは、いみじきぶだうの者どもにて、一類こ一門が宇治の里に滿ちて侍るなり。大方この山城大和に、殿の領じ給ふ所の管領者の人なむ、皆この内舎人といふもののゆかりかけつつ侍るなる。それが婿の右近の大夫といふものをもととして、よろづの事をおきて仰せられた・なるなり。よき人の御中どちは、なさけなき事しいでよと思さずとも、物の心得ぬ田舎人どもの、宿直人にて代り〳〵さぶらへば、おのが番にあたりて聊かなることもあらせじなど、あやまちもし侍りなむ。ありし夜の御ありき・は、いとこそむくつけく思ひ給へられしか。宮はわりな

さるものども」の事。「物の心得ぬ田舎人

我を宮に　自分が匂宮に氣のあるものと思つて侍女達は噂してゐる、それは。

心地には　自分の心では薫と匂宮とどちらがよいとも思はず。

いみじくいられ給ふ　ひどくいらく〳〵してゐられる匂宮を、なぜかうまでとは思ふけれども。

げによからぬ　右近の話したやうに不祥事の起りでもしたらどうしようと。

安らかに思しなせ　氣樂に思つていらつしやうにと思つて色々申上げるのです。

おぼしぬべき　今迄は心配遊ばさなければならぬ事でも平氣で暢氣らしくしていらつしやいまして、匂宮との關係の御出來になつた後は、ひどく氣を揉んでいらつしやいますので。

事を内密になさらうとして

くつませ給ふとて、御供の人もゐておはしまさず、いつも姿をやつしてのみおはしますを、さるものの見つけ奉りたらむは、宮といふ見別けがつかないからいといみじくなむ」といひつづくるを、右近侍從筆

と思ひてこの人々のいふ、いと・恥かしく、浮舟の心地にはいづれとも思はず、ただ夢のやうにぼんやりしてあきれて、いみじくいられ給ふをば、浮舟は

など斯くしもとばかり思へど、（この事により）・・・・・・頼み聞えて年頃になりぬる人を、薫　今はとこれまでと別れてしまはうともて離れむと・思はぬによりこそ、かくいみじと物も思ひ亂るれ、げによからぬ事も出で來たらむ時、浮舟は

とつく〳〵と思ひ居たり。浮舟「まろは・、いかで死にたいづれたづかず心憂かりける身かな。かく憂き事あるためしは、下衆などのなかにだにも・多くやはあなる」とて、うつぶし臥し給へば、右近「斯くな思召しそ。安らかに思しなせとてこそ聞えさせ侍れ。おぼしぬべき事をも、さらぬがほにのみ、のどかに見えさせ給へるを、匂宮との事この御事ののち、いみじく心いられをせさせ給へば、

おのが心をやりて　滿足して。

今參り童かかる人御覽ぜよ　新參の童女。こんな召使を雇ひ入れました。お氣に召すか御覽下さい。

殿よりは　薫からは浮舟が手紙を返して以來何の消息もなしに數日たつた。

このおどし内舍人　右近が怖ろしげに語つたあの人。一四七頁八行。

殿に召し侍りし　薫からお召がありましたので。

かくておはします　以下薫の命令を内舍人が自分の詞としていふのである。

なにがしら斯くて　拙者がかうして山莊を警固してゐるので心配はないと薫は思召して、番人を わざ〳〵京からさし遣はされる事もないのですが。

女房の御もとに　浮舟方へ匂宮がといふべきをわざと斯くいふのである。

變におもつてをります

いと怪しくなむ見奉る」と、事情を知つて居る女房達は心知りたる限りは、皆かく思ひ亂れ騷ぐに、乳母、おのが心をやりて、物染めのしたり準備にいそがしくしてゐた染めいとなみ居たり。

今參り童などの目安きを呼び入れて取りつつ、乳母「かかる人・も御覽ぜよ。浮舟の事をいふ

怪しくてのみ臥させ給へるは、物怪などの京都行きの邪魔をしようとする妨げ聞えさせむとするにこそ」と嘆く。

殿よりは、かのありし返りごとをだに宣はで、日頃經ぬ。この（か）不恰好にふつおどし・し内舍人といふものぞ來たる。げにいと荒々しく、亂暴らしく太つたつかなるさましたる翁の、聲枯れ、さすがに氣色ひと寢ある、「女房に、一寸申上げませう物取り申さむ」といはせたれば、右近しもあひたり。内舍人「殿に召し侍りしかば、今朝參り侍りて、只今なむ宇治へ取次を以て薫方へ雜事ども仰せられつるついでに、かくておはします程に、夜中暁の事にも・、なにがしら・斯くてさぶらふと思ほして、宿直人わざとさし奉らせ給ふことともなきを、此頃聞召せば、女房の御もとに、知らぬ所の人・（々）かよふやうになむ聞召すことある、たい浮舟が宇治に私に知らない京の者が

宿直にさぶらふ 番をしてゐる者はその事情を問ひただした事だらう。知らずに居る筈はない。

さるべきをのこ 然るべき下部の者どもは。

用意してさぶらへ 注意して番をせよ、不都合な事でもあつたら厳重に罰するぞといふ旨を。

さりや それ御覧なさいまし。何もかも私が申上げた通りなのをお聞き遊ばせ。薫が様子をけどられたのでございませう。だから御手紙もありませぬは。（一四五頁右近の詞）

いと嬉しく 乳母は事情を知らないから盗人などの用心にかと思ふのである。

だいしき事なり。『宿直にさぶらふ者どもは、そのあ・ない問ひ聞きたらむ。知らではいかが・さぶらふべき』と問はせ給へるに、承らぬ事なれば、『なにがし・は身の病おもく侍りて、宿直仕うまつる事は、月頃怠りてはべ・れば、あ・ないもえ知り侍らず。さるべきをのこどもは、懈怠なく催しさぶらはせ侍るを、さの如き非常の事のさぶらはむをば、いかでか承らぬやうは侍らむ』となむ申させ侍りつる。用意してさぶらへ、びんなき事もあらば、おもく勘當せしめ給ふべきよしなむ仰言侍りつれば、いかなる仰言にかと、おそれ申し侍る」といふを聞くに、扇の鳴かむよりも、いとものし怖ろし。いらへもやらで、「さりや。聞えさせしにたがはぬ事どもを聞召せ。物の氣色御覧じたるなめり。御消息も侍らぬよ」など歎く。乳母はほのうち聞きて、「いと嬉しく仰せられたり。盗人おほかなるわたりに、宿直人も初めのやうに十分には番せず、皆、『身の代りぞ』といひつつ、あやし

げに只今いとあしく 「げに」は右近が心配してゐたのを受けていふ。

苔の亂るる 新勅撰戀二讀人知らず「君にあはむ其日をいつと松の木の苔の亂れて物をこそ思へ」この歌の上句の意を取つて用ひたのである。

懸想ずる人の 萬葉九・十六・大和物語等に見える櫻兒や菟原處女などをさすのであらう。

あまたの子ども 大勢の子供を世話するのに紛れて自然私の事は忘れてしまはれるだらう。

け高う 東國生活をして居つた爲に（俗事を知らぬ意）世間知らずに育てられた人故。**おずかるべき** 自殺といふやうな氣強い事を。**むつかしき反古** あとに殘つては困るやうな厄介な文反。

き下衆をのみ參らすれば、夜行をだにせぬに」と喜ぶ。君は、げに只今いとあ・しくなりぬべき身な・めり、と思すに、宮よりは、「いかに〳〵」と・・、苔の亂るるわりなさを宣ふ。いと煩はしく・なむ。とてもかくても、一方々々につけて、いとうたてある事は出で來なむ、わが身一つの無くなりなむのみこそ目安からめ、昔は、懸想ずる人の有樣のいづれとなきに、思ひ煩ひてだにこそ身を投ぐるためしもありけれ、ながらへば必ず憂きこと見えぬべき身の、亡くならむは、何か惜しかるべき、親も暫しこそ歎き・・給はめ、あまたの子どもあつかひに、おのづから忘草・摘みてむ、ありながらもてそこなひ、人笑へなるさまにてさすらへむは、まさる物思ひなるべし、など思ひなる。こめきおほどかに、たを〳〵と見ゆれど、け高う世の有樣をも知る方すくなくておほし立てたる人にしあれば、すこしおずかるべき事を思ひ寄るなりけむかし。むつかしき反古などや

おどろ〳〵しく 一度に燒いて人目につくやうな大層らしい始末のしかたはしないで。

御達 女房達。

物へわたり 薫に引取られて京へ移られる筈だから、長い徒然の生活の間に何といふことなしに書いておかれた詠草などを破り棄てられるのだらう。

あはれなる 戀仲に心をこめて贈答なさつたお手紙は。

何かむつかしく 何の厄介な殘すやうな事をしよう。

さかしらに こんな手紙を大事にしまひこんでおくなんて、せんでもいい事をしたものだなどと薫から聞かれるのが恥かしい。

え思ひ立つまじき とても決行しかねる譯のものであつた。

罪深くなる 河内本によるべきである。

りて、おどろ〳〵しく一たび(文殻を一度には始末せずにもしたためず、燈臺(少しづゝ)の火に燒き、水に投げ入れさせなどし、やう〳〵(ほつく)失ふ。心知らぬ御達(たち)は、物へわたり給ふべければ、(浮舟が)め給へる手習などを、(籠中に秘めて)見つくる時は、(侍從)「などか斯くはせさせ給ふ。あはれなる御中に、御心とどめて書きかはし給へる文は、人にこそ見せさせ給はざらめ、物の底におかせ給ひて御覽ずるなむ、程々(身の程につれて)につけては、いとあはれに侍る。さばかりめでたき御紙づかひ(句宮の文の料紙の用法)、添き御言の葉を盡させ給へるを、斯くのみやらせ給ふ(破)、なさけなき事(心ない仕業)」といふ。(浮舟)「何かむつかしく。長かるまじき身にこそあめれ。(死後に文落ち殻が殘ってとどまりて、人の御ため・もいとほしからむ(に)。さかしらにこれ(句宮の文)を取りおき・・けむ(る)よなど、(句宮が)漏り聞き給はむこそ恥かしけれ」など宣ふ。(死を決心したものの)心細きことを・思ひもてゆく(い)には、(又)まだ・え思ひ立つまじきわざなりけり。親をおきて(あとに殘して)亡くなる人は、いと罪深く(か)な

かの家あるじ 句宮の乳母の夫なる受領。宮に家を貸す約束をした事が一三〇頁に見える。

その夜必ず 浮舟への文の詞。

よく氣色見ゆまじき 樣子をけどられないやう十分注意しなさい。私の方からは決して漏れる筈はあるまい。

さて 「さても」の意。

あるまじきさま 危險を冒して忍んで來られても、守りが嚴しくて、一度の話も出來ず對面もしないでお歸へし申す事よ。

例の面影離れず いつものやうに句宮の俤が目先にちらついて。

あが君 人を親しみ呼ぶ時の對稱代名詞。

かうかかづらひ そんなに拘泥なさらずに然るべく御返事遊ばせ。

右近侍らば 私が附いて居りましたら、大それた工面を致しましたら、こんなに小さい御身ですもの、宮は空からでもお連れだしなさいますでせう。「右近侍らば」とは「おほけなき……侍らば」とは同格。

るものをなど、(世間知らずに青つたものの)さすがにほの聞きたる事をも思ふ。

三月廿日あまりにもなりぬ。かの家・(の)あるじ、廿八日に(任國に)くだるべし。宮は、「その夜必ず(浮舟を)迎へむ。下人(しもびと)などに、よく氣色見ゆまじき心づかひし給へ。(私の方からは決して漏れないこなたざまよりは、夢にも聞えあるまじ。疑ひ給ふな」など宣ふ。(浮舟の心)さてあるまじきさまにておはしたらむに、(句宮が宇治へ)一時たりとも時のまにても、いかで・(か)ここには(宮を部屋へお入れ申す事が出來よう)寄せ奉らむとする、(折角の來がひもたい)かひなく恨(く)みて歸り給はむさまなどを思ひやるに、例の面影離れず、絶えず悲しくて、この御文を顏におしあてて、(句宮の)暫しはつつめども、(人目を)いと・いみじく泣き給ふ。右近、「あが君、(句宮との仲を)かかる御氣色遂に人見奉りつべし。やう〳〵、怪しなど思ふ人も・侍るべかめり。かうかかづらひおも・ほさで、さるべきさまに聞えさせ給ひてよ。右近侍らば、おほけなき事もたばかりいだし侍らば、かばかり小さき御身(浮舟の)一つは、空よりもぬて奉らせ給ひなむ」といふ。(良暫し涙)とば

かりためらひて、（浮舟「かくのみいふこそいと心憂けれ。さもあり（句宮に心あるやうにのみ）
ぬべき事と思ひかけばこそあらめ。あるまじき事と皆思ひ取る
に、わりなく、かくのみ頼みたるやうに宣へば、いかなる事を
しいで給はむとするにかなど思ふにつけて、身のいと心憂きな
りしものを、あひ見ぬとだえに、人々のいひ知らする方に寄る
のから、いと口惜しくねたく、さりとも我をばあはれと思ひた
ならむかし、などながめ給ふに、ゆく方知らずむなしき空に満
ちぬる心地し給へば、例のいみじく思し立ちておはしましぬ。
外聞の
蔦垣の方を見るに、例ならず、番人「あれは誰そ」といふ聲々、いつもと違って
夜番が氣づくやうだ
ざとげなり。
案内役の時方が立ちのきて、心知りのをのこを入れたれば、それ

をさへ問ふ。（從前の樣子に
さきん〳〵のけはひにも似ず、頗はしくて、「京よ
りとみの御文あるなり」といふ。右近が從者の名を呼びて逢ひ
たり。男は
いと頗はしくいとどおぼゆ。右近「更に今宵は不用なり。
いみじくそへき事」といはせたり。宮、など斯くもて離るらむ、
とおぼすに、わりなくて、
さるべきさまにたばかれ」とて遣はす。時方を
とかくいひ構へて、薫の命令があるとかで
かの殿の宣はする事ありとて、宿直にある者どもの、さかしが
りだちたる頃にて、いとわりなきなり。お前にも、物をのみい
みじくおぼしためるは、斯かる御事の忝きを思し亂るるにこ
そはと、心苦しくなむ見奉る。更に、今宵は人氣色見侍りなば、
なかなかにいとあしかりなむ。やがてさも御心づかひせさせ給
ふべからむ夜、ここにも人知れず思ひ構へてなむ聞えさすべ
か（日をさまし易いから乳母にも油斷がならぬ事など）めると。乳母のいざとき事なども語る。大夫、「おはします道

なおさへて
ぬべき事と思ひかけばこそあらめ。（ふのが然るべき道と私が思つてるのならともかく）
へむ」といふやうに獨合點して）
掛りきつてゐるものやうに句
宮が無闇に仰しやるので、どん
な事をしでかすお積りなのかと
思ふにつけて。

わりなく　「宣へば」を修飾する。こんな風に（「その夜必ず迎
かりためらひて　浮舟「句宮に心あるやうにのみ
いふこそいと心憂けれ。句宮の御言葉に從
さもあり
それは濟まぬ事と十分悟つてゐるのに
あるまじき事と皆思ひ取る
句宮を
頼みたるやうに宣へば、いかなる事を
つらいのです
身のいと心憂きな
ぬべき事と思ひかけばこそあらめ。　ふのが然るべき道と私が思つてるのならともかく
しいで給はむとするにかなど思ふにつけて、身のいと心憂きな
りしものを　句宮に返りごとも聞え給はずなりぬ。
り」とて、　句宮に返りごと
宮、斯くのみなほ受け引く氣色もなくて、返りごとさへ絶え絶
えになるは、かの人のあるべきさまにいひしたためて、すこし
心やすかるべき方に思ひ定まりぬるなめり、ことわりと思すも
のから、いと口惜しくねたく、さりとも我をばあはれと思ひた
ならむかし、などながめ給ふに、ゆく方知らずむなしき空に滿
ちぬる心地し給へば、例のいみじく思し立ちておはしましぬ。
外聞の
蔦垣の方を見るに、例ならず、番人「あれは誰そ」といふ聲々、早く
夜番が氣づくやうだ
ざとげなり。
案内役の時方が立ちのきて、心知りのをのこを入れたれば、それ

京より　京なる浮舟の母君の所から急用の手紙です。
右近が從者　右近の召使の名を呼んでその召使に面會した。守りが嚴重で右近に直接對面が出來ぬのである。
さるべきさまに　うまい具合に工面せよ。
さかしがりだちたる　餘計な用心までしてゐる時でどうにもならないのです。
お前にも　浮舟が心を痛めてばかりゐるのも、句宮に無駄足を踏ませる事の勿體なさを心配してゐられるのだとお痛はしく存じてをります。
人氣色見侍りなば　誰か來たことを番人が見ましたならば、
やがて　「ここにも人知れず云々」の句を修飾する。浮舟を京へお
さも御心づかひ　連れ申すに當方が晩に當方からも人知れず工夫してお知らせ
おはしまする道の　申しませう。
句宮のおいでになる途中も一通りならずつきつめた御樣子なのに、對面も出來ないといふやうなあつけない事を申上げるのは罰が當る。

の、おぼろげならず、あながちなる御氣色に、あへなく聞えさせむ事なむたいぐ〳〵しき。さらば、いざ給へ。私と一緒に共にくはしく聞えさせ給へ」といざなふ。侍從「それは無茶苦茶でせうろふ程に、夜もいたく更けゆく。

句宮は、御馬にてすこし遠く立ち給へるに、里びたる聲・・・犬どもの出で來てののしるも、いと怖ろしく、人ずくなにいと怪しき御ありきなれば、すずろならむ者の走り出で來たらむも、いかさまにかと、さぶらふ限り、心をぞ惑はしける。時方「なほ疾く〳〵參りなむ」といひさわがして、この侍從をゐて參る。髮、脇よりかいこして、樣態いとをかしき・・人なり。馬に乘せむとすれど、更に聞かねば、衣の裾を取りて、立ち添ひて行く。

わが沓をはかせて、時方自身はみづからは、供なる人の怪しきものをはきたり。句宮のお前に參りて斯くなむと聞ゆれば、馬上の儘では話も出來ないので語らひ給ふべきやうだにければ、山賤の垣根の、あどろ葎の蔭に、あふり・といふ物を

人ずくなにつれた御忍びありき故、うつつけ者が飛び出して來たらどうなる事かと、供人一同心配した。　**髮脇より**へまはして。垂れ髮を脇下から前。歩行の爲である。　**馬に乘せむと**　時方が侍從を。　**衣の裾を取りて**すいやうに侍從の衣の裾を時方が持つて相並んで行く。　**わが沓を**　時方が自分の沓を侍從にはかせて。　**あふり**　障泥。馬の鞍の下に兩側に覆ひ垂れて騎手の衣に泥のかかるのを防ぐ馬具。

心弱き人　氣の弱い侍從は。

え聞えさすは出來まいか。　浮舟と話をする事　**斯かるぞと**　この「と」は次の「やうあるべしと」の「と」と共に「宣ふ」に續く。　**有樣くはしく**　侍從が事情を委細句宮に申上げて。　**さおぼしめさむ日を**　浮舟を引取らうと思召す日を前以てその時まで。　**斯く忝き事ども**　危險を冒しても宇治に來られる熱心さ。　**我も人目を**　句宮自身も人目を切に憚つて杜絶えがちにしてゐられたのであるから、浮舟ばかりを冷淡だと恨むやうもない。

敷きておろし奉る。句宮をわが御心地にも、あやしき有樣かな、斯かる好色の道で害を受けるのがおちでこれといつた生活は出來ない身だらうと思し續くるに、泣き給ふこと限りなし。心弱き人は、ましてはかばかしくはえあるまじき身なめり、いといみじく悲しと見奉る。いみじきあたを鬼に作りたりとおろかに思つて見捨てては置くまいと思はれるも、人の御有樣なり。ためらひ給ひて、

句「只一言もえ聞えさすまじきか。いかなれば、今更に斯かるぞと、誰か蔭に告口した者があらう猶人々のいひなしたるやうあるべし」と宣ふ。有樣委しく聞えて、侍從「やがてさおぼしめさむ日を、かねて・・・さぶべきさまにたばからせ給へ。斯く忝き事どもを見奉り侍れば、身を捨てても思ひ給へたばかり侍らむ」と聞ゆ。我も人目をいみじくおぼせば、一方に恨み給はむやうもなし。夜はいたく更けゆくに、この物咎めだてする犬の聲・絶えず、人々が犬を追ひ遠ざけるなど追ひさけなどするに、弓引き鳴らし、怪しきをのこどもの聲・・して、「火の用心火危し」などいふも、句宮は氣がせくので悲しさはいと心あわただしければ、歸り給ふ程、いへ

何處にか　匂宮の歌。泣きながら京に歸つてゆく「何處にか身をば捨てむと」は「知らぬ」のひゞきで「白」にいひ懸けた序であるが、同時に我が心持を表現したものである。「白雲のかからぬ山もなし」は「無く」のひゞきから「泣く」にいひ懸けた序詞である。「白雲のかゝらぬ山もなしは實景である。

いひきりつるよし　きつぱりお斷りして匂宮をお歸し申した旨を浮舟に語つたので。

かつは　一方悲しさに泣かずに居られないが、また一方右近等が浮舟は薫よりも匂宮を思ふのだと思ふだらうと斟酌されるの意。

怪しからむまみ　泣きあかした目もとの見苦しさを苦にしていつまでも寢てゐた。

帶打懸け　掛帶で賞の腰を肩に掛ける事で所謂ありし繪匂宮のかかれた繪。一〇四頁三行參照。

憂きさまに　死後にいやな評判をする人もあらうのが、今から考へて見ても恥しいけれども、生きてゐて、非難されたり笑はれたりするのを薫が耳にして、それへの無い女だと思ふだらう、それよりはましだと思ひつづけて。

歎きわび　煩惱で自殺しても、身體はなくなつてもいやな噂が殘つて世間に廣まるであらう事が氣に懸る。「流す」は川の緣語で入水しようと覺悟してゐるから用ひたのである。

人は皆　女房たちは引越の準備で。

皆たがひにたり　いつもとはすつかり別な氣持になつてしまつた。（抄）かやうの所へたよりて物のよりたる也（湖月抄）

羊の歩み　河海抄「歩々近ニ死地一人命亦如レ是（經文）屠所の羊歩の事也、唐土には羊牛を飼置て食時に望みて居所へ相具して殺す也、歩々に隨て死地に近づく、これを無常に喩る也」屠所の羊も命數の盡きる前であるそれよりも死が間近に迫つてゐるやうに思はれる。

末遠かるべき事を宣ひわたる人も、いかがおぼさむといとほしう、憂きさまにいひなす人もあらむこそ、思ひやり恥かしけれど、心淺く、けしからず人笑へならむを聞かれ奉らむよりは、と思ひつづけて、

歎きわび身をば捨つとも亡き影に憂き名流さむ事をこそ思へ

親もいと戀しく、例は殊に思ひ出でぬはらからの醜やかなるも戀し。宮のうへを思ひいで聞ゆるにも、すべて今一たびゆかしき人多かり。人は皆おのく〳〵物染めいそぎ、何やかやといへど、耳にも入らず。夜となれば、人に見付けられず出でてゆくべき方を思ひまうけつつ、寢られぬままに、心地もあしく、皆たがひにたり。明けたてば、河の方を見やりつつ、羊の歩みよりも、一程なき心地す。

匂宮の歎息後非常に恨めしく思ふ旨を浮舟について宮は心みじきことどもを宣へり。今更に人や見むと思へば、この御返りごとをだに、思ふままにも書かず。

からをだに　亡き骸をすらこの憂世の中に留める事なく跡形なくうせてしまつたならば、宮も恨み所がありますまい。

離れぬ御中　薫と匂宮とは叔父甥の間柄故。

いかになりけむと　どうなつてしまつたやらと誰にも分らずに終りたいものだ。

いとさわがしくて　貴女のわるい夢を見たので、無事安穏のお經をあちこちに依頼しました。

やがて　「寝られざりつる」を修飾する。

人の忌むといふ事　河海抄「解夢書曰夢見二病人一必死」

時々立寄らせ　薫のゆかりの人即ち女二宮の姨妬も怖ろしく。

夢の斯かるを　こんなわるい夢を見たのでいろ〳〵心配して居ります。

少将の方　左近少将の妻即ち常陸介の次女。

片時も立ち去る　一寸でも側を離れてはならないとやかましくいはれますので參られませぬ。

浮舟

からをだに憂世の中にとどめずば何処をはかと君も恨みむ

とのみ書きていだしつ。かの殿にも、今はの氣色見せ奉らまほしけれど、處々に書きおきて、離れぬ御中なれば、遂に聞きあはせ給はむこと、いと憂かるべし、すべて、いかになりけむと、誰にもおぼつかなくてやみなむ、と思ひかへす。京より母の御文もて來たり。寝ぬる夜の夢に、いとさわがしくて見え給ひつれば、誦經所々にせさせなどし侍るやがて參りこまほしきを、よろづになむ思ひ給ふる。折しも、夢の斯かるを、なほいと心もとなげに、物怪だちて惱みをれば、片時も立ち去る事と、いみじくいはれ侍りてなむ。

その近き寺にも御誦經せさせ給へ」とて、その料の物、文などを書き添へてもて來たり。限りと思ふ命の程を知らで、かくいひ續け給へるも、いと悲し、と思ふ。寺へ人やりたる程、返りごとを書く。いはまほしき事多かれど、つつましくて、ただ、

のちに又あひ見む事を思はなむこの世の夢に心まどはで

誦經の鐘の風につきて聞えくるを、つく〳〵と聞き臥し給へり。

鐘のおとの絶ゆる響にねを添へて我世盡きぬと君に傳へよ

くわんじゆもて來たるに書きつけて、「今宵はえ歸るまじ」といへば、ものの枝にゆひつけておきつ。乳母、「怪しく心ばしりのするかな。『夢もさわがしく』」と宣はせたりつ。宿直人よくさぶらへ」といはするを、苦しと聞き臥し給へり。乳母「物聞召さぬいと怪し。御湯漬」などよろづにいふを、さかしがるめれど、いと醜く老いなりて、われ無く・ばいづくにかあらむ、と思ひやり給ふも、いとあはれなり。世の中にえ・あり果つまじきさま

その料文　誦經の料即ち布施。僧への依頼狀。

寺へ人やりたる　布施や依頼狀を持たせて使を寺に遣したひまに。

のちに又　はかない今生の夢のやうなつまらない出來事には迷はずに、來世で再會するやうに祈つて下さい。

鐘のおとの　鐘の音の消えゆく餘韻にわが泣く音を添へつつ死んで行つたと母に傳へて下さい。

くわんじゆ　巻數。讀誦した經巻や陀羅尼などの名目や度數を記して木の枝につけて願主に送る文書。

さかしがるめれど　あんなに乳母が餘計な世話を燒いてゐるけれども、年をとつてきたなくなつて、私が死んだらどこで生きていくだらう。**世の中に**　天命を全うし得ない事情を。

まづおどろかされて　それと知つて流れ出る涙を斟酌して。

いづかたと　お二人の中の一方にきめて、それがどうならうと運に任していらつしやいまし。

を、（乳母に）ほのめかして・も言はむなどお・もぼすには、まづおどろかされて先立つ涙を、つつみ給ひて、物もいはれず。右近・そ・（浮舟程近く）臥すとて、「右近」かくのみ物をおもほせば、物思ふ人の魂は（身を抜け出る）あくがるるものなれば、・御（母君の夢もそれ故に）夢もさわがしきならむかし。いづ・しかたとお・も・ぼし定まりて、いかにも〳〵おはしまさなむ」と打歎く。（浮舟は）なえたる衣を顔に押しあてて臥し給へりとなむ。

かしこには、人々、浮舟のおはせぬを求めさわげどかひなし。物語の姫君の、人に盗まれたらむあしたのやうなれば、古物語の筋と同様だからくはしくもいひ続けず。母君から京より、使者をおこせたり。「ありし使の帰らずなりにしかば、おぼつかなし」とて、又人おこせたり。「まだ鶏鳥の鳴くになむ私を出発せしめられてさせ給へる」と使のいふに、いかに聞えむと、乳母より初めて、あわて惑ふこと限りなし。思ひ得るかたなくて、ただ騒ぎあへるを、かの心知れるどちなむ、浮舟のいみじく物を思ひ給へりしさまを思ひいづるに、身を投げ給へるか、とは思ひ寄りける。母からのこの文をあけたれば、母「いとおぼつかなさに思ひ続けず、まどろまれ待らぬけにや、今宵は夢にだに打解けても見えず、物におそはれつつ、心地も例ならずうたて侍るを、なほいと怖ろしく。物へわたらせ給はむことは近くなれど、その程、ここに迎へ奉りてむ。今日は雨降り侍りぬべければ。よべの御返りをもあけて見て、右近も

かしこには　宇治の山荘では。
物語の姫君の出されたといふ筋　姫君が男に盗み出されたといふ筋の物語が当時多かつた事が知られる。
ありし使　母君から文を持参した使者。
いかに聞えむ　何と返事したものかと。
思ひ得るかたなくて　うまい思案がつかなくて。
かの心知れる　内情を知つて居つたあの右近と侍従とは。
夢にだに　直接逢ふ事は出来なくても夢には見る事も出来るのに、その夢にすらゆつくりともあなたの姿を見る事が出来ず。本妻方の呪咀などが有りはせぬかと怖ろしく。
いと怖ろしく　物へわたらせぬ　薫の御方へ引取られる日も間近ですが、それ迄の間私方へお迎へ申しませう。
今日は雨降り　今日は雨降りだからお迎へする事も出来ないが。
よべの御返り　昨晩浮舟が認めた母君への返書。

さればよ「のちに又あひ見む」などと死を覺悟して居つた事が今分つたのである。

麈ばかり少しも隔意なく親しくし馴れて居つたのに。

氣色をだにそのそぶりをすら見せなさらなかつたのが恨めしい。

いみじく思したる右近の心に浮舟の事を思ふのである。

かくなべてならずかやうな並はづれた大變な事を思ひ付かれるものとは考へられなかつた浮舟の御性質だのに。

なか〳〵餘りの悲しさに却てあれこれと考へて見ることも出來ないで。

いと例ならぬ樣子の變つて居つた浮舟の返事に。一六〇頁の「からをだに憂き世の中に云々」の歌の事。

さすがに修飾する。「あだなる心なり」を

ほかへいき隱れむどこかへ隱れる積りであんな返事をよこしたのかも知れぬと。

いみじく泣く。されば(浮舟の心中を)よ、心細きことは聞え給ひけり、我に、などか聊か宣ふ事のなかりけむ、をさなかりし程より、つゆ(も)(浮舟から隱し立てされた事なく)心おかれ奉る事なく、塵ばかり隔てなくてならひたるに、今は(死出の旅路に)限りの道にしも、我をおくらかし、氣色をだに見せ給はざりけるがつらき事、と思ふに、足ずりといふ事をして泣くさま、若き子どものやうなり。(侍從)・・いみじく思したる御氣色(浮舟の)は見奉りわたれど、かけても、かくなべてならずおどろ〳〵しき事(自殺の事)、おぼし寄らむものとは見えざりつる人の御心ざまを、なほ、いかにしつる事にかと、おぼつかなくいみじ。乳母は、なか〳〵物も覺えで、ただ、「いかさまにせむ、いかさまにせむ」とぞいはれける。

匂宮にも、いと例ならぬ氣色ありし御返り・、(浮舟が)いかに思ふならむ、我を、さすがに、(自分(浮舟)を愛して居つて下さるやうだが浮氣だからあてにならぬ)あひ思ひたるさまながら、あだなる心なりと(人々は)のみ深く疑ひたれば、ほかへいき隱れむとにやあらむと思しさわぎて、御使(匂宮から)あり。(宇治の邸内の人々が)ある限り泣きまどふ程に(使者が)來て、御文もえ奉らず。(使「いかなるぞ」と下衆女(げすをんな)に問へば、(浮舟が今晩急死されたので)玄「うへの、今宵俄に亡せ給ひにければ、さぶらひ給ふ人々は、ただ物に當りてなむ惑ひ給ふ」といふ。心も深く知らぬをのこにて、くはしう(く)も問はで參りぬ。斯くなむと・申させたるに、(使者が匂宮に)夢・と覺えていと怪し。いた(以下匂宮の心)く煩ふとも聞かず、日頃惱ましとのみありしかど、昨日の返りごとはさりげもなくて、常よりもをかしげなりしものを、と思(想像)しやる方なければ、(匂「時方、いきて氣色見、たしかなる事問ひ聞け」と宣へば、(時方)「かの大將(薫)殿、いかなる事か聞き給ふ事侍りけむ、『宿直する者おろかなり』など、いましめ(叱責なさる)仰せらるると・て、下人(しもびと)のまかりいづるをも、見咎め問ひ侍るなれば、ことづくる事なくて時方まかりたらむを、物の聞え侍らば、思しあはする事などや侍らむ。さて俄に人の亡せ給ひつらむ所は、(浮舟のなくなられた宇治では)ろなうさ(無論)

心も深く知らぬこの御使は事情をよくも知らぬ男故、委しく尋ねても見ずに京へ歸り參つた。

いたく煩ふとも浮舟が重病だとも聞かないし、此頃中氣分がすぐれないとだけはあつたが、昨日の返事は何のけぶりもなくて、いつもよりは却つて面白く書いてあつたのに。

いかなる事か何事かお耳にはひつた事があつたと見えて。

宿直する者番人が怠慢でいけない。

ことづくる事なくて何か口實にする用事もないのに私が宇治へ參りまして、それが薫のお耳に入りましたならば、こちらの祕密を悟られる虞れがございませう。

いとおぼつかなくて　事情不明の儘ではすまされない。

いかなる事を　どうしたといふのでさう騒いでゐるのかと尋ねて見よ。下々の者といふものはとかく間違つた事もいふものだ。

かやすき人は　時方のやうな身分の輕い人は出あるきが簡單であるから。

わりなき道に　道中が難儀故身なりをやつして下衆の服裝で來て見た處が。

右近に消息　時方は右近に來意を通じたけれども、取込み中で逢へない。

今宵ばかりこそ　こちらにお越し下さるのも今晩限りでせう、それだのにお話も出來ないのが殘念です。

かくおぼつかなく　こんなに不得要領では歸られませぬ。も一人の方（侍從）になりとお目に懸りたい。

いみじといふにも　いくら悲しいといつて見たところで、あまりにもあつけなく夢のやうな氣がして、一同途方にくれてゐる由を申上げて下さい。

わがしく、人しげく侍らむを」と聞ゆ。（弔式の手傳ひなどの爲）「さりとて、いとおぼつかなくてやあらむ。なほとかくさるべきさまに構へて、例の心知れる侍從などにあひて、『いかなる事を斯くいふぞ』とあ（案内）ないせよ。下衆は僻事もいふなり」と宣へば、いとほしき御氣色も、飽かず夢のやうにて、誰も〳〵惑ひ侍るよし・申させ給へ。すこし心地もの・落着いてから今迄浮舟が物思ひに耽つてゐられたさまやどめ侍りてなむ、日頃も物おぼしたりつるさま、一夜いと心苦しと思ひ聞えさせ給へりし有樣なども、聞えさせ侍るべき。このけがらひなど、人の忌み侍る程過ぐして、立寄り給へ」といひて、泣く事・いみじ。內にも泣く聲々のみして、乳母なるべし、「あが君や、いづ方にかおはしましぬる。歸り給へ。むなしきからをだに見奉らぬが、かひなく悲しくもあるかな。明暮見奉りても飽かず覺え給ひ、いつしかかひある御さまを見奉らむと、あした夕べに「頼み聞えつるにこそ命も延び侍りつれ。うち捨て給ひて、かく行方も知らせ給はぬこと。鬼神も、あが君をば、え・らうじ奉らじ。人のいみじく惜しむ人をば、帝釋も返し給ふなり。あが君を取り奉・・らむ、人にまれ鬼にまれ、返し奉れ。なき御からをも見奉らむ」といひつづくるが、心得ぬ事どもまじるを、あやしと

いとおぼつかなくて　事情不明の儘ではすまされない。

いかなる事を　どうしたといふのでさう騒いでゐるのかと尋ねて見よ。下々の者といふものはとかく間違つた事もいふものだ。

かやすき人は　時方のやうな身分の輕い人は出あるきが簡單であるから。

わりなき道に　道中が難儀故身なりをやつして下衆の服裝で來て見た處が。

右近に消息　時方は右近に來意を通じたけれども、取込み中で逢へない。

今宵ばかりこそ　こちらにお越し下さるのも今晩限りでせう、それだのにお話も出來ないのが殘念です。

かくおぼつかなく　こんなに不得要領では歸られませぬ。も一人の方（侍從）になりとお目に懸りたい。

いみじといふにも　いくら悲しいといつて見たところで、あまりにもあつけなく夢のやうな氣がして、一同途方にくれてゐる由を申上げて下さい。

一夜いと心苦しと　先夜匂宮に無駄足を踏ませて氣の毒がつてゐられた事なども申上げませう。

あが君　浮舟を呼ぶのである。

明暮見奉りても　毎日お顏を見て居つてもまだ見足りないと思ひ、早く立派な緣について生きがひのある御生活をなさるのを見たいと、朝夕それをあてにして居たればこそ今迄命が續いて來たのです。

えらうじ奉らじ　領の字。自分のものにする事は出來まい。

帝釋も返し給ふ　帝釋は忉利天の主。帝釋が人の死せるを返した故事があらうけれども明かでない。

心得ぬ事ども　前には今晩葬式を營むといつて居りながら、乳母は死骸がないと歎いてゐるから時方はそれを不審がるのである。

たしかに聞召さむと　句宮が事情をたしかめたい爲に名代として遣はされた大事な使者なのです。

たがふ事まじらば　私の復命と矛盾した事でもあつては。

又さりともと　いくら何でも死なれる事はあるまいと、それを當てにして貴女方に對面して事情をたしかめて來よと仰せられたお心持をありがたいとは思はれませぬか。

人のみかど ふかきためし　異朝、支那の事。迷ひ方が深いのをいふ。

又かかる事　句宮が浮舟に對する程の深い戀は他にあるまい。

かくて例ならぬ　こんなとつぴな事といふものは自然知れて來るものだ。

などか　「惑ひ侍らむ」を修飾する。

門かにても　「思ひ寄るべき事あらむには」を修飾する。誰か浮舟を隱されたに違ひないと思ひ當るやうなふしが一寸でもありますならば、何でこんなに皆が途方にくれて居りませう。思ひ當るふしがない、從つて生存が覺束ないのですの意。

この御事をば　浮舟は匂宮を胸一つに勿體ない戀しいと心から思つてゐられたので精神も狂つたのでせう。

心と身を　われとわが命を絕たれたやうですから、一同途方にくれて居りますあまりに、辻褄のあはないやうな事をしやべつてゐられるのでせう。

さすがに　事實を話しながらもさすがに。

立ちながら　立ちながら御悔み申すのもあまり事が簡略に過ぎるやうです。

今更人の知り　匂宮との關係が今更人に知られるのも、故浮舟の爲には却て結構な運命である事が分る譯のものではあるが。

忍び給ひし　匂宮との關係を浮舟は祕密にして居られたのですから、他にお漏らしにならずに濟まして下さるのが故人に對する御好意でせう。

じねんに　自然とそぶりにそれと時方に氣どられる虞がある。

とかくそのかし　いろ〳〵勸めて時方を早く歸らせた。

思ひて、時方「なほ宣へ。浮舟を もし人の隱しも聞え給へるか。たしかに聞召さむ、と御身の代りにいだし立てさせ給へる御使なり。今は、とてもかくてもかひなき事なれど、のちにも聞召しあはす る事の侍らむに、たがふ事まじらば、參りたらむ御使の罪になるべし。又さりともと頼ませ給ひて、君だちに對面せよと仰せられつる御心ばへも、忝しとは思されずや。女の道にまどひ給ふ事は、人のみかどにも、ふかきためしどもありけれど、又かかる事・この世にはあらじとなむ見奉る」といふに、げにいとあはれなる御使にこそあれ、隱すとすとも、かくて例ならぬ事のさま、おのづから聞えなむ、と思ひて、「などか、聊かにても、人や隱い奉り給ふらむと思ひ寄るべき事あらむには、斯くしもある限り惑ひ侍らむ。日頃いといみじく物を思し入るめりしかば、かの殿の、煩はしげにほのめかし聞え給ふことなども ありき。御母に物し給ふ人も、斯くのしる乳母なども、初め

の方に引取られてゆくやうにと準備にかゝつてをりました より知りそめたりし方に渡り給はむとなむ急ぎ立ちて。この御事をば、人知れぬさまにのみ、忝くあはれと思ひ聞えさせ給へりしに、・・御心亂れけるなるべし。あさましうて、心と身をひつづけらるるなめり」と、さすがにまほならずほのめかす。時方は心得がたく思ひて、時方「さらば、のどかに參らむ。立ちながら侍るも、いと事そぎたるやうなり。今御みづからもおはしましなむ」といへば、あなかたじけな、今更・人の知り聞えさせむも、なき御ためは、なか〳〵めでたき御宿世見ゆべき事なれど、忍び給ひし事なれば、又漏らさせ給はでやませ給はむなむ・・御志に侍るべき、ここには、かく世づかず亡せ給へる由を人に聞かせじとよろづにまぎらはすを、じねんに事どもの氣色もこそ見ゆれ、と思へば、とかくそのかしやりつ。

雨のいみじかりつる紛れに、母君のわたり給へり。更にいはむ

目の前に　見てゐる前で死なせたならば、その悲しさは切なるものがあつても、それは世間並の事で他に例のある事です。

かかる事どもの　かうした匂宮との間違ひがあつて深く心痛してゐられたとも知らないから。

さてはかの怖ろしと　浮舟がかねて〳〵怖れて居つた女二宮の方に仕へてゐる腹黒い乳母でも。

たばかりたる　浮舟を誘拐した人でもあらう。

今参りの　新参で氣心の知れぬ女房でも居ないか。

ここにて　此處では碌な仕事も出來ず。

今とく参らむ　すぐ歸つて参ります。

皆その急ぐべき　京へ引越しの支度物を携へて歸宅してしまひました。

方もなく、母「目の前に亡くなしたらむ悲しさは、いみじくとも、世の常にてたぐひある事なり。浮舟はこれはいかにしつる事ぞ」と惑ふ。かかる事どもの紛れありて、浮舟がいみじう物思ひ給ふらむとも知らねば、身を投げ給へらむとも思ひも寄らず、鬼やくひつらむ、狐めくものや取りもていぬらむ、・・昔物語の怪しき物の事の譬ひにか、さやうなる事もいふなりし、と思ひいづ。さてはかの怖ろしと思ひ聞ゆるあたりに、心などあしき御乳母やうの者や、薬が浮舟をから迎へ給ふべしと聞きて、浮舟を惱んでめざましがりて、たばかりたる人もやあらむ、と下衆などを疑ひ、「今参りの心知らぬやある」と問へば、女房「いと世離れたりとて、居馴れぬ新参者はありならはぬ人は、ここにてはかなき事もえせず、『今とく参らむ』といひつつなむ、皆その急ぐべきことどもなど取り具しつつ、歸り出で侍りにし」とて、故参の女房ですら一部分は居らずもとよりある人だに、かたへはなくて、いと人ずくなな る折になむありける。侍従などこそ、日頃の御氣色思ひ出で、

き影なに　一五九頁にあつた浮舟の歌。

河の方を　浮舟は入水したものと考へてゐるから。

さて亡せ給ひけむ　さうして卽ち入水して死なれた浮舟だのにそれを行方がわからないものの、きうに騒ぎ立てて、母君や薫や匂宮などが、浮舟は亡くなられたか、姿を隱されたか、一體どうなれたのかと、右近や侍從が隱しもしたのではなからうかと私達をお疑ひになるのも、私達に迷惑な事だ。

忍びたる　以下右近侍從二人相談の詞。あの祕密の一件とても浮舟から進んでなされた事でもない。親としてゐて死後に聞かれてもしかるべき事でもないのに、恥かしい事でもなんでもない高貴の方だのに、相手は匂宮といふ事は明らかだし、いつそ打明けて、死の悲しさの上にどうなつたやら分らないといふ不安までも取添へて、あれこれと思案に餘つてゐられるのを、すこしでも合點のゆくやうにしてあげませう。

もてあつかふ　死骸を前にして葬式を營むといふのが世間の常なのです。

世づかぬ氣色にて　死骸もないといふ世間並はづれた有樣で幾日も立つては。

「身を失ひてばや」など泣き入り給ひ・し折々の有樣、書きおきへる文をも見るに、「なき影に」と書きすさび給へるものの、硯の下にありけるを見つけて、河の方を見やりつつ、響きのごとかくいひさわぎて、いづくにもいづくにも、しる水の音を聞くにも、うとましく悲しと思ひつつ、侍從「さて亡せ給ひけむ人を、いかなる方になり給ひにけむと思し疑はむも、・・いとほしき事」といひあはせて、「忍びたる事とても、・・御心より起りてありし事ならず。親にて、なき・のちに聞き給へりとも、いとやさしき程ならぬを、ありのままに聞えて、かくいみじくおぼつかなき事どもをさへ、かた〴〵思ひ惑ひ給ふさまは、すこしあきらめさせ奉らむ。亡くなり給へる人とても、骸をおきてもてあつかふこそ世の常なれ。世づかぬ氣色にて日頃も經ば、更に隱れあらじ。なほ聞えて、今は世の聞えをだにつくろはむ」と語らひて、忍びてありしさまを聞ゆるに、いふ人も消え入り、

さば　以下母の心。

何のかひ侍らじ　「かひ」は貝のひゞきがあるので、「大海の原」の縁語。

さるものから　さうでございますのに。死體は大海に沈んで到底探し出されませぬ、それだのに無駄な川探しをするのは、世間に事實を知らせるやうなもので、結局世間の話題になるの意。

御座ども　浮舟が生前に敷いた茵。

乳母子の乳母君　浮舟の乳母の子なる母君乳母といふべきところを、乳母母君と轉倒させたのは、ゆゝしと慟哭する度合を示したものか。乳母は何も事情を聞いてゐなかつたから、ゆゝしむことも甚しかつたのであらう。

いみじくゆゆしと　非常に悲しく且つ忌はしいと。乳母は浮舟の死を知らないから、生死も分らぬのに死人扱ひをするのは忌はしいと思ひ、母は浮舟の死を想像してゐたけれども、死骸を見たのではないから、あきらめられない心持があるので、死んだものとして扱ふのは忌はしいと思つたのである。

大夫内舎人　薫の家人で宇治の宿直人である。大夫は右近大夫で内舎人の婿。

おどし聞えし　浮舟をこはがらした連中。浮舟巻一四七頁。

殊更に　わざと今晩中に取り行はう。ごく内々でと思ふ子細があるから。

この案内知りたる　宇治邸の事情に通じてゐる法師だけで。

いとはかなくて　屍體が無いからである。

田舎人どもは　田舎人達は都の人より却つて葬式には鄭重な禮を盡し。

いと怪しう　甚だ變だ。

かたへおはする人は　兄弟のある人はわざと葬式を簡單にするのが京人の常だ。一八二頁。

かかる人どもの　かうした田舎人達の手前すら憚られるのだもの。以下右近の心。

まして　「思ほし疑ふ」ことをも修飾する。

同じ御中らひにて　宮も薫も浮舟と同じ關係にある人だから、薫の疑ふと同樣の疑ひをなさるだらうの意。

さる人の　當分の間こそ薫は浮舟が匂宮方に忍び隱れてゐると思はれるであらうが、薫と匂宮とは近親の間柄故、浮舟が匂宮方にゐられるか否かは結局は明白にならう、又薫が匂宮を疑はれるとも限つたものでもない、誰か外の人が隱したのでだらうなどいふ事も考へられるだらう。

えいひやらず。聞く心地も惑ひつつ、さば、このいとあらましと思ふ河に流れうせ給ひにけりと思ふに、いとど我もおち入りぬべき心地して、かゞ〳〵しくをさめむ」と宣へど、右近等「更に何のかひ侍らじ。ゆくへも知らぬ大海の原にこそおはしましにけめ。さるものから、人のいひ傳へむ事は、いと聞きにくし」と聞ゆれば、とざまかうざまに思ふに、胸のせきのぼる心地して、いかにもいかにもすべき方も覺え給はぬを、この人々二人して、車寄せさせて、御座ども、け近う使ひ給ひし御調度ども、皆ながらぬぎおき給へる御衾などやうの物を取り入れて、乳母子の大徳、それが叔父の阿闍梨、その弟子の睦まじきなど、もとより知りたる老法師など、御忌にこもるべき限りして、人の亡くなりたるけはひにまねびて出だし立つるを、乳母、母君は、いといみじくゆゆしと臥しまろぶ。大夫、内舎人など、おどし聞えし者どもも參りて、「大夫等」御葬送の事は、殿に事の由申させ給ひて、日定め咸儀を正してられて、いかめしうこそ仕うまつらめ」などいひけれど、右近「殊更に今宵過ぐすまじ。いと忍びて、と思ふやうあればなむ」と葬途を更に、この車を、向ひの山の前なる原にやりて、人も近うも寄せて、この案内知りたる法師の限りして燒かす。いとはかなくて煙は果てぬ。田舎人どもは、なか〳〵斯かる事を事々しくしなし、言忌など深くするものなりければ、「いと怪しう。例の作法など、ある事どもも、當然すべき作法もし給はず、下衆々々しく、あへなくてせられぬる事かな」と譏りければ、「かたへおはする人は、殊更に斯くなむ京の人はし給ふなる」など、さま〴〵になむ安からずいひける。かかる人どものいひ思ふ事だにつつましきを、まして、物の聞え隱れなき世のなかに、大將殿わたりに、骸もなく亡せ給ひにけりと聞かせ給はば、必ず薫思ほし疑ふこともあらむを、宮はた、同じ御中らひにて。匂宮も浮舟が匂宮方にさる人のおはしおはせず、

いみじき事をや　「いかなる人かるて隠しけむ」を受けたものである。どんな男に誘拐されたのかわからぬ卽ち名もないものに盜まれたかも知れないといふ疑を指したものである。

ここの内なる　宇治邸内の下部達にも、今朝の狼狽りに變事のあつた事を感づいてゐる人に（存生中には高貴な御緣のあつた浮舟が）は口どめをし、樣子を知らない者には聞かせぬやうに工作をした。

ながらへてば　この痛心の爲に死ぬかも知れぬが、若し生きてゐたら、どなたにもゆつくり事情をお話致しませう。只今は御話する氣力もありませぬ。それがかといつて、その間に薫や匂宮が悲しみもさめるやうな噂をふと人の口からお聞きになるやうな事があつては、やはり迷惑な立場になると思ふといつて祕しがくしにしてゐた。

石山にこもり　御母女三宮の御病氣平癒の新禱の爲に。

さていとど　宇治に行かれぬので浮舟の事が一入氣になるけれども、はつきり事情を語る人がなかつたので。

人目も心憂しと　宇治邸の人々が外聞わるがつてゐる時に薫の領地の管理者が石山にやつて來て浮舟の事を告げたので。

いみじき事は　そんな一大事は聞くなりすぐに自身參上すべきですが。

日を限りて　日限を定めての參籠ですから直は行かれませぬ。

などか　「急ぎせられにける」を修飾する。

とてもかくても　鄭重にしても簡略にしても、どうせ仕方のない事なのだが、一生の終りの葬式だといふのに、田舍者からわる口をさへいはれるといふ事は、私としても心苦しい。御使の來たるに薫から使者が來たにつけても一層悲しくて。

涙におぼほれ　涙に溺れて物がいへないといふ事を口實にして返事らしい返事もせずにしまつた。

心憂かりける　宇治といふ所はいやな所であつた。

思はずなる　匂宮が忍んで通はれるといふやうな意外な間遊が起つたのも。

暫しこそ忍ぶとも思さめ、遂には隱れあらじ、又定めて宮をしも疑ひ聞え給はじ、いかなる人かゐて（浮舟）隱しけむ、などぞ思し寄せむかし、生き（存生中には高貴な御緣のあつた浮舟が）給ひての御宿世は、いとけ高くおはせし人の、げに亡き影に、いみじき事をや疑はれ給はむ、と思へば、ここの內なる下人どもにも、今朝のあわただしかりつる惑ひに、氣（浮舟）色も見聞きつるには口がため、案內知らぬには聞かせじ、などぞたばかりける。（右近等）「ながらへてば、誰にも、靜やかに、ありしさまをも聞えてむ。只今は。悲しさ（匂宮が）さめぬべき事、ふと人づてに聞召さむは、なほいといとほしかるべき事なるべし」と、（侍從の）大將殿は、（女三宮の）入道の宮の惱み給ひければ、石山にこもり給ひて、（と右近の）人二人ぞ、深く心の鬼添ひたれば、（匂宮の戀の幇助者であるから）もて隱しける。

（薫）

（失踪の事）

（女三宮）

（薫や匂宮が）

御庄（さう）の人なむ參りて、（石山へ）しか〳〵と（薫に）申させければ、（薫は）あさましき心地し給ひて、（薫の見舞の使者が）御使、その又の日、まだつとめて（宇治に）參りたり。使（いみじき事は、聞くなまにみづから物すべきに、（薫の）かく惱み給ふ・（御）事はするものを、いとかろらか（輕々しい仕方で）なるさまにて、急ぎせられにける（女三宮が）る。とてもかくても、同じいふかひなさなれど、とぢめの事をしも、山賤の謗りをさへ負ふなむ、（薫自分の事）ここの爲もからき」など、かの睦まじき大藏（仲信の事）の大夫（輔）して宣へり。御使の來たるにつけても、いとどいみじきに、聞えむ方なき事どもなれば、ただ涙におぼほれたるばかり・・をかごとにて、はか〳〵しう（く）もいらへ（やら）・・ずなりぬ。殿は、なほいとあへなく（あつけなく悲しいと）いみじと聞き給ふにも、（薫の心）心憂かりける所かな、鬼などや住むらむ、などて今までさる所にする（浮舟を）たりつらむ、思はずなる筋の紛れあるやうなりしも、かく放ち（浮舟たこう）

わがたゆく 自分の緩慢な世間並外れて戀路にうとい心が悔しくて。

惱ませ給ふ 御母女三宮の御病氣平癒の祈禱に山籠して居りながら、浮舟の事で煩悶してゐるのも異な事故。

事々しき 大した事でもありませんが、近親中に不吉な事を聞きましたので、心の落着かない間だけでも遠慮して御側には參りませぬ。

うつつの世には 浮舟の在世中は、なぜ自分はあんなに熱も持たず暢氣に過した事だらう。

かかる事の筋に 自分は女のひどく苦勞する運命であつたのだ。

例の人 俗人。

人の心を 人に道心を起させようとして佛のなさる方便は。

あなれ、と思ひつづけ給ひつつ、行ひをのみし給ふ。

かの宮はた、まして二三日は物も覺え給はず。うつし心もなくさまにて、いかなる御物怪ならむ、など騷ぐに、やう〳〵涙盡し給ひて、思しづまるにしもぞ、ありしさまは戀しういみじく思ひ出でられ給ひける。人には、ただ・・御病のおもきさまをのみ見せて、斯くすずろなるいやめの氣色知らせじと、かしこくもて隱すと思しけれど、おのづからいとしるかりければ、人々「いかなる事に斯く思しまどひ、御命も危きまで沈み給ふらむ」といふ人もありけれど、さればよ、なほよその文通はしのみにはあらぬなり き給ふに、案の定、かの殿にも、いとよくこの御氣色を聞けり、見給ひてば、必ずさ思しぬべかりし人ぞかし、ながらへましかば、ただなるよりは、わが爲にをこなることも出で來なまし、と思すになむ、こがるる胸も、すこしさむる心地し給ひける。

思ししづまる 心が落着いてくるといふと、浮舟生前のさまが戀しく悲しく追想される。

かしこく うまく人前を取繕つた積りではゐられるけれども、自然歎きのさまが目だつので。

この御氣色を 匂宮の御様子をお聞きになるので。

なほよその やはり表面の文通だけといふやうな遠い關係だけではなかつたのだ。

見給ひてば 匂宮が御覽になつてはおかぬと思召しさうなものにはぜひわがものにせずにはゐられぬ浮舟だ。

ながらへましかば もし浮舟が生きて居つたら、親しい身内同志であるだけに、普通の場合よりは、自分にとつて馬鹿を見る結果になる事必定だ。

事々しきは　大した身分でもない浮舟位の者の忌の爲に引籠つてゐて。

式部卿の宮　源氏の御弟で八宮の御兄。薫の御叔父。

服　喪。

心のうちに　薫は心中では浮舟の爲に著てゐる喪服の樣にも考へられて似合はしく思はれる。

人々まかでて　見舞の人々も匂宮から退出してしんみりとした夕暮である。

宮臥ししづみてのみ　本當の御病氣ではないのだからである。

見え給はむも　匂宮は薫におあひになるのも何となく氣がさすし。内心疚しい所があるから。

つつしむべき　氣をつけねばならぬ病氣だと皆が注意してくれるので。

げに　主上や母宮の御心配下さるのも御無理はないと世の無常さを思ふの意。

匂宮の御病氣見舞に

宮の御とぶらひに、日々に參り給はぬ人なく、世のさわぎとなれる頃、事々しきはならぬ思ひにこもりゐて、參らざらむもひがみたるべし、と思して、參り給ふ。その頃・式部卿の宮と聞ゆるも亡せ給ひにければ、・・御叔父の服にて薄鈍なるも、心のうちにあはれに思ひよそへられて、つき〴〵しく見ゆ。薫はこし面痩せて、いとどなまめかしき事まさり給へり。人々まかでて、しめやかなる夕暮なり。宮、臥ししづみてのみはなき・・御心地なれば、うとき人にこそ逢ひ給はね、御簾の内にも例入り給ふ人には、對面し給はずもあらず。見え給はむもあいなくつつましく、見給ふにつけても、いとど涙のまづせきがたさを思せど、思ひしづめて、おどろ〳〵しき心地にも侍らぬを、皆人は、『つつしむべき病のさまなり』とのみ物すれば、うちにも宮にも思しさわぐがいと苦しく、げに世の中の常なきをも、心細く思ひ侍る」と宣ひて、おしのごひ紛らはし給ふと思す涙の、やがて滯らずふり落つれば、いとはしたなけれど、必ずしもいかでか心得む、ただめめしく心弱きとや見ゆらむ、と思すも恥かし。さりや、ただこの事をのみ思すなりけり、いつよりなりけむ、我をいかにをかしと、物笑ひし給ふ心地に、月頃思しわたりつらむ、と思ふに、この君は悲しさは忘れ給へるを、こよなくもおろかなるかな、物のせちに覺ゆる時は、いと斯からぬ事につけてだに、空飛ぶ鳥の鳴きわたるにも催されてこそ悲しけれ、わが斯くすずろに心弱きにつけても、もし心を得たらむに、さいふばかり、物のあはれも知らぬ人にもあらず、世の中の常なき事を、しみて思へる人しもつれなきと、羨しくも心にくくも思さるるものから、眞木柱はあはれなり。これに向ひたらむさまも思しやるに、形見ぞかしともうちまもり給ふ。いとこめてしもはあらじと思し、やう〳〵世の物語聞え給ふに、昔より、心にこめて暫しも聞えさせぬこと殘し侍る限り

ただこの事を　匂宮は只管浮舟のあつたのだ。

我をいかにをかしと　「月頃思しわたりつらむ」に續く。

物笑ひし給ふ　匂宮はよく人の事を笑はれる方だから。

この君は　薫はさう考へると悲しさもさめた氣持でゐられるのに、匂宮はさうとは知らず。

こよなくも　薫といふ人は冷淡な人だ、欺きの切なる折には、こんな死別といふやうな事でなくてすら。

もし心を得たらむに　この涙を浮舟故とも、もし薫が感付いたならば、さまで人情を解せぬ人でもない。

世の中の常なき　世の無常を身にしみて感じてゐる人の方が却つて冷靜なものだ。

眞木柱は　浮舟の形見の薫を見ては感慨無量である。伊行釋引歌一わぎもこが來ては寄り添ふ槇柱そもむつまじやゆかりと思へば一

これに向ひたらむ　薫に對坐して居つたであらう所の浮舟のさまを想像して御覽になると。

必ずしもいかでか　これも浮舟故の涙だと感付くとはきまつたものでもあるまい、只女々しく氣が弱いのだとでも思ふ事だらう。

匂宮の御病氣見舞に

參らざらむも

（の）

（おほん）

（ぶく）

（うすにび）

薫は

（あらぬ）

（れい）

近しくない人

薫を

大した病氣でもないのに

浮舟の事が思ひ出されて

主上

浮舟との關係は

薫にかくさうとなさる涙

（うち）

（しもこめて）

浮舟の事をさう隱しておくでもあるまいと薫は思つて

（あだに申上げずに居る事のある間は）

いといぶせくのみ　胸に物がこだはつてゐる様な氣がして仕方がありませんでしたのにお話する機會が得られなかつたの意。

宿直などに　「えさぶらはず」に續く。格別の用事のない限りはお訪ねも出來ず、ずる〳〵に過して來ました。

同じゆかりなる人　大君の妹の浮舟が思ひがけない所にゐると聞きつけまして。

時々さて見つべくや　時々は逢ふ事も出來ようかと思ひました所、生憎女二宮と結婚した當時で、人からつまらぬ非難を受けさうな折でしたので。

又かれも　浮舟も私一人を力にしようといふ考へも別にないのではないかとは思ひましたが。「見給へつれど」は湖月抄本に「見給へつれど」とある。

やんごとなく　本妻として尊重してゐる積りならばともかく、世話もしてやると思つたりして別に不都合もないなどと思つたりして、氣樂な可憐な女と思つて居つた浮舟がはかなく死んでしまつたといふ意味では、世は無常であるといふ事で考へて見るだけでも悲しいことかうは　こんなに悲しさうな樣子を匂宮には見せたくないと怀へてゐるものは、いといぶせくのみ思う給へられしを、今はなか〳〵の上臈にて侍り、ましてお訪ねも出來ず、ずる〳〵に過して來ました。

宿直などに　「えさぶらはず」に續く。格別の用事のない限りはお訪ねも出來ず、ずる〳〵に過して來ました。

同じゆかりなる人　大君の妹の浮舟が思ひがけない所にゐると聞きつけまして。

時々さて見つべくや　時々は逢ふ事も出來ようかと思ひました所、生憎女二宮と結婚した當時で、人からつまらぬ非難を受けさうな折でしたので。

又かれも　浮舟も私一人を力にしようといふ考へも別にないのではないかとは思ひましたが。「見給へつれど」は湖月抄本に「見給へつれど」とある。

やんごとなく　本妻として尊重してゐる積りならばともかく、世話もしてやると思つたりして別に不都合もないなどと思つたりして、氣樂な可憐な女と思つて居つた浮舟がはかなく死んでしまつたといふ意味では、世は無常であるといふ事で考へて見るだけでも悲しいことかうは　こんなに悲しさうな樣子を匂宮には見せたくないと怀へてゐるものは、いといぶせくのみ思う給へられしを、今はなか〳〵の上臈にて侍り、ましてお訪ねも出來ず、ずる〳〵に過して來ました。

宿直などに　「えさぶらはず」に續く。格別の用事のない限りはお訪ねも出來ず、ずる〳〵に過して來ました。

同じゆかりなる人　大君の妹の浮舟が思ひがけない所にゐると聞きつけまして。

時々さて見つべくや　時々は逢ふ事も出來ようかと思ひました所、生憎女二宮と結婚した當時で、人からつまらぬ非難を受けさうな折でしたので。

又かれも　浮舟も私一人を力にしようといふ考へも別にないのではないかとは思ひましたが。「見給へつれど」は湖月抄本に「見給へつれど」とある。

やんごとなく　本妻として尊重してゐる積りならばともかく、世話もしてやると思つたりして別に不都合もないなどと思つたりして、氣樂な可憐な女と思つて居つた浮舟がはかなく死んでしまつたといふ意味では、世は無常であるといふ事で考へて見るだけでも悲しいことかうは　こんなに悲しさうな樣子を匂宮には見せたくないと怀へてゐるものは、

あやしく　落着いた薫にしては變だ、自分に對する怨みの意味があるのかも知れぬの意。

いかにとも　どうしたのかとお見舞も申上げたく思つては居りながら、特に隱しておいでの事と聞きましたので遠慮して居りました。

さる方にても　貴方の隱し妻にでも差上げたいと思つて居つた人なのです。ひよつとしたら貴方の隱し妻であつたかも知れませぬ、お邸に出入する緣故もあつたのですから。

御心地例ならぬ　御氣分のわるい間は、つまらぬ俗事にかゝりあつて御氣にとめられるのもつまらぬ事です。十分御大事に。

いみじくも　以下歸宅後の薫の心の中。

當時の御門后　現在帝位にまします主上と明石中宮とが。

とかうは見え奉らじ、をこなり、と思ひつれど、こぼれそめてはいととめがたし。（薫の樣子が幾分取亂し氣味なのを）氣色の聊か亂りがほなるを、（匂宮の心に）ほしと思せど、（匂宮は何げなく）つれなくて、「いとあはれなる事にこそ。昨日ほのかに聞き侍りき。いかにとも聞ゆべく思う給へながら、わざと人に聞かせ給はぬ事と聞き侍りしかばなむ」と、（何食はぬ顏して）つれなく宣へど、いと堪へがたければ、言ずくなにておはします。（薫「さ（匂宮も）

（中君と浮舟とは姉妹故）宮にも參りかよふべき故侍りしかば」など、（給）ほしと思せど、（匂宮は何げなく）つれなくて、「いとあはれなる事にこそ。昨日ほのかに聞き侍りき。いかにとも聞ゆべく思う給へながら、わざと人に聞かせ給はぬ事と聞き侍りしかばなむ」と、（何食はぬ顏して）つれなく宣へど、いと堪へがたければ、言ずくなにておはします。（薫「さ（匂宮も）

（中君と浮舟とは姉妹故）宮にも參りかよふべき故侍りしかば」など、（給）

（あてこすつて）すこしづつ氣色ばみて、（薫「おほん）る世の事聞召し入れ御耳驚くもあいなきわざになむ。よくつつしませ給へ」など聞えおきて、出で給ひぬ。いみじくも（匂宮は浮舟を）思したりつるかな、（浮舟の生涯ははかないものであつたが、八宮の御胤だけにさすがに高い緣を持つてゐた人だ）いとはかなかりけれど、さすがに高き人の宿世なりけり、當時の御門后の、（あれ程大事にされる匂宮は）さばかりかしづき奉り給ふ御子、顏かたちよりはじめて、只今の世にはたぐひおはせざめり、（匂宮に及ぶ人はない）